

# 古屋敷遺跡

## 発掘調査報告書

1995

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

ふるやしき

# 古屋敷遺跡

## 発掘調査報告書

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

# 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが平成5年度に発掘調査を実施した古屋敷遺跡の調査成果をまとめたものです。

古屋敷遺跡は、山形県の南西部に位置する小国町にあります。小国町は飯豊・朝日の二つの山地にかこまれ、荒川と横川の両側に開けた緑豊かな町です。

調査では、縄文時代早期から前期の竪穴住居跡と、同じ時代の土器や石器などが発見されました。ダムの工事用道路に係わる調査のため発掘面積は多くありませんが、縄文時代の集落を理解するうえでよい資料を得ることができました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜わりたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木場清耕

## 例　　言

- 1 本書は、建設省北陸地方建設局横川ダム建設事業に係る「古屋敷遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は建設省北陸地方建設局横川ダム工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査の要項は下記のとおりである。

遺跡名	古屋敷遺跡 (D O G F Y)	遺跡番号	平成2年度登録
所在地	山形県西置賜郡小国町大字綱木字箱ノ口字古屋敷		
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
調査期間	発掘調査 平成5年4月1日～平成7年3月31日		
現地調査	平成5年9月13日～平成5年10月15日	19日間	
資料整理	平成6年4月1日～平成7年3月31日		

### 発掘調査担当者

調査研究課長 佐々木洋治  
主任調査研究員 佐藤 庄一  
嘱託職員 飯塚 稔

### 資料整理担当者

調査研究課長 佐々木洋治  
主任調査研究員 佐藤 庄一  
嘱託職員 飯塚 稔  
嘱託職員 黒坂 広美

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、建設省北陸地方建設局横川ダム工事事務所、小国町、小国町教育委員会等関係機関の協力を得た。現地調査と報告書作成に当って、秦 昭繁氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、佐藤庄一、飯塚 稔、黒坂広美が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人、水戸弘美、真壁 建が担当し、全体について佐々木洋治が監修した。
- 6 遺物実測図のうち打製石器については、株式会社シン技術コンサルに実測業務を委託した。
- 7 資料のうち炭化材については、株式会社パレオ・ラボに放射性炭素年代測定分析業務を委託した。
- 8 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S D…溝跡 S K…土壌 S T…住居跡  
S X…性格不明遺構 E P…柱穴  
R P…一括土器 R Q…石器

- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N- $7^{\circ} 38'$ -Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/40・1/200縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
- (4) 遺構観察表中の（ ）内の数値は、検出部分の計測値を示している。
- (5) 遺構実測図中の▲印は縄文土器、●印は石器の出土場所を示している。
- (6) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/4で採録し、各々スケールを付した。
- (7) 土器拓影図で、外面部分は左側、内面部分は右側に表示している。
- (8) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (9) 遺物観察表中の（ ）内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。また、出土地点欄の層位で、Fは遺構覆土内出土、ローマ数字（I～V）は遺跡を覆う土層(基準層序)を示している。
- (10) 遺構覆土の色調の記載については、1987版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 自然環境	3
2 歴史的環境	3
III 検出された遺構	
1 遺構の分布	5
2 遺跡の層序	5
3 住居跡	8
4 土 壤・落ち込み遺構	16
IV 出土した遺物	
1 縄文土器	24
2 石 器	28
V まとめ	
1 遺物について	46
2 遺構について	47
参考文献	48
遺跡抄録	49
付編	
古屋敷遺跡の放射性炭素年代測定結果	付編 1

# 表

表 1 遺構観察表(1)	15
表 2 遺構観察表(2)	23
表 3 縄文土器観察表	27
表 4 石器属性表(1)	38
表 5 石器属性表(2)	39
表 6 石器属性表(3)	40
表 7 石器属性表(4)	45

## 挿 図

第1図 遺跡位置図	2
第2図 調査区概要図	4
第3図 遺構配置図	6
第4図 東西壁土層断面図	7
第5図 S T 1住居跡、S X 6落ち込み遺構	9
第6図 S T 3住居跡	10
第7図 S T 4住居跡、S X 10落ち込み遺構	12
第8図 S T 7・8住居跡	13
第9図 S T 9住居跡、S X 67・68落ち込み遺構	14
第10図 S K 2・12土壤、S K 4 1落ち込み遺構	17
第11図 S K 11・19・20・50・51土壤	19
第12図 S X 62～64落ち込み遺構、S K 73・75・80土壤	21
第13図 S K 54・59・66・76・105土壤、E P 96柱穴	22
第14図 縄文土器略測図	25
第15図 縄文土器拓影図	26
第16図 打製石器実測図(1)	30
第17図 打製石器実測図(2)	31
第18図 打製石器実測図(3)	32
第19図 打製石器実測図(4)	33
第20図 打製石器実測図(5)	34
第21図 打製石器実測図(6)	35
第22図 打製石器実測図(7)	36
第23図 石器接合資料実測図	37
第24図 磨製石器実測図(1)	42
第25図 磨製石器実測図(2)	43
第26図 磨製石器実測図(3)	44

## 図 版

図版 1	遺跡遠景	遺跡発掘前調査状況
図版 2	遺跡発掘風景	遺跡近景
図版 3	東半部遺構全景	S T 1 全景
図版 4	S T 3 全景	S T 4 全景
図版 5	中央部遺構全景	S X 6 全景
	S X 6 発掘状況	S X 6 - EL104
図版 6	S T 7・8・9 全景	S T 7 全景
図版 7	S T 8 石器出土状況	S T 8 全景
	S T 9 遺物出土状況	S T 9 土器出土状況
図版 8	西半部遺構全景	S X 10 全景
	S X 10 周辺遺構	S X 10 土層断面
図版 9	S X 62・63・64 全景	S X 41 全景
	S K 55 全景	R P 2 土器出土地
図版 10	北西隅拡張区遺構全景	南東隅遺構と横川
図版 11	縄文土器(1)	縄文土器(2)
図版 12	縄文土器(3)表面	縄文土器(3)裏面
図版 13	打製石器(1)正面	打製石器(1)背面
図版 14	打製石器(2)正面	打製石器(2)背面
図版 15	打製石器(3)正面	打製石器(3)背面
図版 16	打製石器(4)正面	打製石器(4)背面
図版 17	打製石器(5)正面	打製石器(5)背面
図版 18	打製石器(6)正面	打製石器(6)背面
図版 19	打製石器(7)正面	打製石器(7)背面
図版 20	打製石器(8)正面	打製石器(8)背面
図版 21	打製石器(9)	打製石器(10)・接合資料(1)
図版 22	接合資料(2)	
図版 23	石製品・磨製石器(1)	磨製石器(2)
図版 24	磨製石器(3)	

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

古屋敷遺跡は、山形県教育委員会が平成2年度に実施した小国地区基礎調査関連の表面踏査によって、新しく発見された遺跡である。畠地を中心に多数の石器片が採集されたため、遺跡の性格は縄文時代の散布地として登録されている。

当該地域には昭和62年度から、建設省北陸地方建設局により、荒川総合開発の一環として、洪水調整や流水機能の維持、工業用水、水力発電等の多目的ダム（横川ダム）が計画されており、平成5年度以降にダム建設工事が予定されたため、同じく山形県教育委員会が平成3年12月に試掘調査を実施して遺跡の内容を確認している。

調査は、横川ダム建設に先行して着手される県道付替え工事の計画路線で、遺跡にかかる区間を対象にした。この時は、雑木林を中心に7箇所から石器剝片が出土したが、土器が認められないと、時期の決定が出来ないでいる（文献1）。

この調査内容をもとに、山形県教育委員会が関係機関と遺跡の保存について協議を行った結果、財団法人山形県埋蔵文化財センターが建設省北陸地方建設局横川ダム工事事務所から平成5年度に委託を受け、発掘調査を実施することになったものである。

## 2 調査の経過（第2図、図版1・2）

古屋敷遺跡の範囲は、これまでの諸調査による成果から、東西約130m、南北約90mと推定されるが、今回の調査区域は県道付替え工事部分に限定している。道路は、遺跡の中央南寄りを東西に横切ることになる。

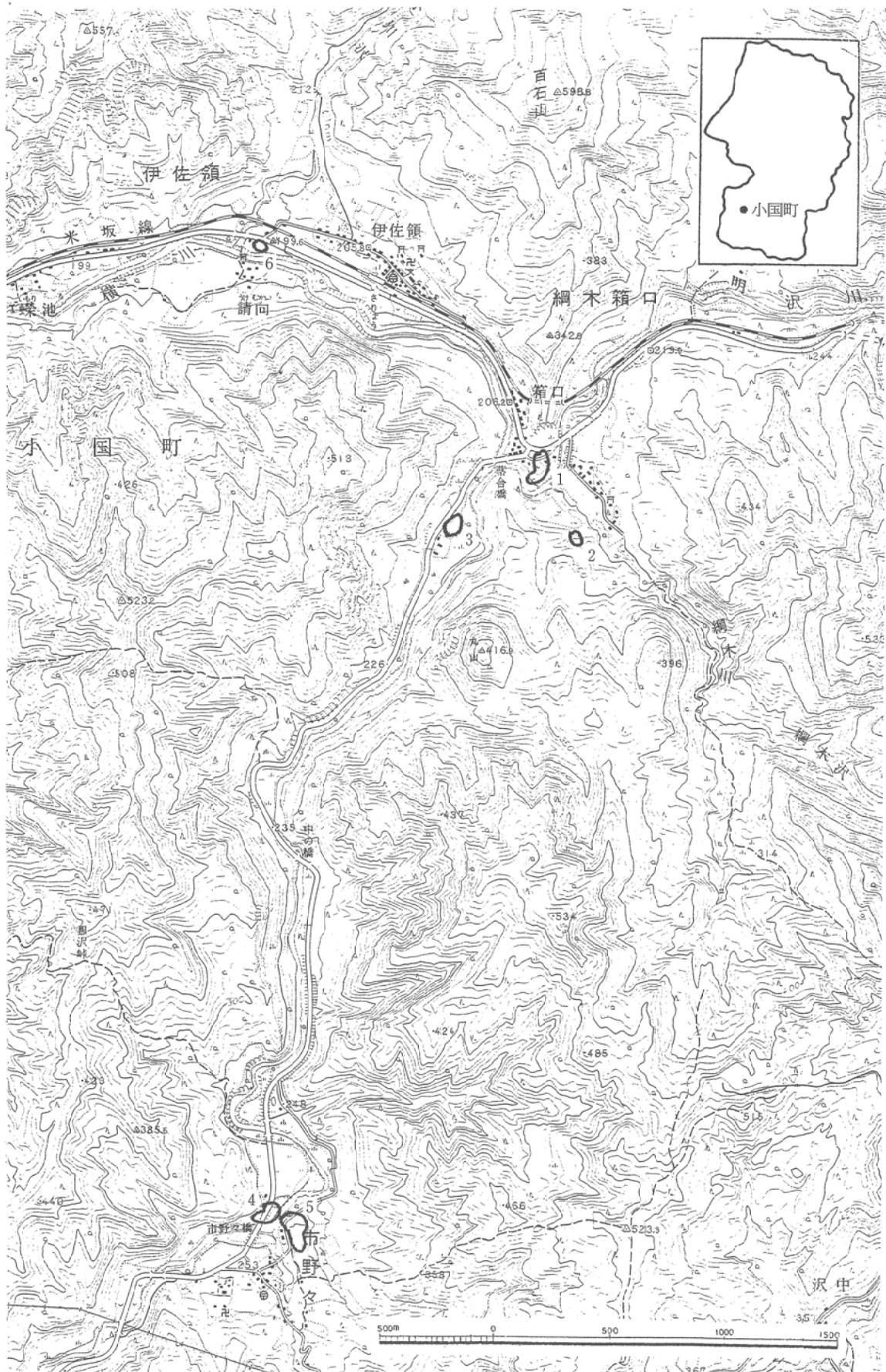
調査前に松や雑木の伐採を横川ダム工事事務所に依頼し、実際の発掘調査は平成5年9月13日から開始した。

調査は、まず重機を用いて表土を取り除き、次に土の状態を確認しながら、ジョレンで少しづつ全体の面を削り遺構の検出を行った。排土の関係があり、作業は東から順次西に向って行った。この段階で、縄文時代の堅穴住居跡や性格不明の落ち込み遺構や柱穴等が点々と検出されている。

さらに土色や土質に着目しながら、住居跡等を移植籠で丁寧に掘り進め、縄文時代の人々が残した痕跡や遺物（土器や石器）を図面に記録している。またこれと並行して、その都度写真撮影や遺物の取り上げを行なっている。

発掘調査の終了近くの10月12日に、調査の成果を地元の方々や関係者等に知っていたための調査説明会を遺跡現地で行い、多くの参加者をえた。また、10月13日には遺跡の写真撮影と遺構の平面実測図作成のための航空測量を実施している。現地の発掘調査は10月15日に終了し、同日に器材撤収を行った。

その後平成6年3月までは、埋蔵文化財センターで、図面や写真等の記録整理と遺物の洗浄・注記等の基礎整理を行い、平成6年度から本格的な整理作業に入り、今回の報告書作成に至ったものである。



1. 古屋敷遺跡 2. 綱木沢向遺跡 3. 千野遺跡

4. 市野々向原遺跡 5. 野向遺跡 6. 子妻坂遺跡

第1図 遺跡位置図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 自然環境（第1図）

古屋敷遺跡は、山形県西置賜郡小国町大字綱木箱ノ口字古屋敷に所在する。小国町市街地の東方約7.5kmにあり、横川の支流である明沢川の左岸に立地する。

山形県の南西部に位置し新潟県と接する小国町は、北を朝日山地、南を飯豊山地に囲まれた低山地帯で、大部分が中山性の山地と丘陵からなっている。低地は、荒川水系沿いの小国盆地となっている。この地域は寒暖の差が大きく、全国有数の豪雪地帯である。

荒川水系は、本県で唯一他県を流れる河川であり、新潟県関川村を通り日本海に注いでいる。県南部の飯豊山地から横川が北上し、朝日山地から南下する荒川と小国町の市街地西部で合流し、さらに北上する玉川、足水川を併せて流れる。

明沢川は、柴倉山と飯豊山地一帯から流れる沢が合流したもので、JR米坂線とほぼ平行して流下し、伊佐領付近で横川と合流する。

古屋敷遺跡はこの合流地点のすぐ東側に位置し、明沢川の河岸段丘に沿って東西130m、南北90mの範囲に広がっている。標高は、約209mを測り、明沢川の河床面とは20mの段差を有している。

表層の地質は礫、砂及び粘土からなる未固結の堆積物で、もう少し山側にいくと「箱ノ口墨層」と呼ばれる砂岩や珪岩からなる古生層にあたる。土壤は腐植質の黒ボク土となっている。遺跡の地目は、松林、雜木林、畑地、果樹園、宅地、道路など多様である。

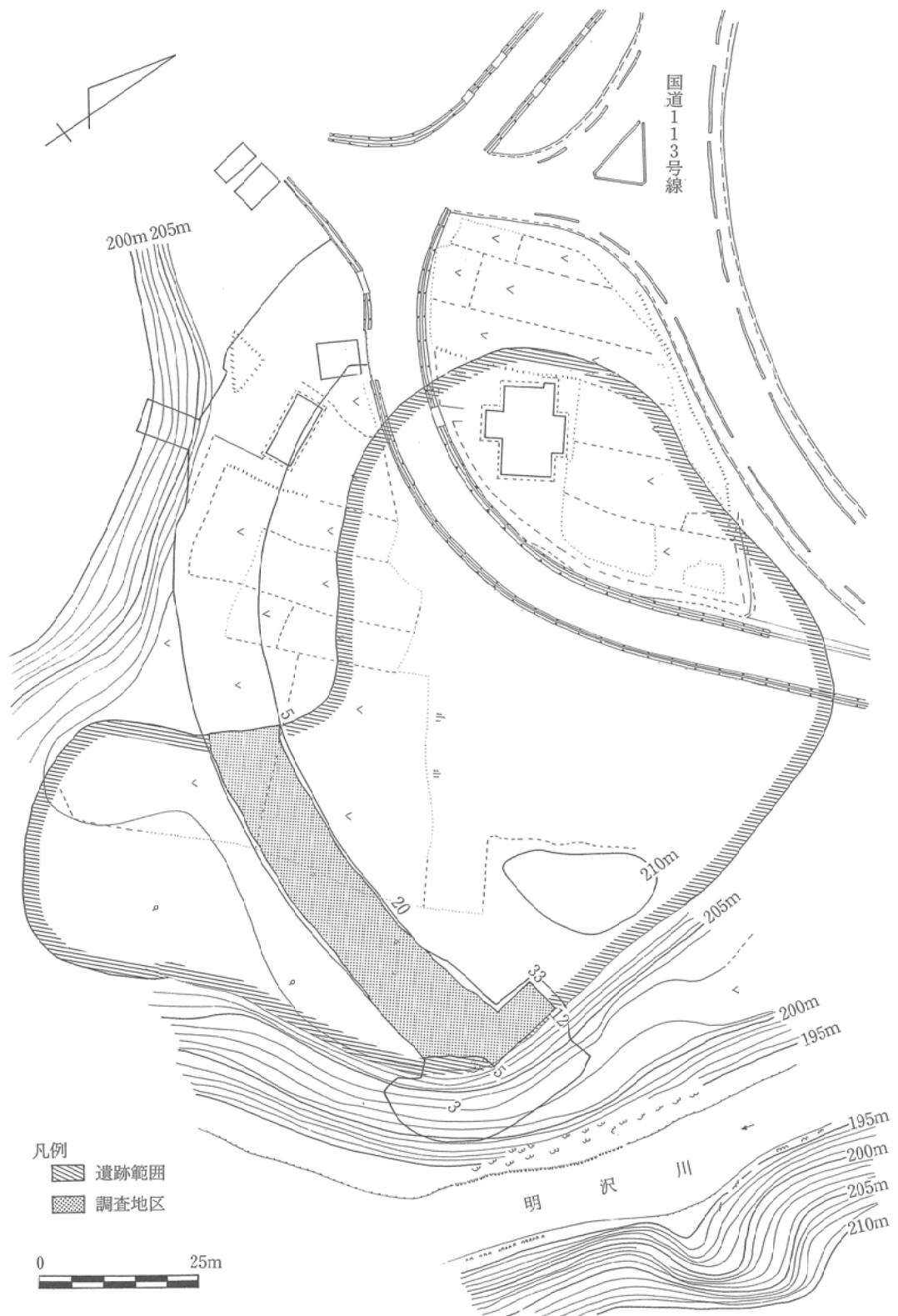
### 2 歴史的環境（第1図）

小国町には旧石器時代の遺跡が多く、洪積段丘の中位面には東山遺跡・平林遺跡、低位面には横道遺跡・鳥谷遺跡・岩井沢遺跡等が分布する。

縄文時代の遺跡は、荒川上流の団子山から舟渡地域と横川下流の小国市街北東地域の二つにとくに濃密に分布する。地域としてはいずれも小国町の北部にあたり、現在までに井の下地区ほ場整備等に関連して、谷地遺跡・蟹沢遺跡・才頭遺跡・下野遺跡・団子山遺跡が発掘調査されている。時期的には縄文時代中期から同後期を主体とするものである。谷地遺跡では、中期中葉の大木7b式～8b式期に相当する住居跡や土壙および配石遺構が検出され、ほかに北陸の馬高式系の土器も出土している。下野遺跡では、中期後葉の大木9式～10式期の複式炉をもつ住居跡や土壙が検出されている。

小国町の東部にあたる古屋敷遺跡周辺にはこれまで遺跡はあまり発見されていないが、横川ダム関連の分布調査によって、箱ノ口地区や市野々地区、松岡地区名等に縄文時代の遺跡が2～4カ所ずつまとまりをもって分布することがわかった。

石器だけで土器が出土していない遺跡があり、遺跡の時期は不明なものが多いが、千野遺跡と綱木沢向遺跡から縄文時代中期から後期、朝篠遺跡からは縄文時代後期から晩期の土器が出土している。とくに昭和45年、建設省の国道113号改修工事によって発掘調査が行われた朝篠遺跡からは、縄文時代晩期の住居跡が3棟検出されている。



第2図 調査区概要図

### III 検出された遺構

#### 1 遺構の分布（第3図）

昔の人々が、大地に刻み込んだ生活の跡や構築物を遺構という。住居跡や貯蔵穴等がこれにあたり、今回の調査では、竪穴住居跡（S T）が確実なもので6棟、土壙（S K）や地面を堀り込んだ性格不明の穴（S X）が約30基発見されている。

住居跡は、台地の縁辺に添った形で調査区の東南部に集中して発見されている。調査地区が幅約11mの道路敷に限られているため、部分検出の住居跡もあるが、形は隅丸長方形を基本し、大きさは4～5m位になる。当時の地面を10cmほど堀り込んで床面を作っており、柱穴の配置は明確ではなく、炉も認められない。ただし、調査区の中央寄りS X6落ち込み遺構からは、炭化物を伴う石敷きの炉跡が検出されている。

住居跡の周辺には、直径1mほどの土壙や、直径3mほどの大きな穴が多く検出されている。調査区の西側は、土壙や性格不明の穴がいくつか検出されているが、東南部に比して遺構の密度が薄く、遺物の出土量も少ない。住居跡群は今回の調査区の南側に広がることが予想される。

各遺構や上の土層からは、縄文時代早期から前期初頭の土器や石器が出土しており、それ以外の遺物がみられないことから比較的短期間に集落が営まれたものと思われる。

#### 2 遺跡の層序（第4図、図版2）

遺跡は、明沢川による河岸段丘上にあり、本段丘の基盤層はかなり厚い砂礫層及び粘土からなっている。第4図は調査地区の南側の土層を実測したもので、これをもとに遺跡の基本層序を述べる。

第I層 10YR3/3 暗褐色微砂層

（表土；木根を一部含み、遺物も石器剝片を主として出土する。）

第Ia層 10YR3/4 暗褐色微砂層

（細かい木根を多く混入している層。）

第Ib層 7.5YR4/4 褐色微砂層

（畑の耕作土；IV層をブロック状に含む。）

第II層 10YR4/6 褐色砂質微砂層

（遺物包含層；粒子が細く、遺物を含む。）

第IIIa層 10YR2/2 黒褐色微砂層

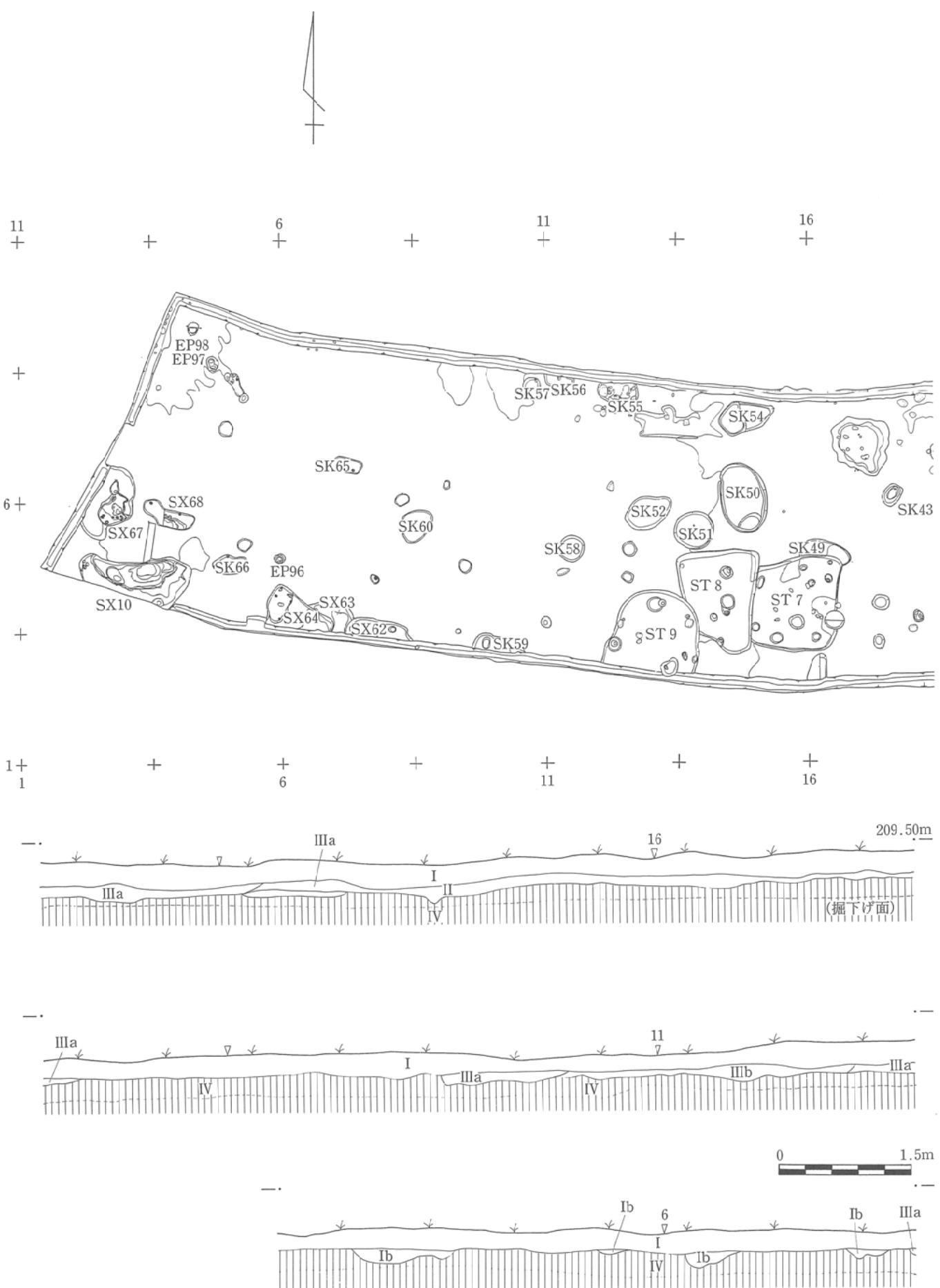
（粒子が細く、遺物を含まない。）

第IIIb層 7.5YR3/3 暗褐砂質色微砂層

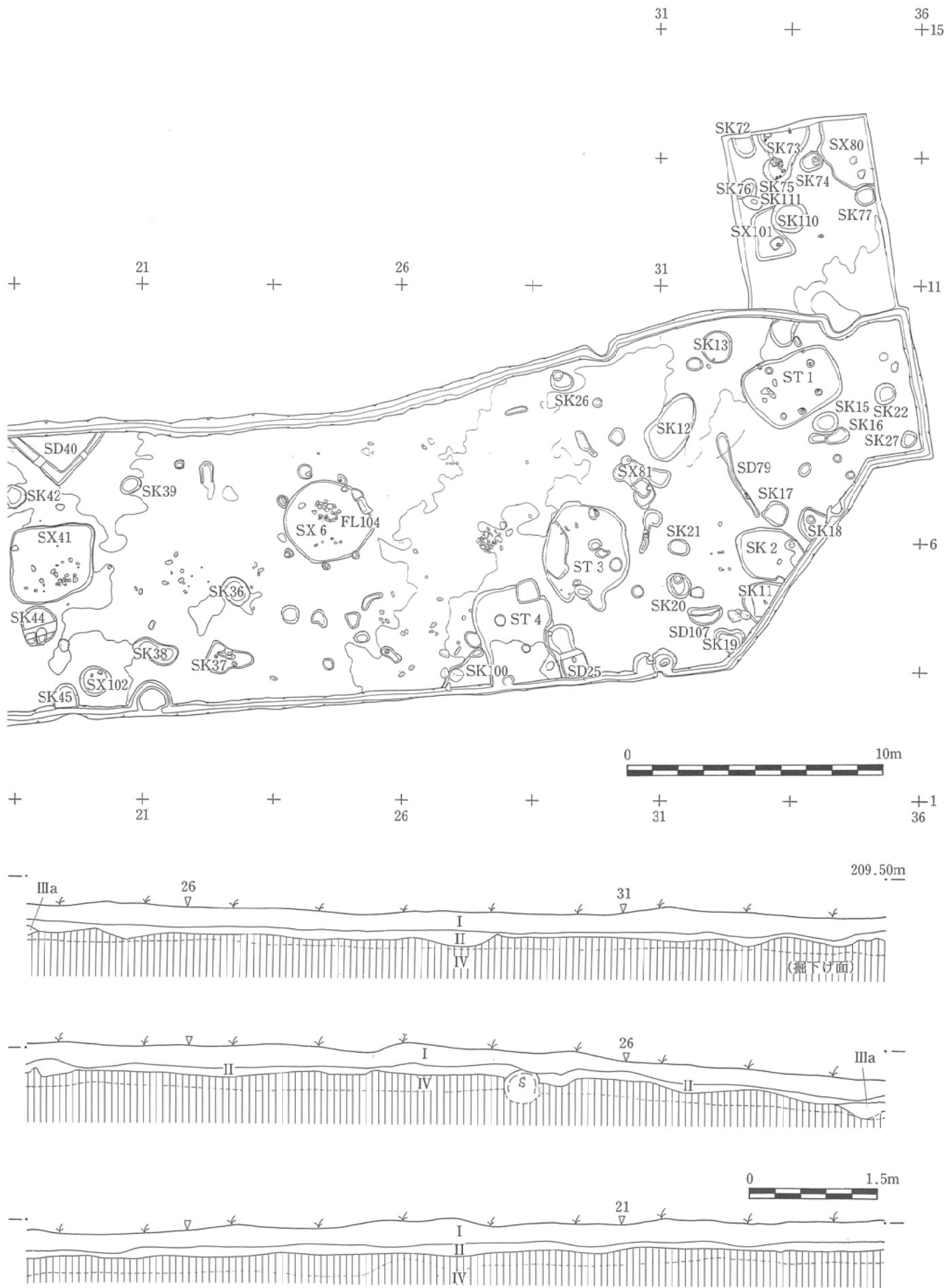
（遺構覆土；粒子が細く、遺物を含む。）

第IV層 10YR5/8 黄褐色粘質微砂層

（無遺物層；部分的に小円礫を含む。河岸段丘の基盤をなす層の一部と考えられる。）



第3図 遺構配置図



第4図 東西壁土層断面図

### 3 住居跡

#### (1) S T 1 住居跡 (第5図、図版3)

調査区東端9・10-33~35Gで検出された竪穴住居跡である。平面プランが隅丸長方形を呈し、大きさは東西径3.68m、南北径2.73mを測る。基本層序の第II層中から堀込まれたと思われるが、確認出来たのは第IV層上面からである。壁の上面から床面までの高さは最大部で13cmを測る。

柱穴は9個検出されているが、このうちE P121~E P124が主柱穴を構成するものと推定される。床面はほぼ平坦である。

覆土は3層に分かれ、各層に遺物を微量含む。遺物は石器のみで、二次調整のある剝片石器やチップが6点(第16図1~6)出土している。また住居跡中央西寄りの床面から台石と思われる叩き面を持つ石(第24図124)が出土しており、当時の住居生活面を考えるうえで好資料である。

#### (2) S T 4 住居跡 (第8図、図版4)

調査区東半4~6-28~30Gで検出された竪穴住居跡で、南側が一部未検出になっている。平面プランが不整の隅丸長方形を呈し、大きさは東西径3.04m、南北径3.2m以上を測る。住居跡の東側にSK26土壙が並行するように配置され、壁の北東隅がSK112土壙によって切られている。壁の上面から床面までの高さは最大部で16cmを測る。柱穴は3個検出されているが、このうちE P125・126が主柱穴を構成するものと推定される。床面はほぼ平坦である。

覆土は上面の攪乱層を除き4層に分かれ、遺物はF2および床面から出土する。遺物は石器のみで、剝片石器やチップが25点(第17図21~26)出土している。器種には石匙(第17図24)や不定型石器(同図25・26)などがある。また住居跡の南東床面から石皿(第24図128)が出土している。

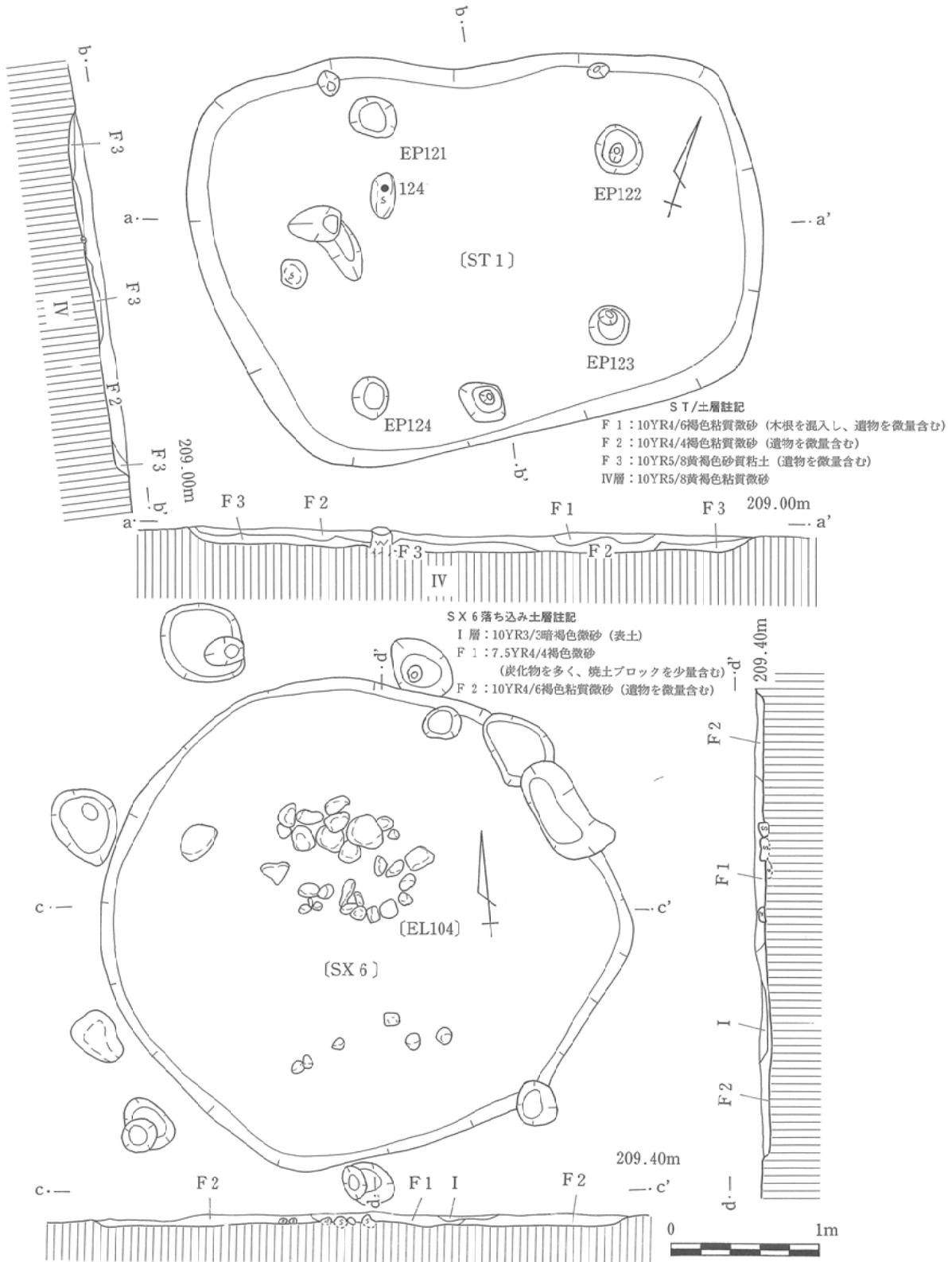
#### (3) S X 6 落ち込み遺構 (第5図、図版5)

調査区中央東寄り6~8-24~26Gで検出された不整円形の落ち込み遺構で、中央に川原石を配置した石敷(組?)炉を有する。大きさは東西径3.43m、南北径3.14mを測る。平面プランについて色調の差異はあるものの、壁の上面から床面までの高さは最深部で8cmと浅く、覆土も石敷炉周辺を除けば褐色粘質微細砂の単一層であるため、人為的な掘り込みとは判定しがたいところがある。

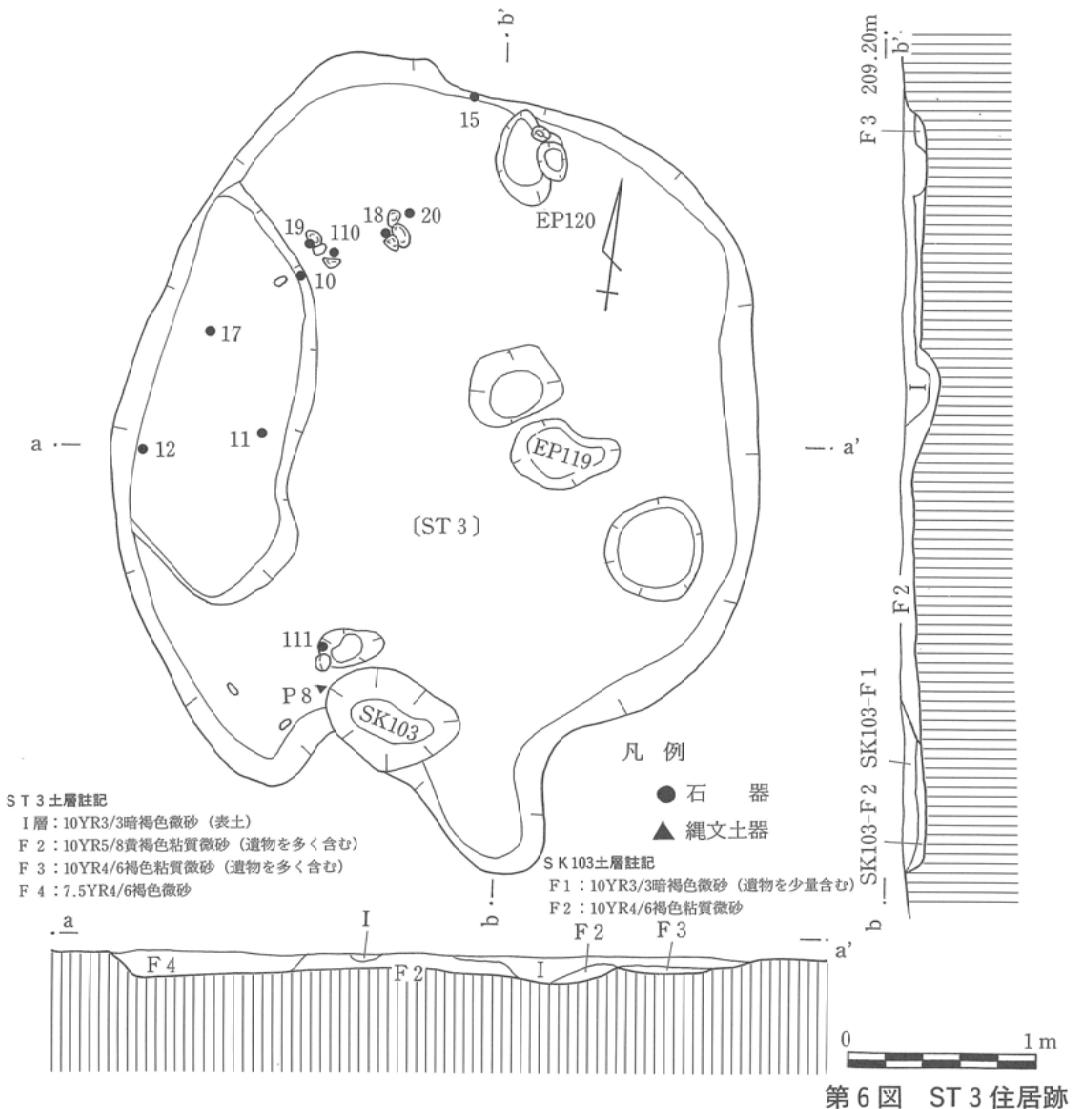
EL104とした石組については、ほとんどが熱を受けた痕跡があり、内部の覆土が炭化物を多く含み、焼土ブロックもあることから炉跡と考えられる。

柱穴は落ち込み遺構の中にはなく、外周面に8個の柱穴様のピットが検出されている。屋外の炉に簡単な屋根をかけた施設の存在も想定される。

遺物は、炉跡周囲の落ち込み遺構底面から石器が7点(第17図28・29)出土している。剝片やチップが主であるが、両面が丁寧に調整された石錐の先端が破損したもの(同29)が1点出土している。



第5図 ST 1 住居跡・SX 6 落ち込み遺構



第6図 ST 3 住居跡

#### (4) ST 3 住居跡 (第6図、図版4)

調査区東半5～7-29～31Gで検出された竪穴住居跡である。平面プランが不整の方形を呈し、大きさは東西径3.39m、南北径4.35mを測る。遺構確認面は第IV層で、壁の上面から床面までの高さは最深部で17cmを測る。住居跡の南西隅がSK103土壤によって切られている。床面のうち東半部はほぼ平坦であるが、西半部に壁かけて幅約100cm、深さ10～20cmの落ち込みがみられる。柱穴は5個検出されており、EP129と130の掘り方が比較的深い。

覆土は3層に分かれ、遺物はF2とF3から多く出土している。F2から外面に格子目状の撲糸文が施された縄文土器が1片(第15図8)出土している。

石器は、剝片石器(第17図8～19)や石核(第17図20)、石鏃(第21図76)、接合資料(第23図110・111)などが出土している。

またSK103土壤のF2からナイフ形様の剝片石器が1点(第20図74)出土している。

### (5) S T 7・8・9 住居跡 (第7・9図、図版6・7)

調査区中央西寄り3～5-12～17Gで検出された3棟の住居跡である。3棟が重複して検出されたが、平面や断面の切り合い状況からみて、新旧関係は古い方からS T 7→S T 8→S T 9の順序になると考えられる。S T 9住居跡は南半部が未検出となっている。

S T 7住居跡は平面プランが隅丸方形を呈し、大きさは東西径3.20m以上、南北径3.65mを測る。住居跡北側でSK49土壌を切り、住居跡東側でSK48土壌に切られている。遺構確認面は第IV層上面で、壁の高さは最深部で15cmを測る。柱穴は9個検出されているがEP116～EP118の柱穴の掘り方が比較的深い。床面はほぼ平坦である。

覆土は5層に分かれ、遺物はF 2と床面から多く出土する。遺物は床面から縄文土器片(第15図9～13)が小量、F 2から削器や剝片石器(第17図30～35・第18図36～40)凹石・礫石器(第24図123・126)などが出土している。

S T 8住居跡は平面プランが不整の長方形を呈し、大きさは東西径3.11m、南北径4.00mを測る。壁の高さは最深部で14cmを測る。柱穴は5個検出されているが、EP128～EP130の柱穴の掘り方が比較的深い。床面はほぼ平坦である。

覆土は3層に分かれ、遺物はF 2と床面から剝片石器と石核(第18図41～43)、石器接合資料(第23図112～119)などが出土している。縄文土器は出土しなかった。

S T 9住居跡は平面プランが隅丸長方形を呈し、大きさは東西径3.62m、南北径3.11m以上を測る。壁の高さは最深部で14cmと浅い。柱穴は4個検出されているが、EP131の柱穴の掘り方が比較的深い。床面はほぼ平坦である。

覆土は4層に分かれ、遺物はF 2と床面から縄文土器片(第15図14～23)、F 2から石籠(第18図44・46)や石核(43)、剝片石器(45)などが出土している。縄文土器は太めの羽状縄文が施されている深鉢の体部片でほとんどが同一個体をなすものと思われる。

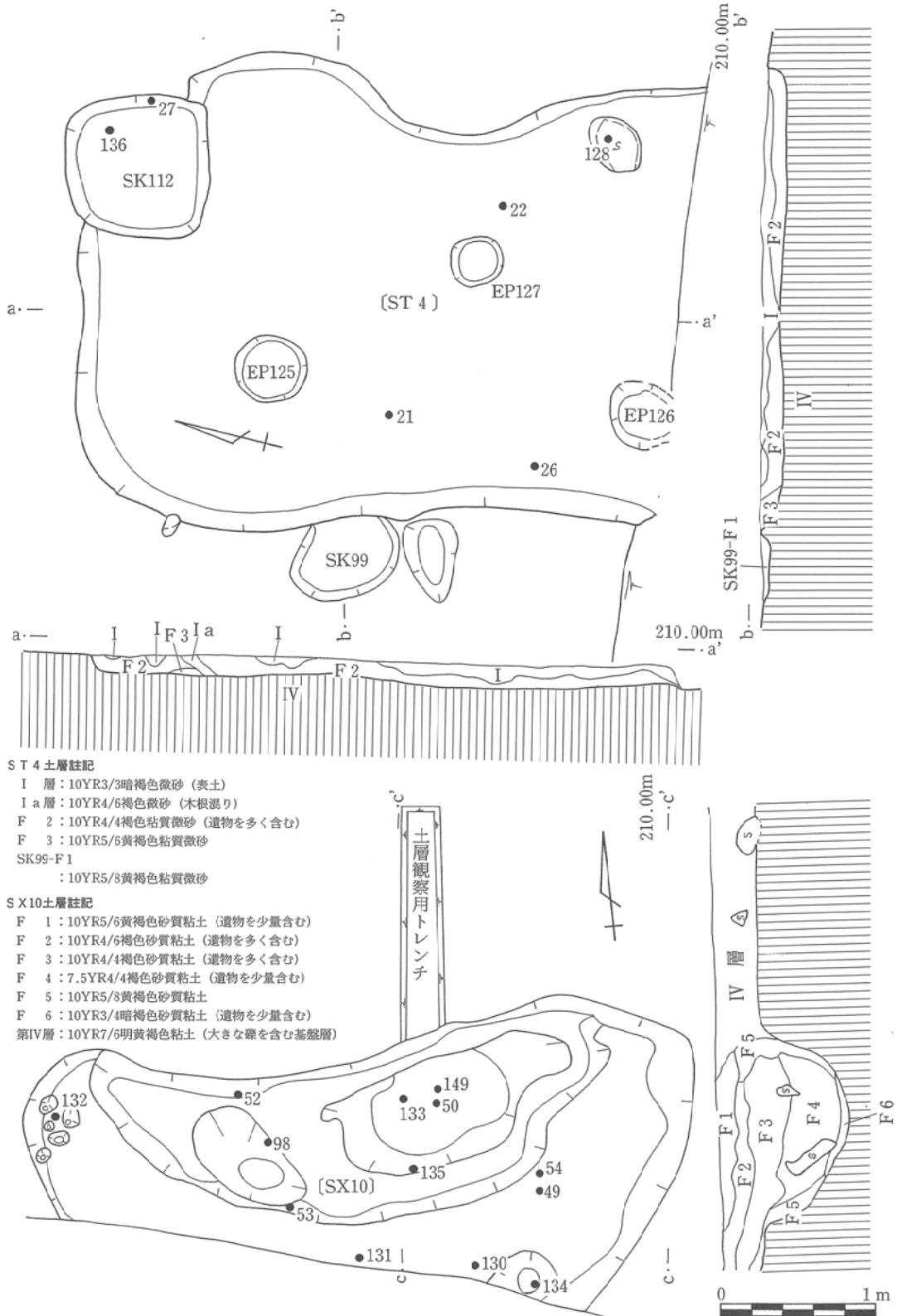
## 4 土壌・落ち込み遺構

### (1) S X 10 落ち込み遺構 (第8図、図版8)

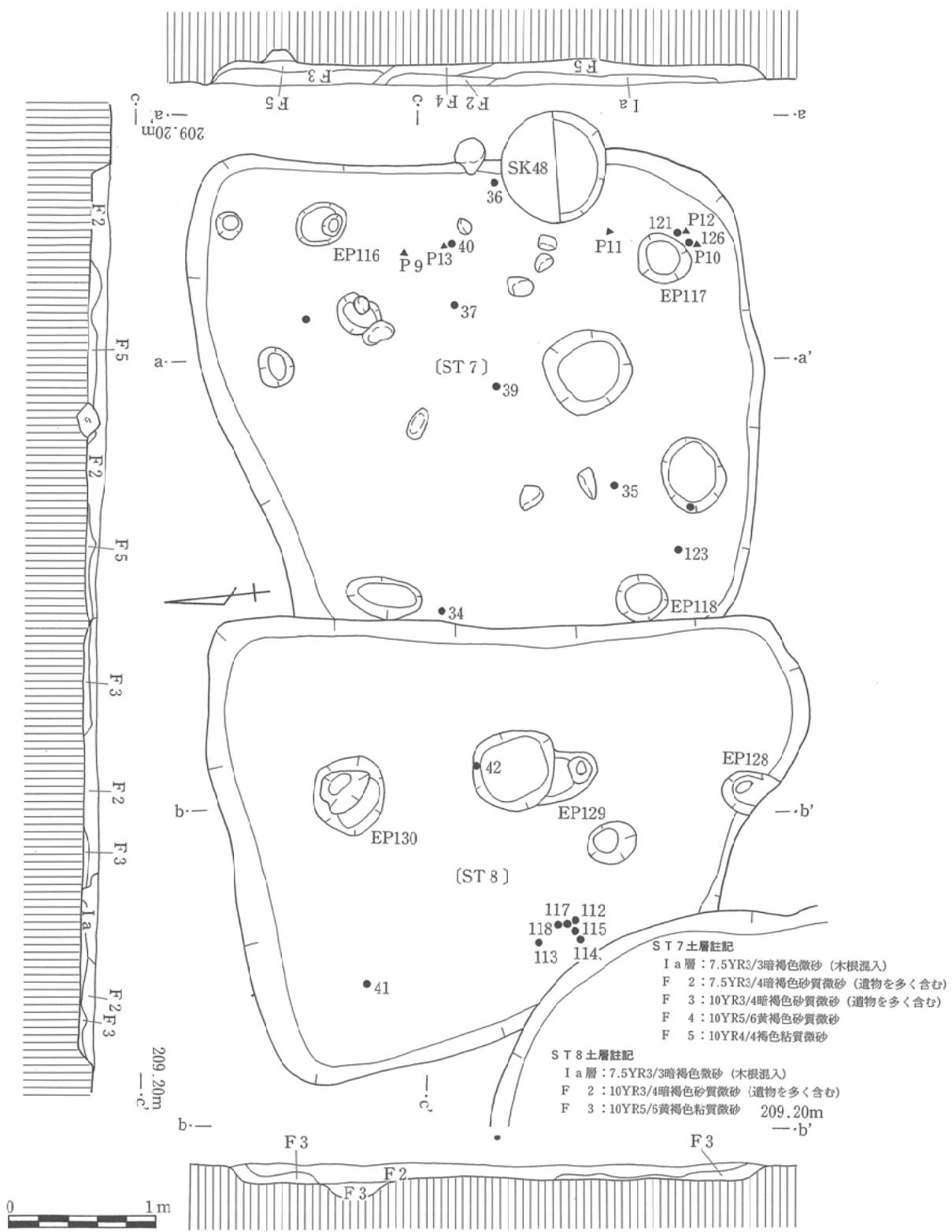
調査区南西端5・6-3～5Gで検出された落ち込み遺構である。南側が道路敷き外のため未検出となっている。平面プランが不整橢円形を呈し、大きさは東西径4.07m、南北径1.91m以上を測る。遺構確認面は第IV層上面である。

落ち込みの中央北壁寄りに次第に深くなり、下半部の断面形は半円状を呈する。検出面から底面までの深さは最大部で84cmを測る。ピットは7個検出されているが、明確な柱穴は確認されなかった。

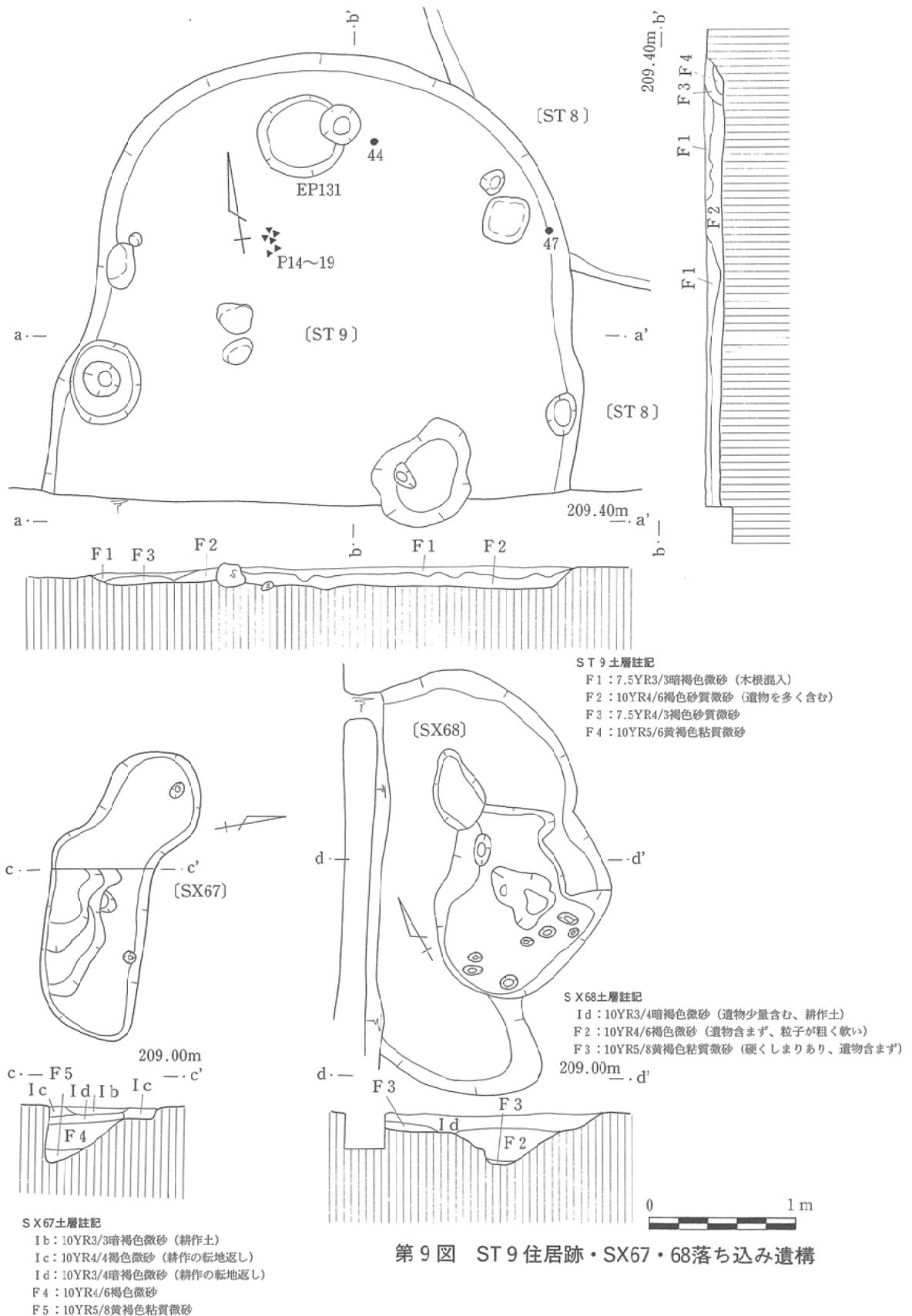
南北壁の土層断面の観察では、覆土は6層に分かれ、自然堆積に似た状況を示す。遺物はF 5を除く各層から出土するが、特にF 2とF 3に多い。F 1から搔器(第19図55)と凹石(第25図130)、F 2から剝片石器(第19図52・53・56)と凹石(第24図129)、磨石(第25図131～134)、F 3から剝片石器(第19図48・49・54)、F 4から剝片石器(第19図50)と凹石(第26図149)、台石(第25図135)などが出土している。縄文土器は出土しなかった。



第7図 ST 4 住居跡・SX 10落ち込み遺構



第8図 ST 7・8住居跡



第9図 ST 9 住居跡・SX67・68落ち込み遺構

表1 遺構観察表(1)

遺構番号	種別	検出地区 (X-Y)G	平面形	主軸方位	規模 (EW-NS)m	最大深さ (cm)	備考
ST 1	豎穴住居	9・10-33~35G	隅丸長方形	N-29°50'-W	3.68×2.73	13	
SK 2	土 壇	6・7-33・34G	不整橢円形	—	(2.52)×2.02	15	
ST 3	豎穴住居	5~7-29~31G	不整方形	N-7°30'-W	3.39×4.35	17	
ST 4	豎穴住居	4~6-28~30G	不整長方形	N-19°30'-W	3.04×(3.82)	16	
SX 6	落ち込み遺構	6~8-24~26G	不整円形	—	3.43×3.14	8	内部にEL104を設置
ST 7	豎穴住居	4・5-16・17G	隅丸方形	N-5°10'-E	(3.20)×3.65	15	SX 8に切られる
ST 8	豎穴住居	4・5-14~16G	不整長方形	N-6°40'-E	3.11×4.00	14	ST 7を切り、ST 9に切られる
ST 9	豎穴住居	3~5-12~14G	隅丸長方形	N-20°30'-E	3.62×(3.11)	14	SX 8を切る
SX10	落ち込み遺構	5・6-3~5G	不整橢円形	—	4.07×(1.91)	84	
SK11	土 壇	5・6-32・33G	略円形	—	(1.10)×1.56	19	
SK12	土 壇	8・9-31・32G	不整橢円形	N-33°30'-E	1.56×2.75	10	
SK13	土 壇	10-32・33G	円形	—	1.16×1.23	11	
SK15	土 壇	9-34・35G	略円形	—	0.94×0.78	16	
SK16	土 壇	9-35G	不整橢円形	—	0.58×0.93	10	
SK17	土 壇	7-32・33G	不整円形	—	1.02×0.98	6	
SK18	土 壇	7-34・35G	不整方形	—	(1.04)×1.36	10	
SK19	土 壇	4・5-33G	不整橢円形	—	1.18×(0.95)	16	
SK20	土 壇	5・6-32G	円形	—	0.93×0.97	18	
SK21	土 壇	6・7-32G	略円形	—	0.85×0.60	14	
SK22	土 壇	9・10-36G	円形	—	0.81×0.82	9	
SD25	溝状遺構	4・5-29・30G		N-28°00'-W	0.98×(2.26)	18	ST4東隣
SK26	土 壇	9・10-29・30G	略円形	—	0.87×0.72	11	新しいピットに切られる
SK27	土 壇	8・9-36G	橢円形	—	0.56×0.66	17	
SK28	土 壇	10-32G	橢円形	—	0.65×0.49	6	
EP30	柱 穴	8-24・25G	不整円形	—	0.54×0.58	6	SX16北隣
SK36	土 壇	5・6-23G	不整円形	—	1.12×0.92	15	
SK37	土 壇	4・5-23・24G	不整橢円形	—	1.74×1.29	11	
SK38	土 壇	4・5-20・21G	不整橢円形	—	1.75×0.80	7	
SK39	土 壇	8-21G	橢円形	—	0.76×0.70	9	
SD40	溝状遺構	8・9-19・20G	L字形	N-43°00'-E	2.72×2.69	8	溝幅20~50cm
SX41	落ち込み遺構	5~7-19・20G	隅丸方形	N-3°30'-E	3.24×3.00	14	
SK42	土 壇	7・8-19G	不整円形	—	0.83×0.93	15	
SK43	土 壇	6・7-18G	不整橢円形	—	0.64×0.87	35	
SK44	土 壇	4・5-19・20G	不整円形	—	1.38×1.52	8	
SK45	土 壇	3・4-20G	橢円形	—	1.02×(0.92)	14	
SK48	土 壇	4-17G	円形	—	0.74×0.70	8	ST 7を切る
SK49	土 壇	5・6-16・17G	不整橢円形	—	1.80×(0.65)	6	ST 7に切られる
SK50	土 壇	6・7-15・16G	長橢円形	—	1.76×2.71	13	
SK51	土 壇	6-14・15G	円形	—	1.56×1.46	8	
SK52	土 壇	6・7-13・14G	不整橢円形	—	1.92×1.26	20	

## (2) S K 2 土壙（第10図）

調査区東南端 6・7-33・34Gで検出された不整橢円形の土壙である。南側が道路敷き外のため未検出となっている。大きさは東西径2.52m以上、南北径2.02mで、検出面から底面までの深さは最深部で15cmを測る。

覆土は4層に分かれ、遺物はF3とF4及び床面から二次調整のある剝片石器（第16図7）やチップが微量出土している。縄文土器は出土しなかった。

## (3) S K 11 土壙（第11図）

S K 2 土壙南側 5・6-32・33Gで検出された略円形の土壙である。東側が道路敷き外のため未検出となっている。大きさは東西径1.10m以上、南北径1.56mで、検出面から底面までの深さは最深部で19cmを測る。

覆土は3層に分かれ、遺物はF2から石器剝片やチップが微量出土している。

## (4) S K 12 土壙（第10図）

調査区東端 8・9-31・32Gで検出された不整橢円形の土壙である。大きさは東西径1.56m、南北径2.75mで、検出面から底面までの深さは最深部で10cmを測る。

覆土は2層に分かれ、遺物はF1とF2から石器剝片やチップが小量出土している。

## (5) S K 19 土壙（第11図）

調査区東南端 4・5-33Gで検出された不整橢円形の土壙である。東側が道路敷き外のため未検出となっている。大きさは東西径1.18m、南北径0.95m以上で、検出面から底面までの深さは最深部で16cmを測る。

覆土は2層に分かれが、遺物は出土しなかった。

## (6) S K 20 土壙（第11図）

調査区東南端 5・6-32Gで検出された円形の土壙である。大きさは東西径0.93m、南北径0.97mで、検出面から底面までの深さは最深部で18cmを測る。北側に直径20cm程のピットを1個有する。

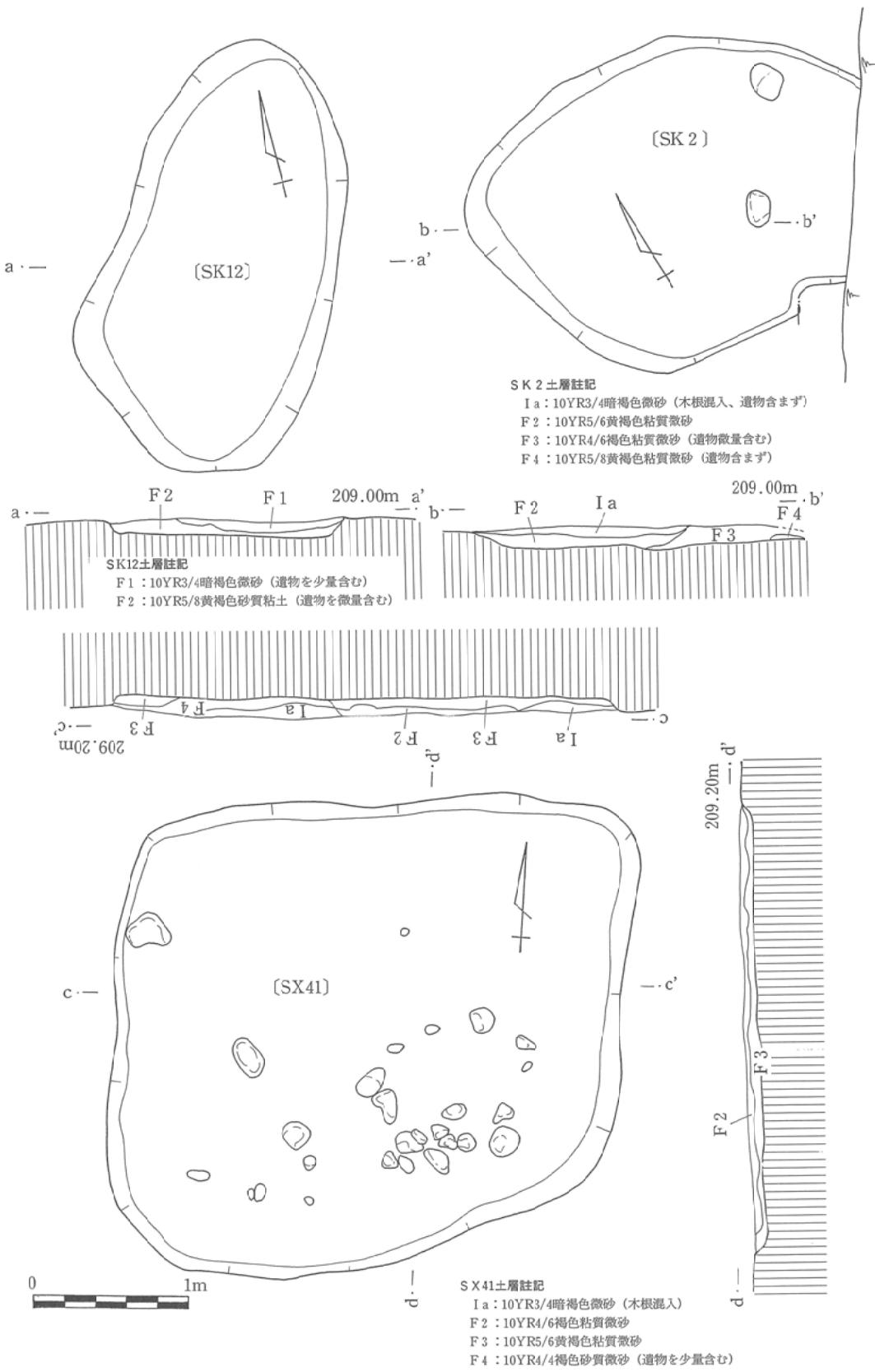
覆土は2層に分かれ、遺物はF1から石器剝片やチップが小量出土している。

## (7) S X 41 落ち込み遺構（第10図、図版9）

調査区中央 5～7-19・20Gで検出された落ち込み遺構である。平面プランが隅丸方形を呈し、大きさは東西径3.24m、南北径3.00mを測る。遺構の検出面から底面までの深さは最深部で14cmを測る。柱穴は認められない。底面は凹凸があり、南半部付近に集石がみられる。

覆土は4層に分かれ、遺物はF4と底面から石器が小量出土している。実測図には大型の剝片石器を図示した（第19図57～60）。59は背面側辺に二次調整を施して刃部を形成している。縄文土器は認められなかった。

本落ち込み遺構は、平面形が竪穴住居跡の近い形態を示しているものの、底面が安定しておらず柱穴も認められること、さらに覆土中に遺物が少ないとことから、住居跡ではない用途不明の落ち込み遺構として把握しておきたい。



第10図 SK2・12土壤・SX41落ち込み遺構

(8) S K50土壙（第11図）

S T 7・8住居跡の北6・7-15・16Gで検出された大型の土壙である。平面プランが長楕円形を呈し、大きさは東西径1.76m、南北径2.71mを測る。遺構の検出面から底面までの高さは最深部で13cmある。底面は凹凸が著しい。

覆土は3層に分かれ、遺物はF 2から二次調整のある円形の石器（第20図62）など剥片石器が小量出土している。

(9) S K51土壙（第11図、図版9）

S T 7・8住居跡の北6-14・15Gで検出された円形の土壙である。大きさは東西径1.56m、南北径1.46mを測り、遺構の検出面から底面までの高さは最深部で8cmと浅い。底面はほぼ平坦である。

覆土は4層に分かれ、遺物はF 1・2から二次調整のある円形の石器（第20図63）など剥片石器が小量出土している。

(10) S K54土壙（第13図）

調査区中央北西寄り8-15・16Gで検出された不整楕円形の土壙である。大きさは東西径2.15m、南北径1.16mを測り、検出面から底面までの高さは最深部で13cmである。底面は西側が大きく落ち込んでいる。覆土は3層に分かれ、遺物はF 1から石器剥片が微量出土している。

(11) S X59落ち込み遺構（第13図、図版9）

調査区西側4-10・11Gで検出された隅丸方形の土壙である。南側が道路敷き外のため未検出となっている。大きさは東西径1.85m以上、南北径0.65m以上を測り、底面までの高さは最深部で14cmである。底面はほぼ平坦である。後世の攪乱穴の可能性もある。

覆土は2層に分かれ、遺物はF 1から石器剥片が微量（第20図65）出土している。

(12) S X62~64落ち込み遺構（第12図、図版9）

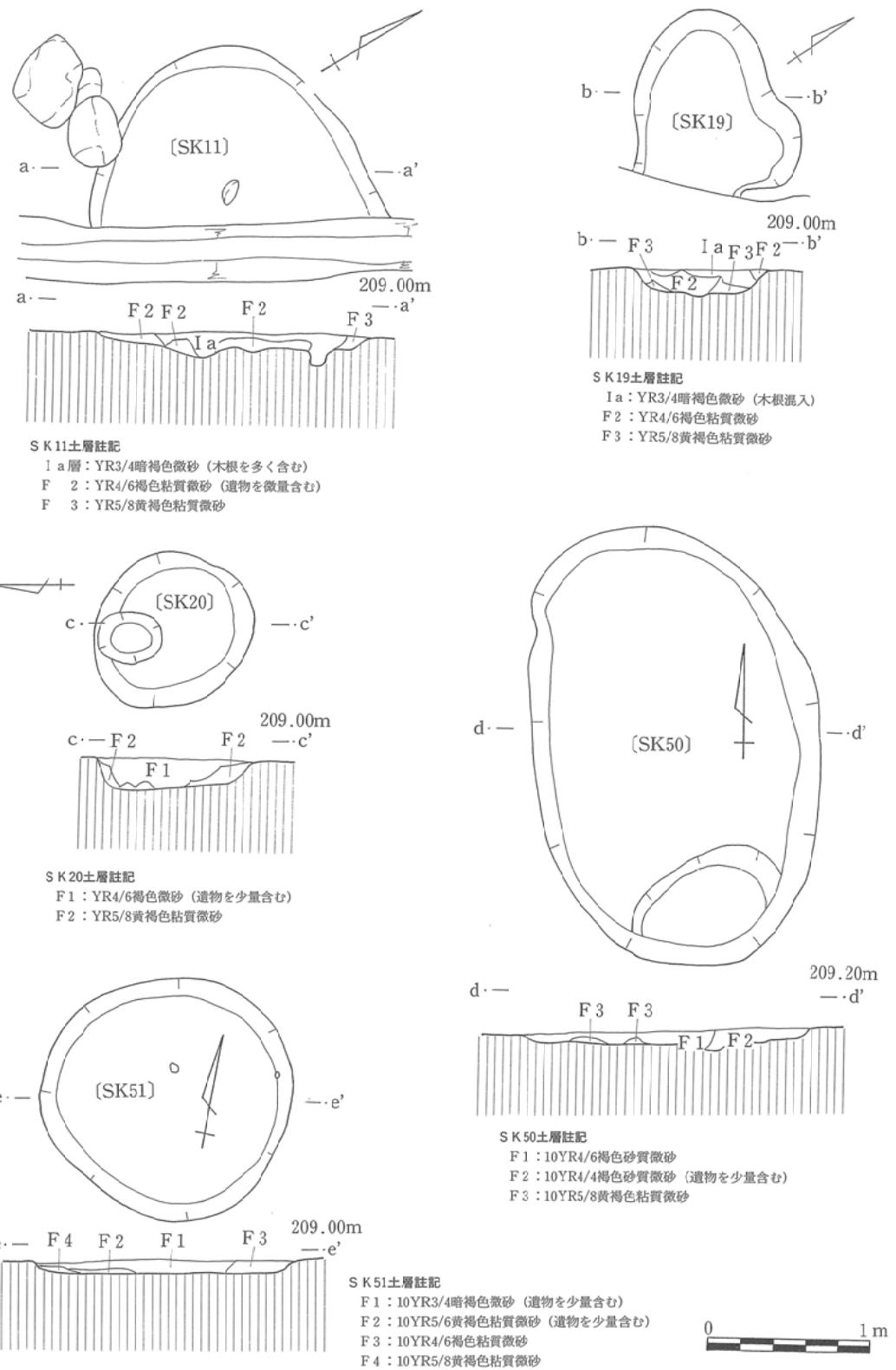
調査区南西隅4・5-6~9Gで検出された3基の落ち込み遺構である。南側が道路敷き外のため未検出となっている。3基が重複しており、新旧関係は古いからS X63→S X62・64となる。各落ち込み遺構は、平面形が隅丸方形ないし不整の楕円形を呈し、大きさは長径1.35m~2.66mを測る。検出面から底面までの高さは最深部で4~6cmと浅い。底面はほぼ平坦であるが、S X62落ち込み遺構の西側に長径1.40mの楕円形の掘り込みを有し、遺物はそこからのみ出土した。

覆土は2層に分かれ、遺物はさきの掘り込みのF 2から二次調整のある剥片石器（第20図66）などが微量出土している。

(13) S K66土壙（第13図）

調査区南西隅5-5・6Gで検出された不整楕円形の落ち込み遺構である。大きさは東西径1.32m、南北径0.76mを測り、検出面から底面までの高さは最深部で9cmと浅い。底面はほぼ平坦である。後世に攪乱された穴の可能性もある。

覆土は2層に分かれるが、各層から遺物は認められなかった。



第11図 SK11・19・20・55・51土壤

#### (14) S X 67・68落ち込み遺構（第9図）

調査区西端6・7-3～5Gで検出された2基の落ち込み遺構である。平面形は両者とも不整橢円形を呈し、大きさはS X 67が東西径2.03m、南北径0.67m、S X 68が東西径1.53m以上、南北径2.84mを測る。検出面から底面までの高さは深部で35cm前後と深い。両者とも横断面形がV字形をなし、中央にいくにつれて深くなっている。

覆土は両者とも上層が耕作によって破壊を受けており、安定した層は下層の2枚しか残っていない。遺物はS X 68のF 4から剝片石器（第20図67）などが出土している。S X 67からは遺物は認められなかった。後世に攪乱された穴の可能性もある。

#### (15) S K 73・75土壙（第12図）

調査区北東拡張区14・15-34Gで検出された2基の土壙である。二つが重複しており新旧関係は不明である。平面形は両者とも不整橢円形を呈し、大きさはS K 73が東西径2.00m、南北径1.05m以上、S K 75が東西径0.87m以上、南北径0.71mを測る。検出面から底面までの高さは最深部で15cm前後である。両者とも断面形が鍋底形をなし、中央やや深くなっている。

覆土は各々3層に分かれ、遺物はF 3から剝片石器（第20図68）などが出土している。

#### (16) S K 76土壙（第13図）

調査区北東拡張区13・14-33Gで検出された不整橢円形の土壙で、南西部がS K 111土壙に切られている。大きさは東西径0.74m以上、南北径0.85m以上を測り、検出面から底面までの高さは最深部で12cmである。底面は凹凸がみられる。

覆土は3層に分かれると、各層から遺物は認められなかった。

#### (17) S X 80落ち込み遺構（第12図）

調査区北東拡張区13～15-34・35Gで検出された隅丸方形の落ち込み遺構である。北東側が道路敷き外のため未検出となっている。大きさは東西径1.96m以上、南北径2.65m以上を測り、底面までの高さは最深部で26cmと深い。底面はほぼ平坦である。

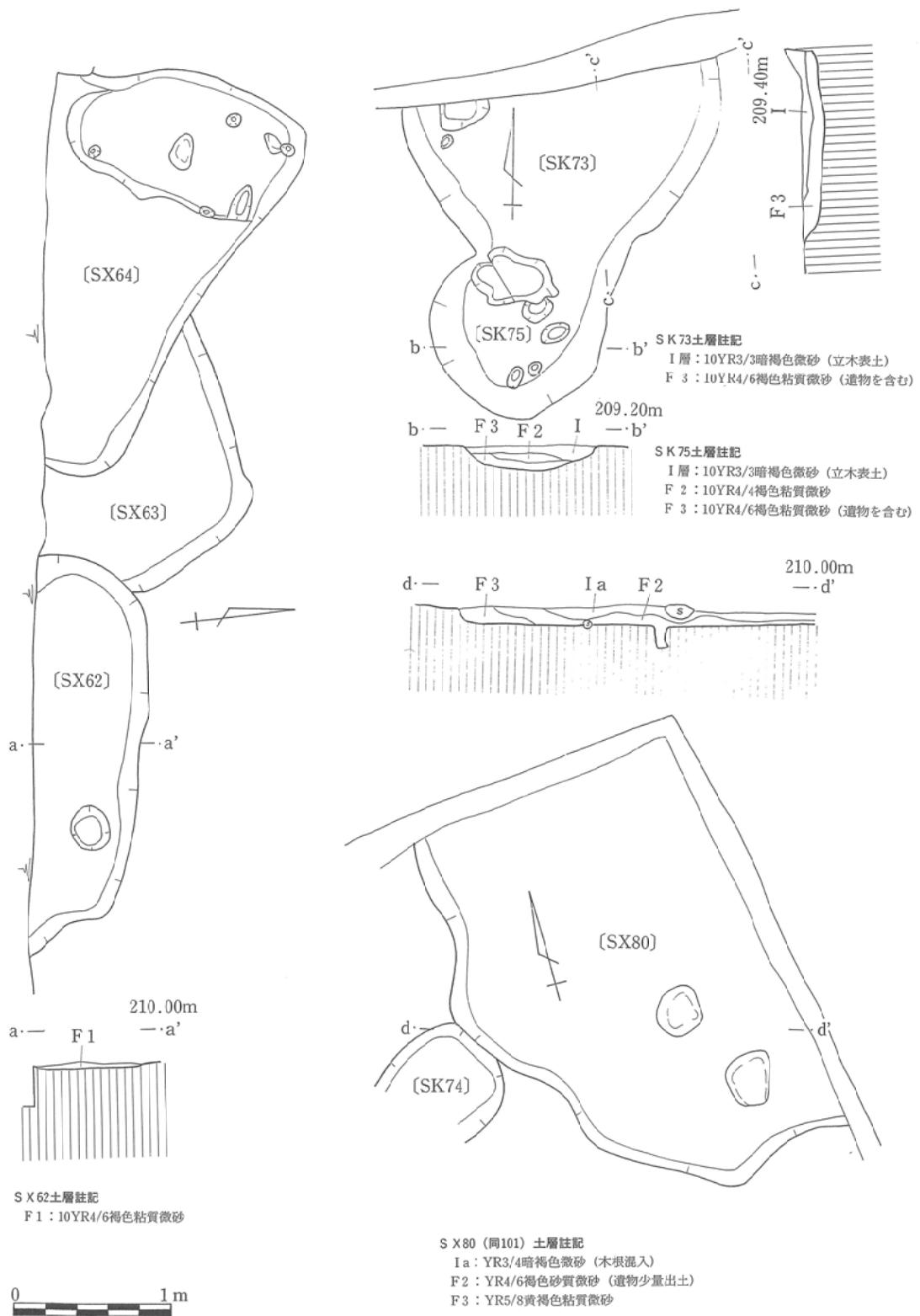
覆土は3層に分かれ、石籠（第20図71）と磨石（第20図71）がF 1から、縄文土器片（第15図24～27）と石器剝片がF 2から出土している。

#### (18) S X 102落ち込み遺構（図版9）

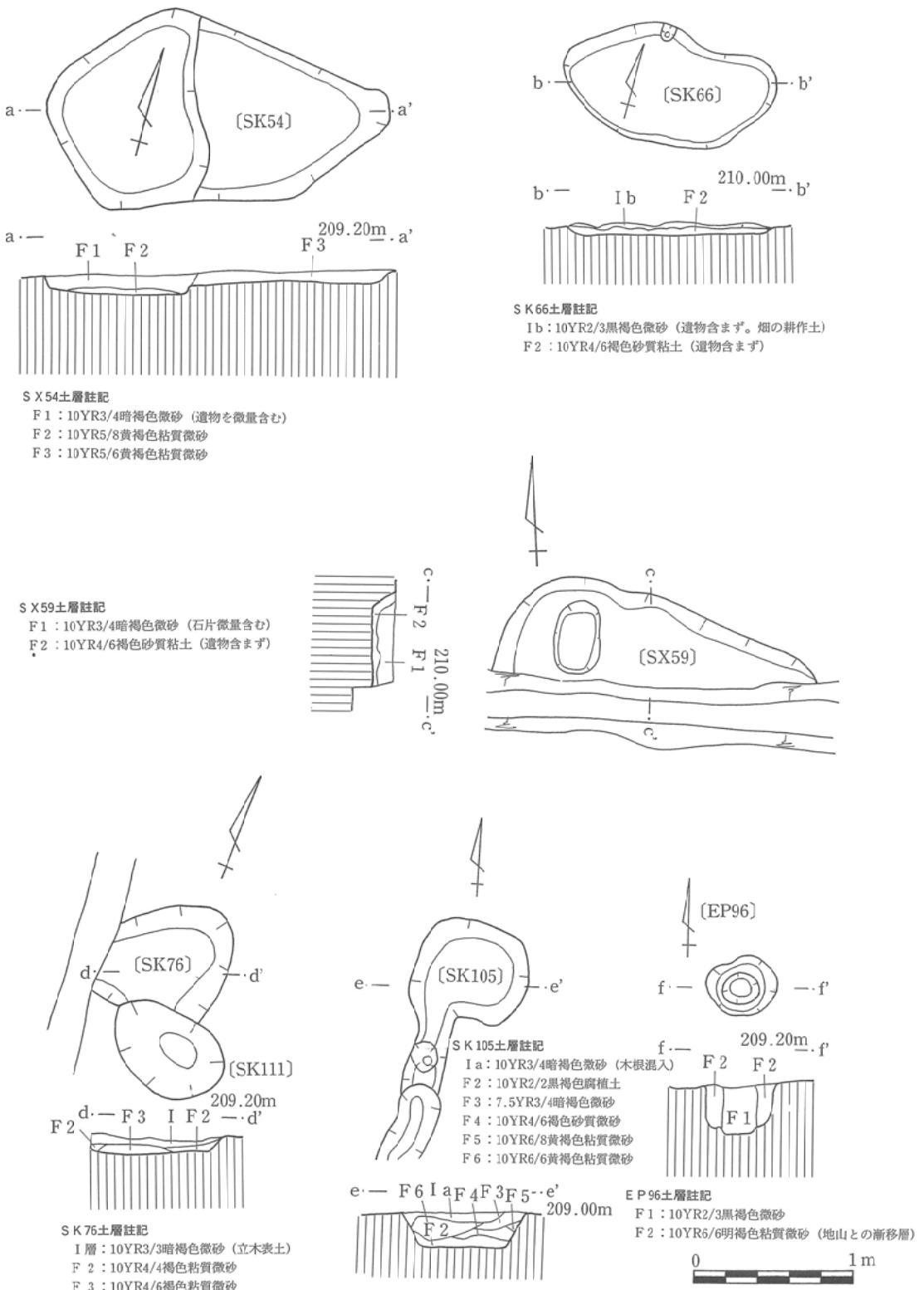
調査区中央南壁添い4-20・21Gの木根の下から縄文土器片が散発的に出土したため、木根を土器を抽出しながら取りのぞいたところ、約1mの浅い円形落ち込みが検出された。特に人為的な遺構と認定できる根拠はない。この土器群は大部分が縄文時代早期に属するもので、本遺跡で器形がわかる唯一の資料である（第14図1～7、第15図28・29）。

#### (19) E P 96～98柱穴群（第13図）

調査区西端5～10-5～7Gで、ほぼ南北方向に延びる柱穴3個が検出された。柱穴は直径40～50cmの橢円形を呈し、掘り方と柱アタリが明瞭に識別できる（第13図E P 98）。掘り方の覆土は2層に分かれ、柱アタリの大きさは直径15～18cmである。E P 96とE P 98の間隔は、1.5mを測る。各柱穴内からの遺物の出土はなく、時期については不明である。



第12図 SX62～64落ち込み遺構・SK73・75・80土壤



第13図 SK54・59・66・76・105土壤、EP96柱穴

表2 遺構観察表(2)

遺構番号	種別	検出地区 (X-Y)G	平面形	主軸方位	規模 (EW-NS)m	最大深さ (cm)	備考
SK54	土 壤	8-15・16G	不整 楕円形	—	2.15×1.16	13	
SK55	土 壤	8・9-13G	不整 楕円形	—	1.54×(0.85)	14	
SK56	土 壤	9-12G	隅丸方形	—	1.14×(0.42)	9	
SK57	土 壤	9-11G	円 形	—	0.65×0.70	8	
SK58	土 壤	5・6-12G	円 形	—	0.96×1.03	5	
SX59	落ち込み遺構	4-10・11G	隅丸方形	—	(1.85)×(0.65)	14	
SK60	土 壤	6-9G	不整 楕円形	—	1.14×1.39	9	
SX62	落ち込み遺構	4-8・9G	不整 楕円形	N-11°30'-E	2.51×(0.66)	8	
SX63	落ち込み遺構	4・5-7・8G	隅丸方形	N-13°00'-W	(1.16)×(1.35)	6	
SX64	落ち込み遺構	4・5-6~8G	隅丸方形	N-53°50'-E	2.66×(1.51)	4	
SK65	土 壤	7-8G	長 楕円形	—	1.05×0.53	5	
SK66	土 壤	5-5・6G	不整 楕円形	—	1.32×0.76	9	
SX67	落ち込み遺構	6・7-4・5G	不整長方形	—	2.03×0.67	36	
SX68	落ち込み遺構	6・7-3・4G	不整 楕円形	—	(1.53)×2.84	33	
SK72	土 壤	14-33G	椭 圆 形	—	0.75×(0.78)	17	
SK73	土 壤	14・15-34G	不 整 圆 形	—	2.00×(1.05)	14	SK75と重複
SK74	土 壤	14-34・35G	椭 圆 形	—	(0.87)×0.71	12	SX80に切られる
SK75	土 壤	14-34G	不 整 圆 形	—	1.08×(1.08)	16	SK73と重複
SK76	土 壤	13・14-33G	不整 楕円形	—	(0.74)×(0.85)	12	SK111に切られる
SK77	土 壤	13-35-36G	略 圆 形	—	0.75×0.75	15	SX80南隣
SD79	溝 状 遺構	7・8-33G		N-13°30'-W	0.45×3.55	6	
SX80	落ち込み遺構	13-15-34・35G	隅丸方形	N-16°30'-W	(1.96)×(2.65)	26	SK74を切る
SK81	土 壤	8-31・32G	隅丸長方形	—	2.21×1.00	24	
EP96	柱 穴	5・6-6・7G	略 圆 形	—	0.43×0.38	24	
EP97	柱 穴	9-5G	椭 圆 形	—	0.44×0.58	34	
EP98	柱 穴	10-5G	略 圆 形	—	0.42×0.48	18	
SK99	土 壤	4・5-28G	不 整 圆 形	—	(0.51)×0.73	11	ST 4 に切られる
SX100	落ち込み遺構	4-27・28G	?	—	(1.81)×(1.20)	11	ST 4 に切られる
SX101	落ち込み遺構	12・13-33・34G	不整長方形	—	1.46×1.97	15	SK110に切られる
SX102	落ち込み遺構	4-20・21G	円 形	—	1.22×1.17	23	RP 2 出土
SK103	土 壤	5・6-30G	不 整 圆 形	—	0.71×0.52	11	ST 3 を切る
EL104	石 敷 爐	7-25G	略 楕円形	—	0.98×0.67	6	SX6内に位置
SK105	土 壤	7-31・32G	不 整 圆 形	—	0.73×(0.60)	22	
SD107	溝 状 遺構	5-32・33G		—	1.27×0.30	13	
SK110	土 壤	13-34G	略 圆 形	—	1.38×1.24	10	SX101を切る
SK111	土 壤	13-33G	椭 圆 形	—	0.77×0.51	14	SK76を切る
SK112	土 壤	5・6-29G	隅丸方形	—	0.88×0.90	29	ST 4 を切る

## IV 出土した遺物

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱にして15箱である。内訳は、縄文土器が2箱、石器が13箱となり、この他EL104の炭化物等土層サンプルを1箱分採集した。

### 1 縄文土器（第14・15図、図版11・12）

明確な遺物包含層がなかったため、住居跡や性格不明の落ち込み遺構の覆土から出土したもののが大半を占める。遺構ではS T 3・7・9住居跡、S X80・102落ち込み遺構の計5ヶ所で縄文土器がまとまって出土したが、細片がほとんどである。

これらの土器を、胎土、器形、文様構成、施文具等から4群8類に分けて記述する。

#### (1) 第1群土器（第14図1～7、第15図9・30、図版11）

貝殻文をもつ土器群を本群に一括する。胎土には、石英、長石、黒雲母などを含み、焼成も比較的良い方である。内面はよく磨かれている。文様構成、施文具等からつぎの3類に細分される。

a類：所謂簾状角押文の仲間で、器形が明確にわかるものは、S X102落ち込み遺構から出土した深鉢（第14図1）1点のみである。口縁部端が切り落としたように外にそがれ、やや外反した口縁部が体部中程で一旦張って、そのまま底部にすぼまるものと思われる。口縁は平縁で、底部の形態は不明である。

体部上半の文様帶は三段に分かれ、上位と下位には半裁竹管による2条単位の平行沈線文と「【】」状の横位の簾状押引文が3条、中位には貝殻腹縁による浅い条痕地文上に半裁竹管による2条単位の山形の平行沈線文が施されている。刺突単位の中に凹凸がみられるところから貝殻を割って工具に用いた可能性がある。1～7はすべて同一個体と思われる。

b類：2条の平行沈線文の中に細い斜位の貝殻腹縁連続刺突文が施されているもので、第II層から1点出土している（第15図9）。

c類：波状の口縁を呈し、半裁竹管による2条単位の平行沈線文の中に「【】」状の横位の連続刺突文が施されているもので、第II層から1点出土している（第15図30）。

#### (2) 第2群土器（第15図8・24～28・32・34、図版12）

条痕文をもつ土器群を本群に一括する。胎土には、纖維、石英、長石、黒雲母などを含み、焼成も比較的良い方である。細片がほとんどで、器形が明確にわかるものはない。すべて内面に貝殻条痕文が施されているが、外面の文様から3類に細分される。

a類：外面に太い棒状工具等による沈線文が施されているもの（第15図28）。

b類：外面に斜縄文が施されているもの（第15図24～27・34）。

c類：外面に細い撚糸文が施されているもの（第15図8）。

#### (3) 第3群土器（第15図1・2、図版12）

太い羽状縄文をもつ土器群を本群に一括する。胎土には、纖維を多く含む。器厚は9～12mmと厚く、焼成はあまり良くない。内面に条痕文等はみとめられない。

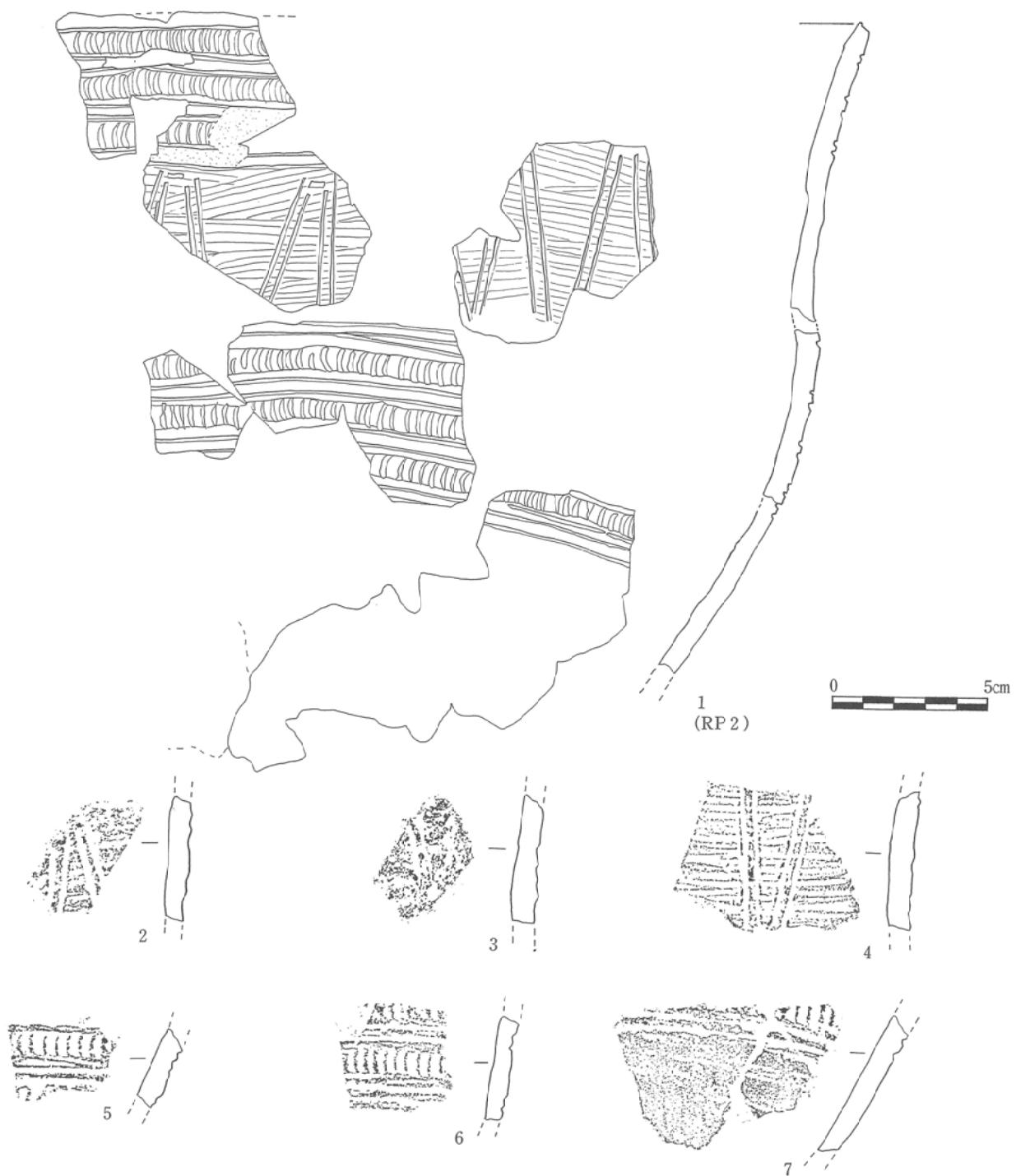
羽状縄文は結束の無いものがほとんどでS T 9住居跡からまとめて出土している（第

15図14～23)。またS T 7住居跡からも結束の無い羽状縄文の土器がややまとまって出土している(第15図10～13)。この他遺跡の第I・II層からも太い羽状縄文をもつ土器が数点出土している(第15図33・35～37)。

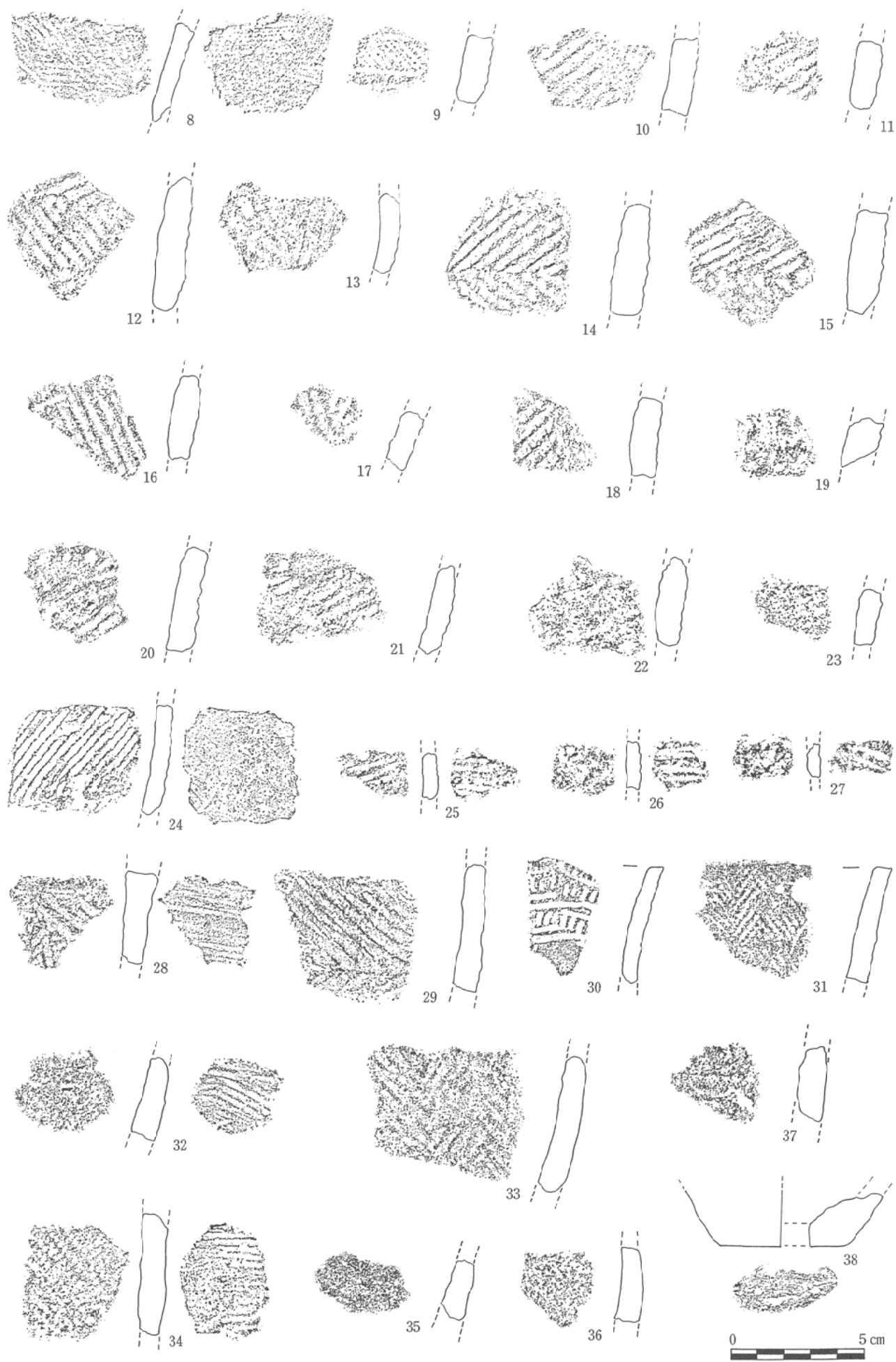
(4)第4群土器(第15図8、図版12)

細い縦回転の羽状縄文をもつ土器で、第II層から1点出土している。両側に補修孔を有し、擬似口縁を作り出したもので、纖維を微量含み、焼成は良好である(第15図31)。

その他、縄文土器の底部が1点東地区第II層から出土している(第15図38)。平底であるが、器面の摩滅が著しく、特徴や時期は不明である。



第14図 縄文土器略測図



第15図 繩文土器拓影図

表3 繩文土器観察表

No.	出土地区	器種・器部	胎 土	器厚 (mm)	文様・調整等		分類	挿図	図版
					表面	裏 面			
1	SX102F 1 (RP 2)	深鉢・口縁部		7	半截竹管文 簾状押引文	ミガキ	1—a	14—1	11—1
2	SX102F 1 (RP 2)	深鉢・体部上半		7	半截竹管文	ミガキ	1—a	14—2	11—2
3	SX102F 1 (RP 2)	深鉢・体部上半		8	半截竹管文	ミガキ	1—a	14—3	11—3
4	SX102F 1 (RP 2)	深鉢・体部上半		8	半截竹管文	ミガキ	1—a	14—4	11—4
5	SX102F 1 (RP 2)	深鉢・体部下半		7	簾状押引文	ミガキ	1—a	14—5	11—5
6	SX102F 1 (RP 2)	深鉢・体部上半		6.5	簾状押引文	ミガキ	1—a	14—6	11—6
7	SX102F 1 (RP 2)	深鉢・体部下半		7	簾状押引文	ミガキ	1—a	14—7	11—7
8	ST 3 F 2	深鉢・体部		7	細い燃糸文	条痕文	2—c	15—8	12—8
9	ST 7 F 2	深鉢・体部		10	貝殻連続利突文	ナデ	1—b	15—9	12—9
10	ST 7 Y	深鉢・体部	織維多量	10	縄文	磨滅のため不明	3	15—10	12—10
11	ST 7 Y	深鉢・体部	織維多量	9	縄文	ナデ	3	15—11	12—11
12	ST 7 Y	深鉢・体部	織維多量	11.5	羽状縄文	磨滅のため不明	3	15—12	12—12
13	ST 7 Y	深鉢・体部	織維少量	7	羽状縄文	ナデ	3	15—13	12—13
14	ST 9 F (RP19)	深鉢・体部	織維多量	12	羽状縄文	ナデ	3	15—14	12—14
15	ST 9 Y (RP19)	深鉢・体部	織維多量	12	羽状縄文	ナデ	3	15—15	12—15
16	ST 9 Y (RP19)	深鉢・体部	織維多量	10	縄文	ナデ	3	15—16	12—16
17	ST 9 Y (RP19)	深鉢・体部	織維多量	9	縄文	磨滅のため不明	3	15—17	12—17
18	ST 9 Y (RP19)	深鉢・体部	織維多量	10	縄文	磨滅のため不明	3	15—18	12—18
19	ST 9 Y (RP19)	深鉢・体部	織維多量	12	縄文	ナデ	3	15—19	12—19
20	ST 9 F 2	深鉢・体部	織維多量	10	縄文	ナデ	3	15—20	12—20
21	ST 9 F 2	深鉢・体部	織維多量	9	縄文	ナデ	3	15—21	12—21
22	ST 9 F 2	深鉢・体部	織維多量	10	縄文	磨滅のため不明	3	15—22	12—22
23	ST 9 F 2	深鉢・体部	織維多量	7	磨滅のため不明	磨滅のため不明	3?	15—23	12—23
24	SX80F 2	深鉢・体部		6	斜縄文	条痕文	2—b	15—24	12—24
25	SX80F 2	深鉢・体部		5	斜縄文	条痕文	2—b	15—25	12—25
26	SX80F 2	深鉢・体部		5	斜縄文	条痕文	2—b	15—26	12—26
27	SX80F 2	深鉢・体部		4.5	斜縄文	条痕文	2—b	15—27	12—27
28	SX102F 1 (RP 2)	深鉢・体部	織維少量	9	太い沈線文	条痕文	2—a	15—28	12—28
29	SX102F 1 (RP 2)	深鉢・体部	織維多量	8	羽状縄文	ナデ	3	15—29	12—29
30	Y20—25LII層	深鉢・口縁部		6	連続刺突文	ミガキ	1—c	15—30	12—30
31	Y26—30LII層	深鉢・口縁部	織維微量	7	細い羽状縄文	ナデ	4	15—31	12—31
32	4—17II層	深鉢・体部	織維少量	9	斜縄文	条痕文	2—b	15—32	12—32
33	Y26—30LII層	深鉢・体部	織維多量	9	羽状縄文	ナデ	3	15—33	12—33
34	Y15—20LII層	深鉢・体部	織維多量	9.5	斜縄文	条痕文	2—b	15—34	12—34
35	Y26—30LII層	深鉢・体部	織維多量	9	縄文	磨滅のため不明	3	15—35	12—35
36	6—10II層	深鉢・体部	織維少量	8.5	磨滅のため不明	ミガキ	3?	15—36	12—36
37	Y26—30LII層	深鉢・体部	織維多量	10	縄文	磨滅のため不明	3	15—37	12—37
38	東区II層(RP 5)	深鉢・底部		12	磨滅のため不明	磨滅のため不明		15—38	12—38
39	6—10II層	深鉢・体部		7	磨滅のため不明	磨滅のため不明		—	—
40	4—7 I層	深鉢・体部		8	磨滅のため不明	磨滅のため不明		—	—

## 2 石器（第16～26図、図版13～24）

石器の出土状況も、縄文土器と同じく住居跡や性格不明の落ち込み遺構の覆土から出土したもののが大半を占める。

### (1)打製石器（第16～22図）

石材はすべて珪質頁岩で、定形化された石器としては石鏃、石槍、石錐、石匙、石籠、搔器、削器、打製石斧などがある。このほか調整痕がある不定形石器、剝片素材、チップ、石核なども多く出土している。つぎに各器種毎に分類を中心にその概要を述べる。

#### ①石鏃（第21図76・77・81）

遺構から3点出土している。形態はすべて基部に抉りが入っているもので、両面に丁寧な押圧剝離が施されている。

#### ②石槍（第21図78～80）

両面加工ないし片面加工により尖った先端部を作り出した石器を石槍とした。東区のII層から3点出土しており。いずれも基部が欠損している。

#### ③石錐（第17図29、第21図91）

素材となった剝片の縁辺に調整加工を施して、その一端に尖った先端部を作り出した石器を石錐とした。2点出土しているが、いずれも先端の錐部が欠損している。

#### ④石匙（第17図24）

相対する二つのノッチを入れることによって作出されつまみをも石器であるが、定型的な石匙は認められない。第17図24が強いて分ければ本群に入るが、背面のノッチが弱い。

#### ⑤石籠（第18～22図）

素材となった剝片の背面と主要剝離面（正面）の両面に加工され、その長軸の末端が刃部になると考えられる一群、また背面側だけの片面加工であっても、刃部と考えられる末端の刃角が小さく、搔器とはなり得ないものもここで扱う。15点出土しているが、これらは平面形、刃部の形態、加工部位の相違によってつぎの3類に分類される。

a類：撥形で刃部が片刃状となり、調整加工は正面が主で背面にはほとんどないか側縁部の一部にのみ加工が施されるもの（第18図44、第19図46、第21図95、第22図105）。

b類：撥形で刃部が片刃状となり、刃部が素材の剝離面や自然面で構成され刃部加工が認められないいわゆるトランシェ様石器（第20図72、第21図96、第22図109）。

c類：撥形で刃部が両刃状となり、両面のほぼ全体に調整加工が施されるもの（第20図68、第22図85、86、88）。

#### ⑥搔器（第18図38、第19図55、第20図63、第21図94、第22図106）

旧角度の調整加工によって刃部を作り出した石器を搔器とした。5点出土しているがこれらは平面形、刃部の形態、加工部位の相違によってつぎの2類に分類される。

a類：素材の全周が刃部となり得るラウンドスクレーパー（55・63・106）。

b類：横長剝片が素材として用いられ、その側縁部が刃部となり得るもの（38・94）。

#### ⑦打製石斧（第21図92、第22図99）

平面形が木葉形を呈し、全周に調整加工が施されている大形の石器を打製石斧とした。東区II層から2点出土している。

⑧削器・不定形石器（第16～22図）

剝片の縁辺に連続的に調整加工を施して刃部を作出した石器を削器とした。不定形であり、素材や刃部の作出方法、その位置関係の相違で8類に分類できる。

a類：縦長剝片を素材とし、両面加工によって刃部が作出されるもの（第21図82・83）。

b類：縦長剝片を素材とし、両面加工によって作出され刃部と片面加工によって作出された刃部を合わせもつもの（第18図35、第19図50・59）

c類：縦長剝片を素材とし、片面加工によって刃部が作出されるもの（第18図42、第20図60・62・66、第21図97、第22図98・100・102・108）。

d類：横長剝片を素材とし、両面加工によって刃部が作出されるもの（第21図84・90）。

e類：横長剝片を素材とし、両面加工と片面加工の刃部を合わせもつもの（第20図75、第22図104）。

f類：横長剝片を素材とし、片面加工によって刃部が作出されるもの（第17図25、第19図58、第20図61、第22図101）。

g類：剝片を2ヶ所で折断して素材とし、その折断面を両側縁として末端に刃部を作出したもの（第19図49、第22図107）。

h類：折れや加工の進展によって素材の形状が不明となったもの（第17図26、第19図48）

⑨剝片素材（第16～23図）

石器製作の過程で、母材の石塊から打ち剝がされたもので、これまでのどの分類にも属さないものを石片とする。これにはフレイク、チップがある。

⑩石核（第17図20、第18図43）

石核は住居跡内と第II層から3点の出土がある。すべて多方面からの剝離面で構成されており、打面を頻繁に変える剝片生産技術の存在をうかがわせる。ただし、大きさは最大8cm程で剝離面から再生できる石器は限られたものになる。

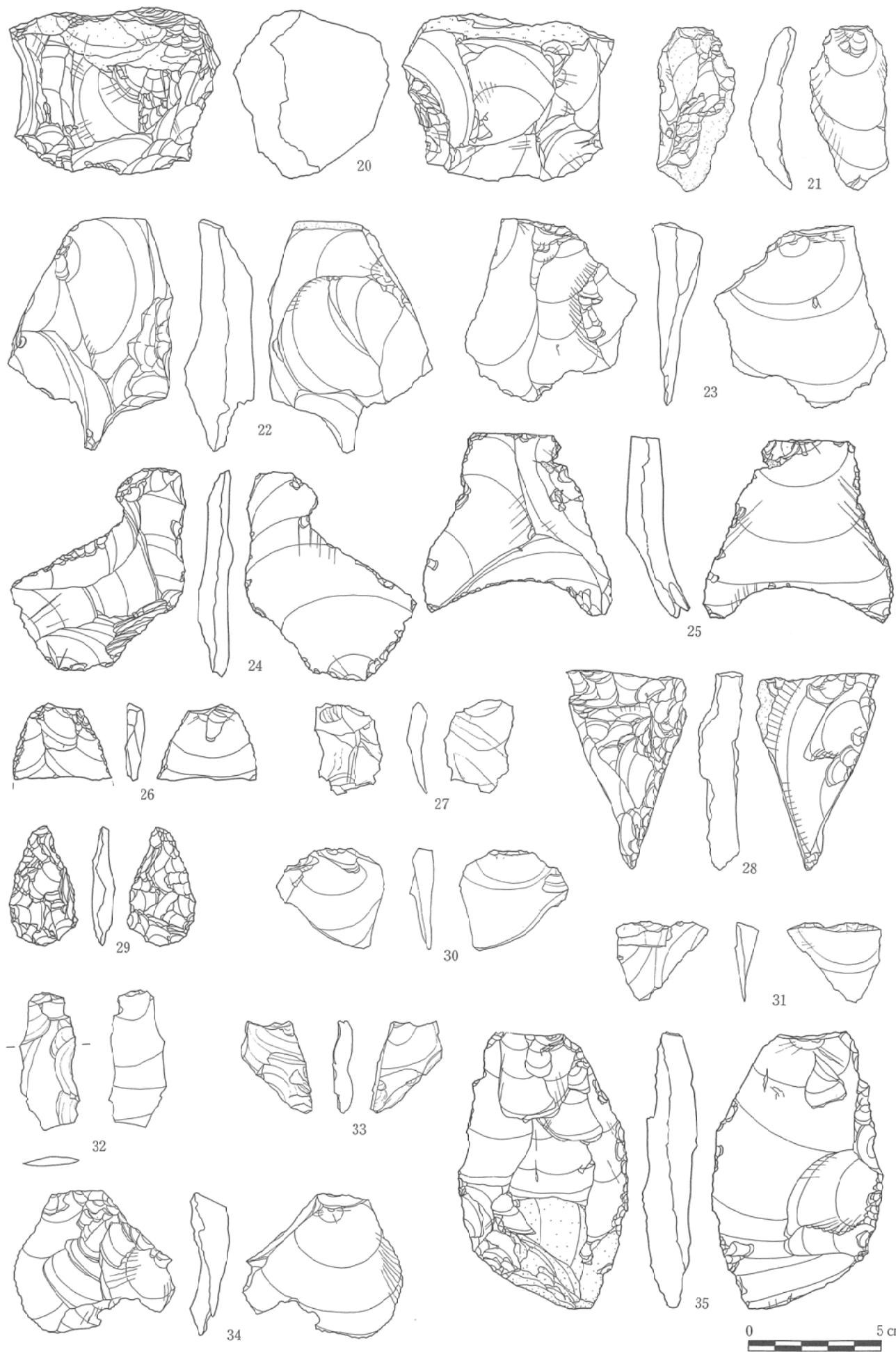
(2)石器接合資料（第23図）

古屋敷遺跡で接合ができた石器剝片は、10例26点を数える。大半が2点毎の接合であり表皮を伴う例として第23図110・111の資料を図示する。石材は珪質頁岩で、橢円形の河原石の一端を打欠いて打面を作り、打面に対し垂直に表皮側から剝離している。

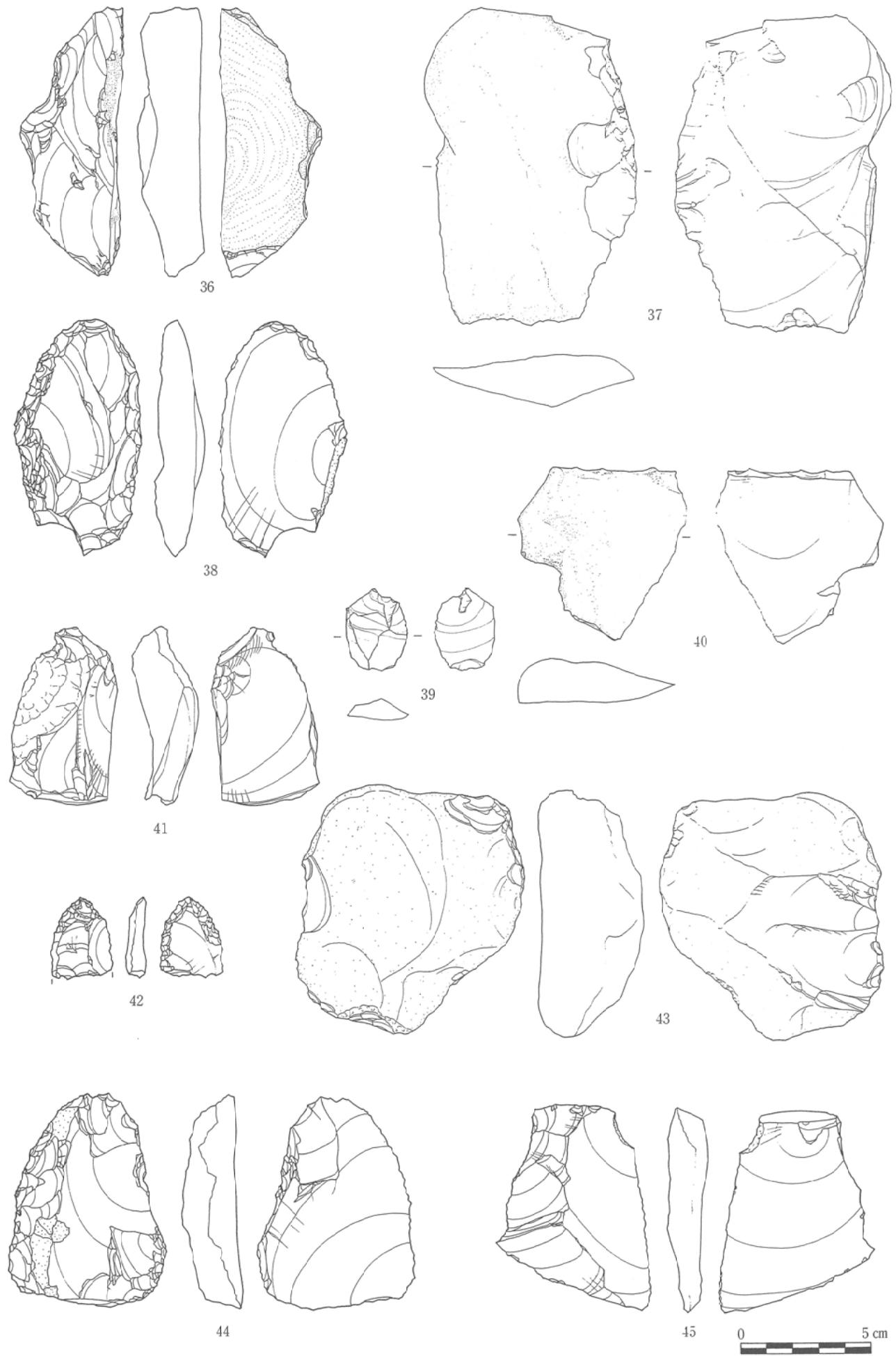
本遺跡のS T 8住居跡のF 2および床面からまとまった石器接合資料が発見されている（第23図112～119）。石材は珪質頁岩で、長方体の河原石の上部を打欠いて打面を作り、打面に対し垂直に、表皮側から順に8片の石器剝片を剝離している状況が接合結果から観察できた。剝片の大きさは、長辺の長さが76～84mm、幅が21～74mmを測り、ほとんどの剝片に表皮の一部を残している。剝離工程の結果として、どんな目的剝片を作ろうとしたかまでは不明である。これらは、住居跡の床面近くから出土していることも考え合わせ、縄文時代早・前期の石器剝離工程を知る好資料である。



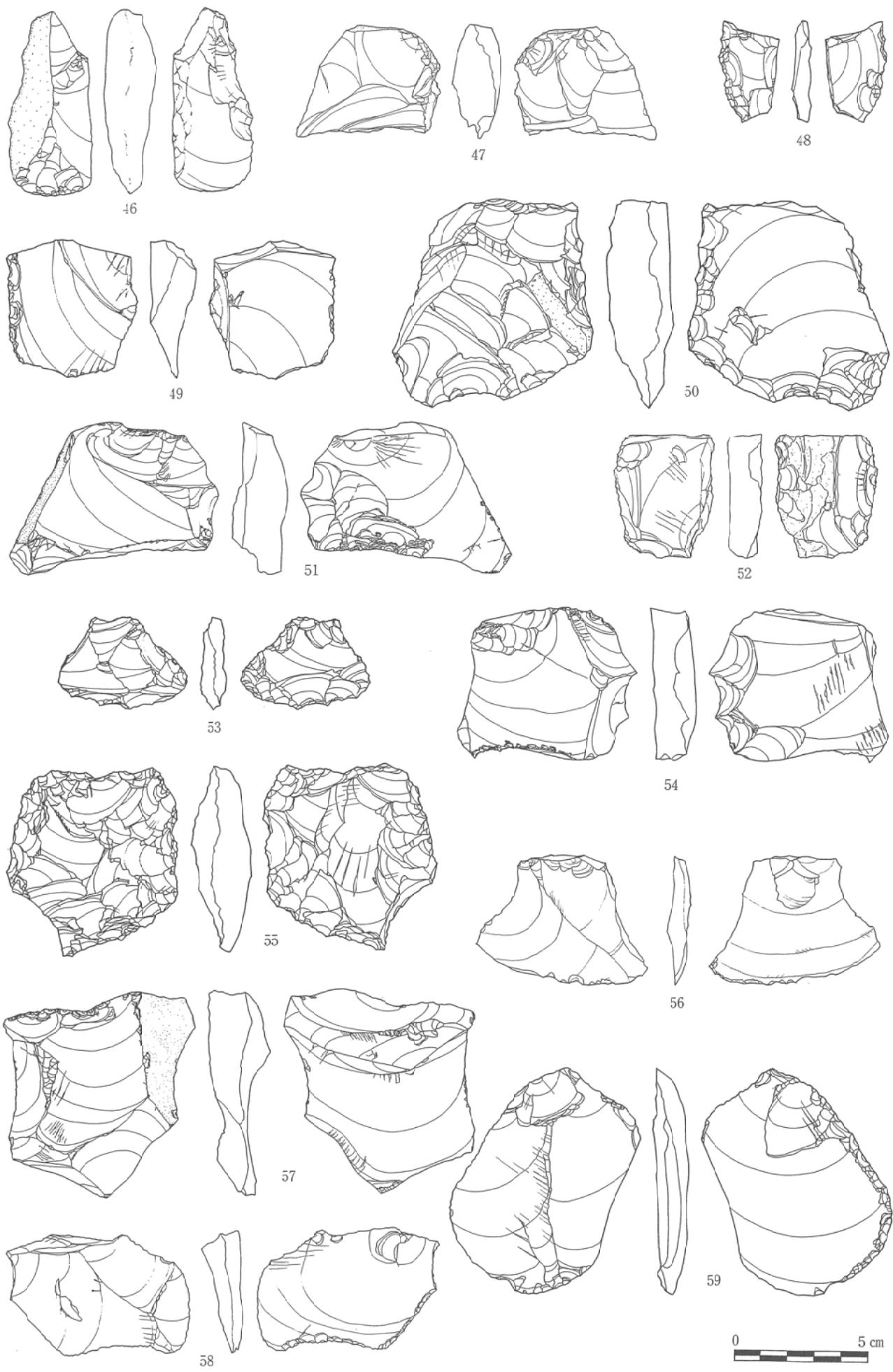
第16図 打製石器実測図 (1)



第17図 打製石器実測図（2）



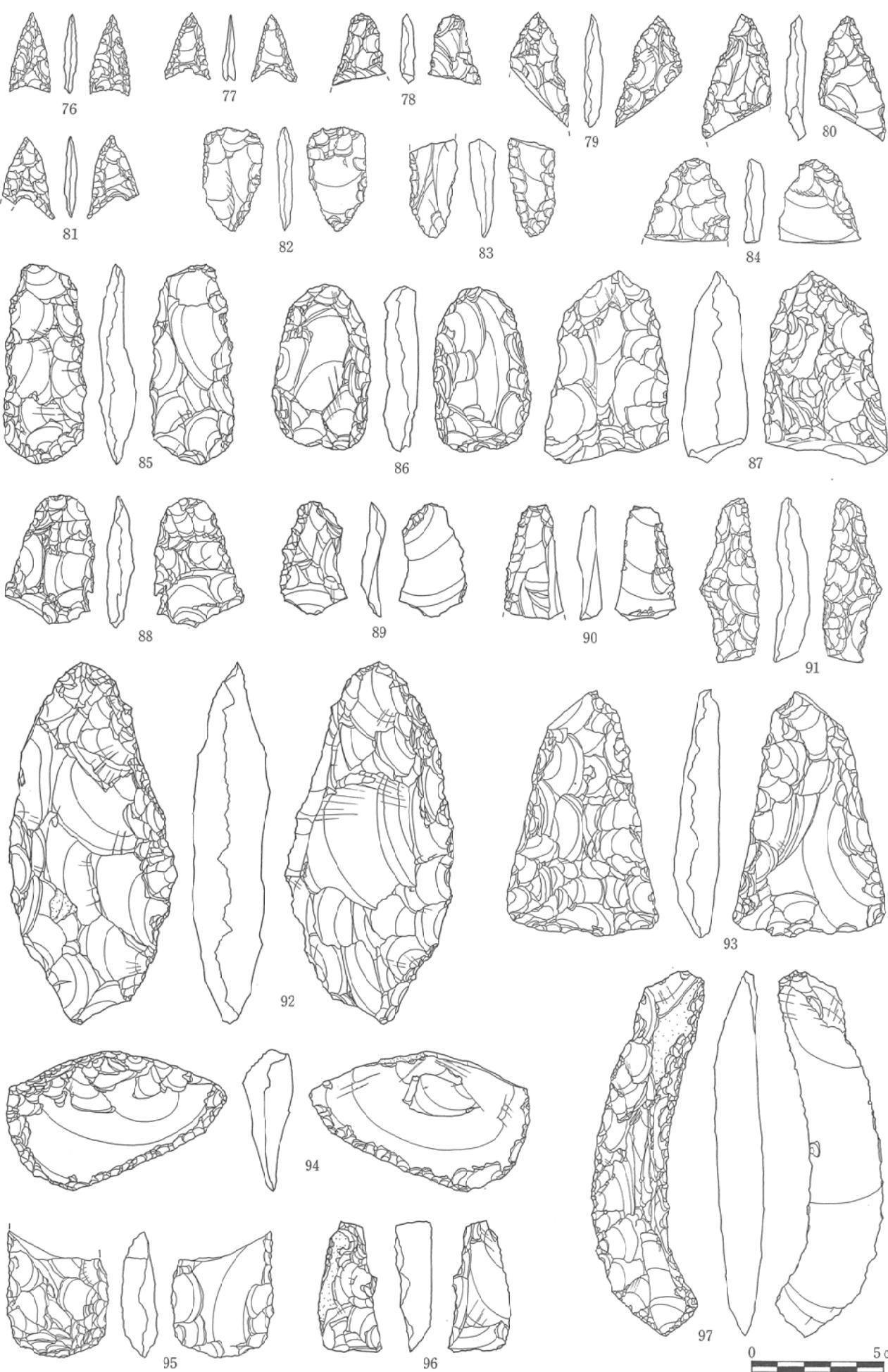
第18図 打製石器実測図（3）



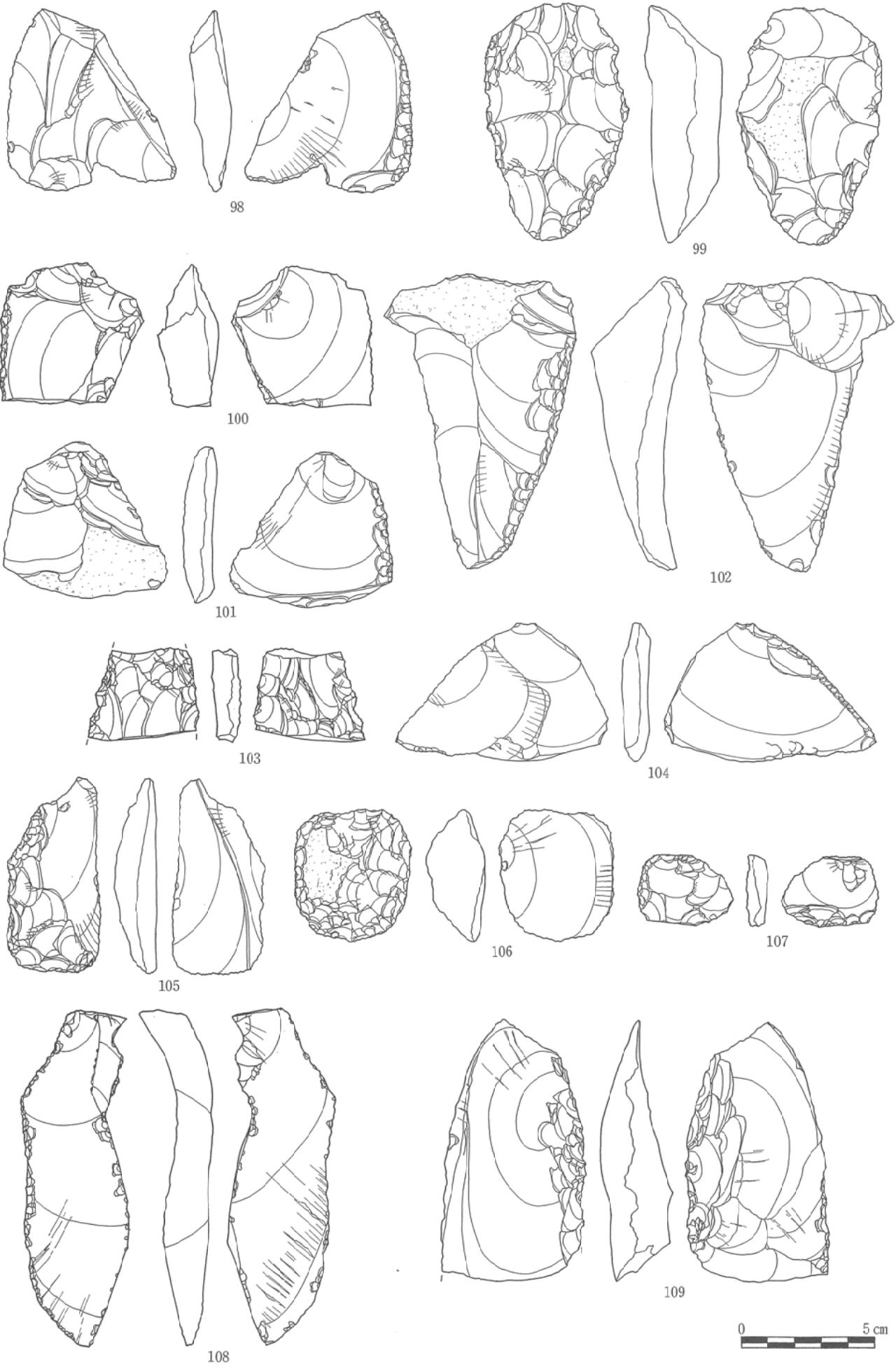
第19図 打製石器実測図（4）



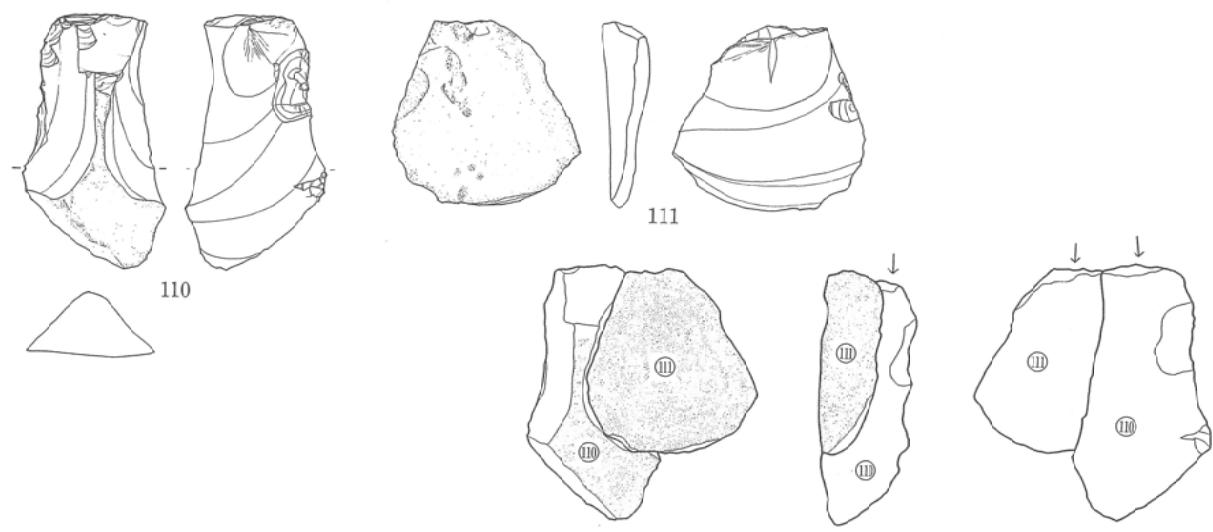
第20図 打製石器実測図（5）



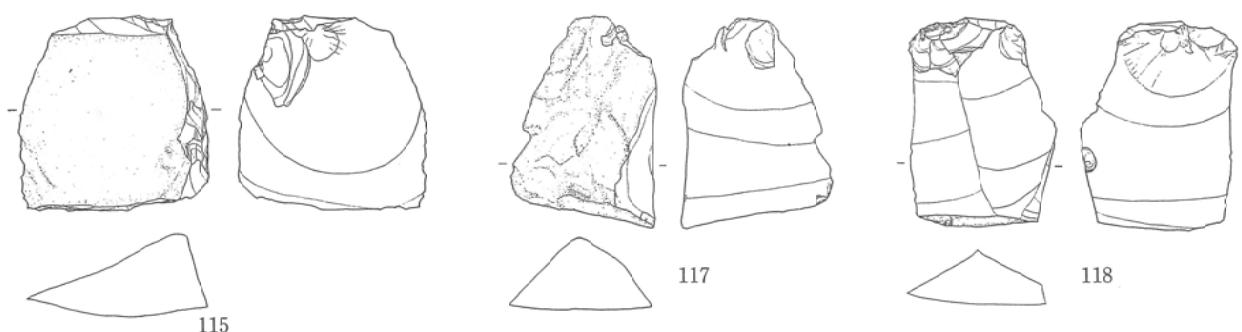
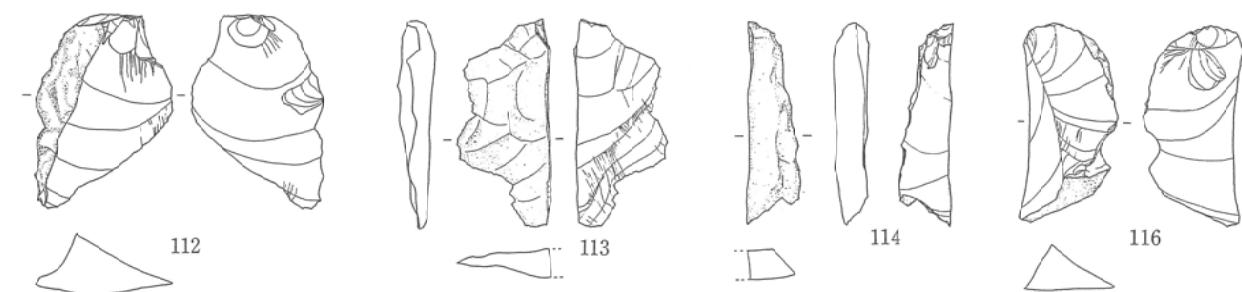
第21図 打製石器実測図（6）



第22図 打製石器実測図（7）

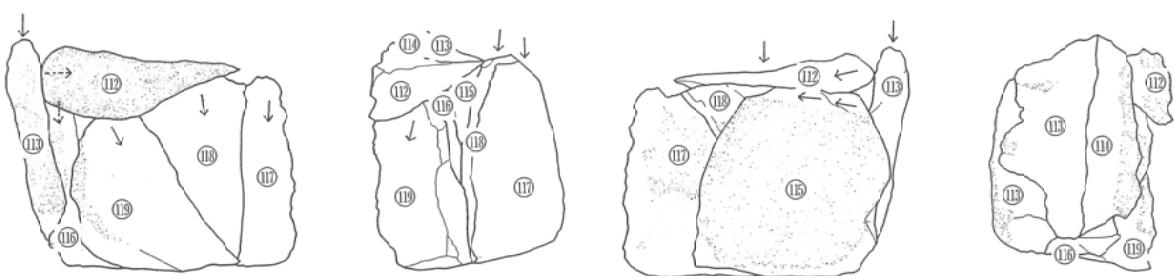


110・111接合図



0 10cm

112～119接合図



第23図 石器接合資料実測図

表4 石器属性表(1)

No	器種	出土地区	大きさ(mm)			重量(g)	調整		石材	分類	挿図	図版
			長	幅	厚		正面	背面				
1	フレイク	ST1F3	19	32	4	2.2	数回調整	打面調整	珪質頁岩	⑨	16-1	13-1
2	チップ	ST1F1	13	12	1	0.2	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-2	13-2
3	フレイク	ST1F1	27	27	2	0.9	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-3	13-3
4	フレイク	ST1F3	26	37	6	5.2	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-4	13-4
5	フレイク	ST1F1	29	28	3	2.1	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-5	13-5
6	フレイク	ST1F1	21	16	4	1.3	数回調整	数回調整	珪質頁岩	⑨	16-6	13-6
7	フレイク	SK2Y	82	75	21	110	打面調整	数回調整	珪質頁岩	⑨	16-7	21-7
8	フレイク	ST3F2 (No20)	37	36	7	7	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-8	13-8
9	フレイク	ST3F2	41	31	9	8.9	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-9	13-9
10	フレイク	ST3F2 (No20)	50	76	21	79	無調整	数回調整	頁岩	⑨	16-10	13-10
11	フレイク	ST3F3 (No11)	36	58	13	15	打面調整	無調整	頁岩	⑨	16-11	13-11
12	フレイク	ST3F3 (No15)	59	52	26	61	無調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-12	21-12
13	フレイク	ST3F2	51	54	20	60.1	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-13	13-13
14	フレイク	ST3F2	33	55	14	17	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-14	13-14
15	フレイク	ST3Y (No21)	67	50	7	13.9	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-15	13-15
16	フレイク	ST3F2	55	62	16	50	無調整	数回調整	珪質頁岩	⑨	16-16	13-16
17	フレイク	ST3Y (No14)	28	59	9	19	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-17	13-17
18	フレイク	ST3F2 (No3)	87	80	20	119.8	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-18	13-18
19	フレイク	ST3F2 (No16)	25	33	4	2	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	16-19	13-19
20	石核	ST3F2 (No2)	76	58	47	281	打面調整	打面調整	珪質頁岩	⑩	17-20	21-20
21	フレイク	ST49 (No6)	62	28	10	17	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	17-21	14-21
22	フレイク	ST4F1 (No2)	88	61	21	90	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	17-22	14-22
23	フレイク	ST4Y	67	59	14	44	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	17-23	14-23
24	石匙	ST4Y	85	46	11	38	縁辺部加工	縁辺部加工	珪質頁岩	④	17-24	14-24
25	不定形石器	ST4F3	59	68	13	48	縁辺部調整	無調整	珪質頁岩	⑧-f	17-25	14-25
26	不定形石器	ST4F3 (No7)	28	37	5	7	縁辺部調整	無調整	珪質頁岩	⑧-n	17-26	14-26
27	フレイク	SK112F2 (No11)	35	23	6	3	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	17-27	13-27
28	フレイク	SX6Y	75	45	14	42	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	17-28	14-28
29	石錐	SX6Y (RQ27)	45	23	9	9	全体調整	全体調整	珪質頁岩	③	17-29	14-29
30	フレイク	ST7Y	38	41	4	6	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	17-30	13-30
31	フレイク	ST7Y	30	35	8	3	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	17-31	13-31
32	フレイク	ST7F1 (No6)	52	21	3	3	数回調整	打面調整	珪質頁岩	⑨	17-32	13-32
33	フレイク	ST7F1 (No17)	35	23	7	5	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	17-33	13-33
34	フレイク	ST7F2 (No8)	53	61	14	31	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	17-34	15-34
35	不定形石器	ST7F1 (No7)	104	64	16	118	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-c	17-35	15-35
36	フレイク	ST7F2 (No23)	103	39	19	90	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	18-36	15-36
37	フレイク	ST7F2 (No21)	121	75	20	193	数回調整	数回調整	珪質頁岩	⑨	18-37	21-37
38	搔器	ST7F2	89	48	15	69	縁辺部調整	打面調整	珪質頁岩	⑥-b	18-38	15-38
39	フレイク	ST7F2 (No23)	31	23	8	4	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	18-39	21-39
40	フレイク	ST7Y (No28)	66	63	16	65	無調整	打面調整	珪質頁岩	⑨	18-40	13-40

表5 石器属性表(2)

No	器種	出土地区	大きさ(mm)			重量(g)	調整		石材	分類	挿図	図版
			長	幅	厚		正面	背面				
41	フレイク	ST8F2(No.4)	67	38	18	46	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	18-41	15-41
42	不定形石器	ST8F2(No.8)	30	23	6	4	縁辺部調整	縁辺部調整	頁岩	⑧-c	18-42	15-42
43	石核	ST8Y	91	85	34	322	打面調整	打面調整	珪質頁岩	⑩	18-43	15-43
44	石籠	ST9F2(No.6)	80	58	22	101	縁辺部調整	打面調整	珪質頁岩	⑤-a	18-44	15-44
45	フレイク	ST9Y	69	58	13	54	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	18-45	15-45
46	石籠	ST9F2(RQ20)	70	30	17	37	刃部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑤-a	19-46	15-46
47	フレイク	ST9F2(No.2)	39	50	17	37	打面調整	打面調整	珪質頁岩	⑨	19-47	15-47
48	フレイク	SX10F3(No.37)	38	23	5	9	縁辺部調整	数回調整	珪質頁岩	⑧-n	19-48	16-48
49	不定形石器	SX10F3(No.25)	52	47	14	34	縁辺部調整	無調整	珪質頁岩	⑧-q	19-49	16-49
50	不定形石器	SX10F4(No.33)	75	75	21	138	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-b	19-50	16-50
51	フレイク	ST10F5	50	76	16	68	打面調整	数回調整	珪質頁岩	⑨	19-51	16-51
52	フレイク	SX10F2(No.14)	46	38	11	25	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	19-52	16-52
53	フレイク	SX10F2(No.17)	47	33	7	14	数回調整	数回調整	珪質頁岩	⑨	19-53	16-53
54	フレイク	SX10F3(No.26)	57	62	14	65	数回調整	数回調整	珪質頁岩	⑨	19-54	16-54
55	搔 器	ST10F1(RQ21)	71	61	21	94	全体調整	全体調整	珪質頁岩	⑥-a	19-55	16-55
56	フレイク	ST10F2	47	65	7	22	数回調整	数回調整	珪質頁岩	⑨	19-56	21-56
57	フレイク	SX41F1	72	70	23	84	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	19-57	17-57
58	不定形石器	SX41Y	68	45	13	33	無調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-f	19-58	17-58
59	削 器	SX41Y	81	62	13	69	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-b	19-59	17-59
60	不定形石器	SX41Y	64	52	10	28	縁辺部調整	無調整	珪質頁岩	⑧-c	20-60	17-60
61	不定形石器	SK42F1	59	88	12	67	打面調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-f	20-61	17-61
62	不定形石器	SK50F2	57	48	7	20	無調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-c	20-62	17-62
63	搔 器	SK51F2	82	69	27	157	全体調整	打面調整	珪質頁岩	⑥-a	20-63	17-63
64	フレイク	SK55F1	41	66	42	119	打面調整	打面調整	珪質頁岩	⑨	20-64	17-64
65	フレイク	SK59F1	56	68	30	110	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	20-65	17-65
66	フレイク	SX64F2	33	27	7	4	打面調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-c	20-66	17-66
67	フレイク	SX68F4	48	46	5	12	縁辺部調整	無調整	珪質頁岩	⑨	20-67	17-67
68	石 篦	SK75F3(RQ13)	30	24	6	2	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑤-c	20-68	18-68
69	フレイク	PK78F1	54	52	10	39	数回調整	数回調整	珪質頁岩	⑨	20-69	18-69
70	フレイク	SK78F1	96	58	18	91	数回調整	数回調整	珪質頁岩	⑨	20-70	18-70
71	石 篦	SX80F1(RQ18)	41	41	14	14	基部調整	基部調整	頁岩	⑤	20-71	18-71
72	石 篦	SX101F2(RQ12)	92	49	26	120	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑤-b	20-72	18-72
73	石 篦	SX101F2(RQ14)	34	31	6	6	基部調整	基部調整	頁岩	⑤	20-73	18-73
74	フレイク	SK103F2(RQ9)	109	23	13	30	打面調整	無調整	珪質頁岩	⑨	20-74	18-74
75	不定形石器	SK106F1	61	49	16	46	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-c	20-75	18-75
76	石 鐵	ST3F2(RQ10)	30	15	4	2	全体調整	全体調整	珪質頁岩	①	21-76	14-76
77	石 鐵	SX10F2(RQ24)	26	17	5	1	全体調整	全体調整	珪質頁岩	①	21-77	16-77
78	石 槍	Y20~25LII層	25	19	5	1	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	②	21-78	20-78
79	石 槍	11~34LII層(RQ16)	36	19	6	5	全体調整	全体調整	珪質頁岩	②	21-79	18-79
80	石 槍	Y20~25LII層	41	25	7	5	全体調整	全体調整	珪質頁岩	②	21-80	20-80

表 6 石器属性表(3)

No	器種	出土地区	大きさ(mm)			重量(g)	調整		石材	分類	挿図	図版
			長	幅	厚		正面	背面				
81	石 鐵	SK36F 1 (RQ17)	32	20	4	3	全体調整	全体調整	珪質頁岩	①	21-81	17-81
82	削 器	Y15~20LII層	38	22	5	4	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-a	21-82	20-82
83	削 器	7-26 I 層	35	18	8	4	縁辺部調整	縁辺部調整	頁 岩	⑧-a	21-83	21-83
84	不定形石器	Y15~20LII層	31	31	7	5	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-d	21-84	20-84
85	石 簾	10-30 II層(RQ15)	75	30	12	28	全体調整	全体調整	珪質頁岩	⑤-c	21-85	19-85
86	石 簾	Y20~25LII層	60	35	11	31	全体調整	全体調整	珪質頁岩	⑤-c	21-86	20-86
87	石 簾	Y31~36LII層	73	47	25	73	基部調整	基部調整	頁 岩	⑤	21-87	19-87
88	石 簾	Y31~36LII層	49	34	10	13	全体調整	全体調整	珪質頁岩	⑤-c	21-88	19-88
89	フレイク	Y31~36II層	43	25	6	6	数回調整	無調整	珪質頁岩	⑨	21-89	21-89
90	不定形石器	Y20~25LII層	41	23	6	5	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-d	21-90	20-90
91	石 錐	Y15~20LII層	61	21	13	13	全体調整	全体調整	珪質頁岩	③	21-91	20-91
92	打製石斧	東区II層(RQ 7)	135	61	24	219	全体調整	全体調整	頁 岩	⑦	21-92	19-92
93	石 簾	東区II層	93	57	17	84	全体調整	全体調整	珪質頁岩	⑤	21-93	19-93
94	搔 器	Y26~30LII層	53	83	20	49	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑥-b	21-94	19-94
95	石 簾	Y15~20LII層	44	38	11	21	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑤-a	21-95	20-95
96	フレイク	Y31~36II層	49	22	12	14	全体調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑤-b	21-96	21-96
97	削 器	Y20~26LII層(RQ 3)	138	28	15	63	全体調整	無調整	珪質頁岩	⑧-c	21-97	19-97
98	不定形石器	3-16 II層	69	58	12	43	無調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-c	22-98	21-98
99	打製石斧	11-34 II層	89	54	25	110	全体調整	全体調整	頁 岩	⑦	22-99	20-99
100	不定形石器	Y20~25LII層	47	55	16	52	縁辺部調整	無調整	珪質頁岩	⑧-c	22-100	21-100
101	不定形石器	Y15~20LII層	58	61	11	37	数回調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-f	22-101	20-101
102	不定形石器	Y15~20LII層	111	71	35	146	縁辺部調整	数回調整	珪質頁岩	⑧-c	22-102	21-102
103	石 簾	Y20~25LII層	33	41	10	15	基部調整	基部調整	珪質頁岩	⑤	22-103	20-103
104	不定形石器	Y15~20LII層	76	57	7	29	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-e	22-104	20-104
105	石 簾	Y15~20LII層	74	34	15	30	全体調整	無調整	珪質頁岩	⑤-a	22-105	20-105
106	搔 器	10-35 I 層	49	44	20	44	全体調整	無調整	珪質頁岩	⑥-a	22-106	20-106
107	不定形石器	3-16 I 層	27	36	7	5	縁辺部調整	打面調整	珪質頁岩	⑧-g	22-107	20-107
108	不定形石器	Y31~35LII層	126	34	18	64	縁辺部調整	数回調整	珪質頁岩	⑧-c	22-108	21-108
109	石 簾	SX 9 F 2 (RQ22)	99	55	28	112	縁辺部調整	打面調整	頁 岩	⑤-b	22-109	15-109
110	フレイク	ST 3 F 2 (RQ8)	101	52	25	129	打面調整	無調整	珪質頁岩	接合資料1	23-110	21-110
111	フレイク	ST 3 F 2 (RQ18)	73	74	19	75	表 皮	打面調整	珪質頁岩	接合資料1	23-111	21-111
112	フレイク	ST 8 F 2 (RQ25)	76	53	23	60	打面調整	打面調整	珪質頁岩	接合資料2	23-112	22-112
113	フレイク	ST 8 F 2 (RQ1)	83	37	11	30	表 皮	打面調整	珪質頁岩	接合資料2	23-113	22-113
114	フレイク	ST 8 F 2 (RQ25)	80	21	11	28	表 皮	打面調整	珪質頁岩	接合資料2	23-114	22-114
115	フレイク	ST 8 F 2 (RQ25)	77	74	31	189	表 皮	打面調整	珪質頁岩	接合資料2	23-115	22-115
116	フレイク	ST 8 Y	79	35	18	51	打面調整	打面調整	珪質頁岩	接合資料2	23-116	22-116
117	フレイク	ST 8 Y (RQ25)	84	58	28	127	表 皮	打面調整	珪質頁岩	接合資料2	23-117	22-117
118	フレイク	ST 8 F 2 (RQ25)	83	58	22	113	打面調整	無調整	珪質頁岩	接合資料2	23-118	22-118
119	フレイク	ST 8 Y	78	46	28	103	打面調整	無調整	珪質頁岩	接合資料2	23-119	22-119
120	不定形石器	Y31~36LII層	61	32	9	12.8	縁辺部調整	縁辺部調整	珪質頁岩	⑧-c	—	20-120

### (3)磨製石器・石製品（第24～26図）

磨製石器として区分できるものに磨製石斧、石皿、磨石、凹石、敲石、礫石器などがあり、合計29点出土している。石材には、流紋岩、安山岩、凝灰岩、泥岩などがある。

①磨製石斧：東区II層から1点出土している。石材は流紋岩で、横断面形が橢円形をなす両刃の乳棒状石斧である。刃部は何度かの再調整を施している（第26図148）。

②石皿：S T 4 住居跡床面（第24図128）と東区II層（第26図147）から各1点出土している。128は扁平で大形の河原岩の片面に、円形ないし橢円形の窪んだ研磨面を有するもので、背面は平らで数条の敲打痕がある。147は河原岩の片面に、円形の窪んだ敲打面を有するもので、表面外周の摩滅痕も著しい。

③磨石：橢円形や球状の河原石を利用して、全面ないし2～4ヶ所の平坦な研磨面を有するもので、S X10落ち込み遺構から4点（第25図131～134）、S X80落ち込み遺構から1点（同127）、遺物包含層から6点（第26図138・141・142・144・146）の計11点が出土している。石材には花崗岩、泥岩、安山岩がある。

これらは磨面の特徴から二つに分類できる。

(a)類 磨面の全体を磨面として使用した可能性があるもの。

(b)類 2～4ヶ所の平坦面を磨面として使用した可能性があるもの。

④凹石：河原石の表裏面に窪みを有するものを一括してこのグループに含める。S T 7 住居跡から1点（第24図123）、S X10落ち込み遺構から3点（第25図129・130、第26図149）、S K50土壙から1点（第24図125）、S K50土壙から1点（第24図122）、遺物包含層から4点（第26図140・143・145）の合計10点が出土している。石材には花崗岩、砂岩、泥岩、安山岩、緑色凝灰岩がある。

これらは平面形や凹痕の位置などにより二つに分類できる。

(a)類 平面形が円形ないし橢円形を呈し、1～2面に凹痕を有するもの。

(b)類 平面形が長橢円形を呈し、1面に凹痕を有するもの。

凹石は磨石と密接な関係をもつと思われ、大きさも磨石とほぼ同様である。

⑤敲石：扁平な長方形の礫の端部に敲打痕をもつものである。遺物包含層から1点出土している。

⑥台石：横断面が長方形の安山岩の打ち割った面に、多条の敲打痕をもつものである。S T 1 住居跡の床面から1点出土している（第24図124）。

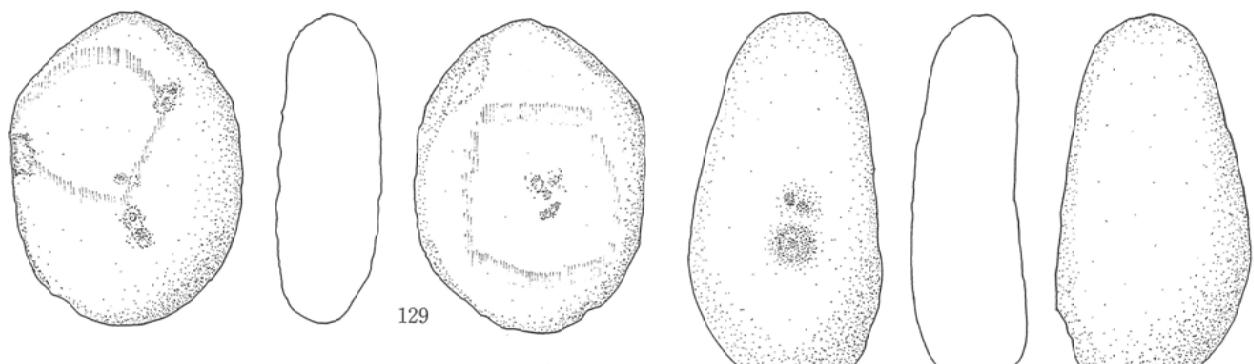
⑦礫石器：長さ10cm程の橢円形の礫の一部を打ち欠いて剝離面を作っているものである。石材は砂岩で、S T 7 住居跡から2点出土している（第24図121・126）。

この他石製品として区分できるものが、遺構外の東区II層から3点出土している。

第26図136は垂飾品と考えられるもので、扁平な橢円形の安山岩の中央に、両側から直径7mmの孔を穿ち、その下面にさらに小さな貫通孔を穿っている。第26図137は扁平な粘板岩の周囲を丸く打ち欠き、両面を研磨したものである。第26図139は扁平な凝灰岩の周囲を方形に打ち欠き、両面を研磨したものである。



第24図 磨製石器実測図（1）



129

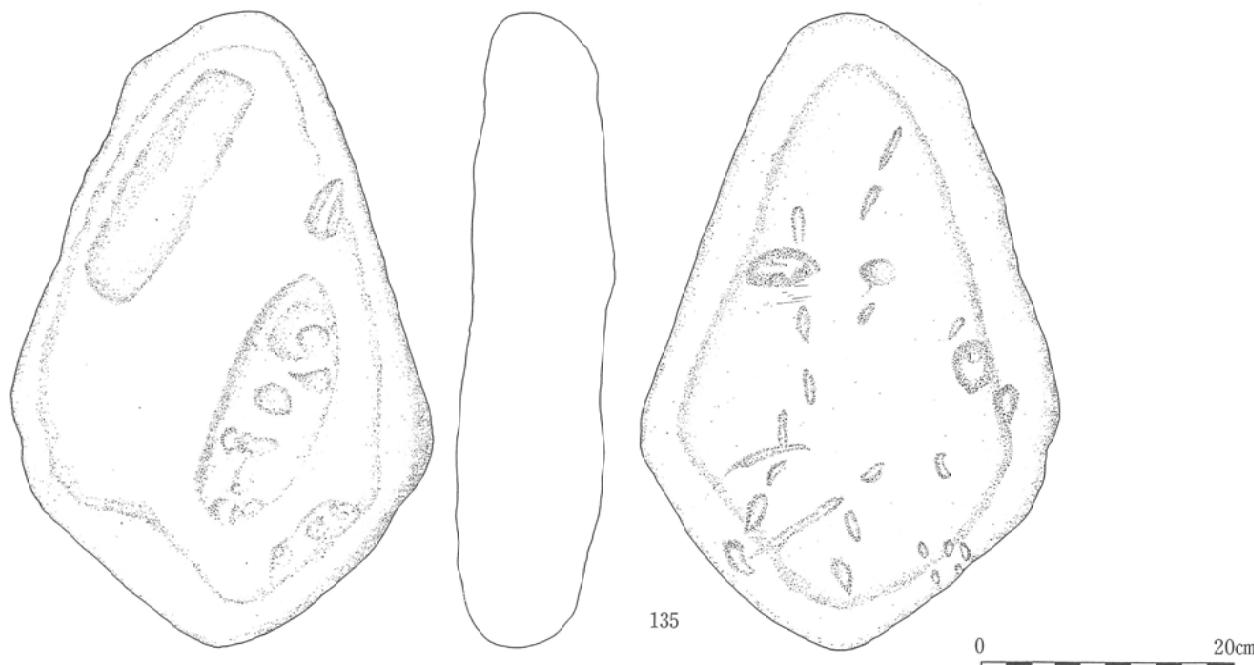
130

131

132

133

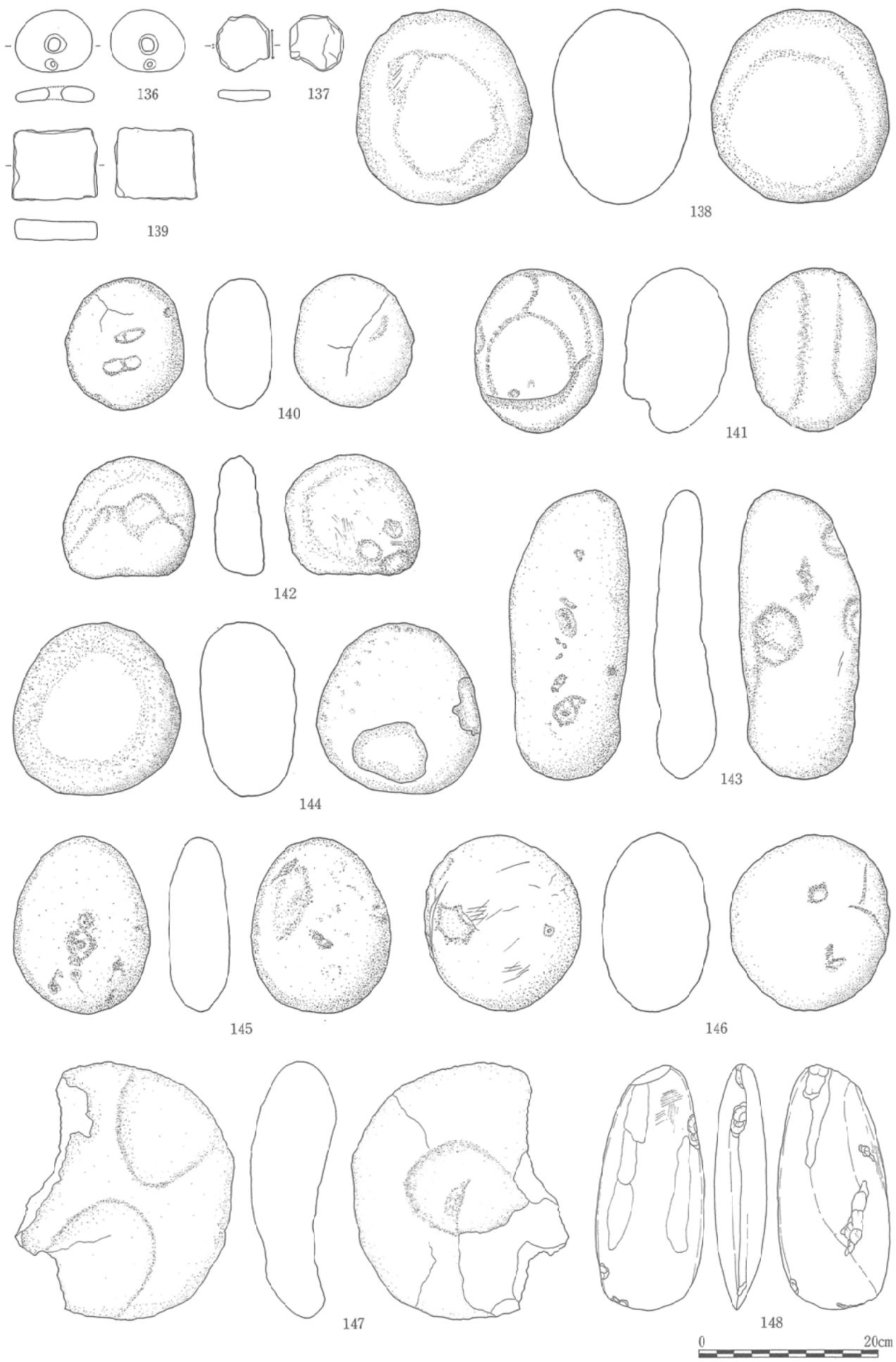
134



135

0 20cm

第25図 磨製石器実測図 (2)



第26図 磨製石器実測図 (3)

表7 石器属性表(4)

No	器種	出土地区	大きさ(mm)			重量(g)	分石類材	挿図	図版	
			長	幅	厚					
121	礫石器	ST 7 F 1 (No.25)	93	39	24	85	⑦	砂岩	24-121	23-121
122	凹石	SK55F 1	55	50	33	81	④-a	泥岩	24-122	23-122
123	凹石	ST 7 F 2 (No.4)	70	59	19	69	④-a	安山岩	24-123	23-123
124	台石	ST 1 Y	178	126	83	1,987	⑥	安山岩	24-124	24-124
125	凹石	SK50F 2	94	76	55	509	④-a	花崗岩	24-125	23-125
126	礫石器	ST 7 F 2 (No.26)	79	36	25	74	⑦	砂岩	24-126	23-126
127	磨石	SX80F 1	111	102	39	678	③-b	花崗岩	24-127	23-127
128	石皿	ST 4 Y	389	262	78	12,500	②	(砂岩)	24-128	-128
129	凹石	SX10F 2	125	91	42	507	④-a	緑色凝灰岩	25-129	23-129
130	凹石	SX10F 1 (No.23)	151	76	46	609	④-b	(砂岩)	25-130	24-130
131	磨石	SX10F 2 (No.15)	104	66	52	484	③-a	泥岩	25-131	23-131
132	磨石	SX10F 2 (No.22)	121	107	26	370	③-b	安山岩	25-132	24-132
133	磨石	SX10F 2 (No.7)	238	121	48	2,122	③-b	安山岩	25-133	24-133
134	磨石	SX10F 2 (No.3)	128	83	36	525	③-b	安山岩	25-134	-134
135	台石	SX10F 4 (No.8)	334	221	81	7,800	⑥	花崗岩	25-135	24-135
136	石製垂飾品	東区II層(RQ 1)	35	42	9	11		安山岩	26-136	23-136
137	円盤状石製品	東区II層(RQ 4)	(32)	29	6	9		粘板岩	26-137	23-137
138	磨石	10-24 II層	109	99	77	1,093	③-a	花崗岩	26-138	24-138
139	板状石製品	東区II層	40	44	11	41		凝灰岩	26-139	23-139
140	凹石	東区II層	74	66	37	227	④-a	安山岩	26-140	23-140
141	磨石	10-34 II層	93	71	59	525	③-a	花崗岩	26-141	23-141
142	磨石	9-36 II層	69	75	27	201	③-b	泥岩	26-142	23-142
143	凹石	Y25-30LII層	163	67	35	422	④-b	泥岩	26-143	24-143
144	磨石	Y31-35LII層	97	92	53	647	③-b	花崗岩	26-144	23-144
145	凹石	Y31-35LII層	10	75	35	271	④-a	泥岩	26-145	23-145
146	磨石	10-36 II層	99	88	61	689	③-a	安山岩	26-146	23-146
147	石皿	東区II層	191	161	62	1,497	②	(泥岩)	26-147	24-147
148	磨製石斧	東区II層(RQ 6)	147	62	30	367	①	(流紋岩)	26-148	19-148
149	凹石	SX10F 4 (No.32)	83	77	32	200	④-b	泥岩	—	—
150	凹石	Y15-20LII層	107	82	40	432	④-a	花崗岩	—	—
151	磨石	11-35 II層	139	79	44	604	③-b	花崗岩	—	—
152	敲石	中央区II層	179	56	25	345	⑤	安山岩	—	—
153	石核	10-33 II層	33	52	12	18.7	⑧-f	珪質頁岩	—	20-153
154	フレイク	Y15~20LII層	56	47	20	47.2	⑧-a	珪質頁岩	—	20-154
155	フレイク	Y31~35LII層	42	45	31	56	⑩	珪質頁岩	—	21-155
156	不定形石器	東区II層	80	50	13	41	⑧-c	珪質頁岩	—	21-156
157	不定形石器	11-36 II層	108	46	28	65	⑧-c	珪質頁岩	—	21-157

※出土地区欄の(No.)は、各遺構毎の遺物取上げ番号を表わす。

## V まとめ

### 1 遺物について

#### (1)古屋敷遺跡出土の縄文土器群について

本遺跡出土の土器は、第IV章で述べたように縄文時代早期から同前期前葉にかけてのものである。出土した土器の量が少なく、また大半が小破片で、全体の器形がわかるものも1個体のみであるが、県内における当該期の資料が数少ない現状から貴重な資料である。

本項では先に分類した第1群～第4群土器について、周辺遺跡の調査成果をもとに時期的な位置付けを行う。

第1群土器a類は所謂簾状角押文の仲間で、体部上半の文様帯が三段に分かれ、上位と下位には半截竹管による2条単位の平行沈線文と「【】」状の横位の簾状角押文が3条、中位には貝殻腹縁による浅い条痕地文上に半截竹管による2条単位の山形の平行沈線文が施されている。山形県内では米沢市二タ俣A遺跡S T10住居跡（文献4・5）から同様な土器が出土している。また福島県いわき市竹之内遺跡にも同様な資料がある（文献6）。本類は宮城県の明神裏III式に類似しているものの、平行沈線や角押文がより深いことから、これより一時期古い縄文時代早期中葉関東地方の田戸下層式後半頃に比定される。

第1群土器b類は2条の平行沈線文の中に細い斜位の貝殻腹縁連続刺突文が施されているもので、これも米沢市二タ俣A遺跡S T17住居跡に類例がある。1点のみの資料であるが、縄文時代早期中葉広義の田戸上層式に比定しておきたい。

第1群土器c類は半截竹管による2条単位の平行沈線文の中に「【】」状の横位の連続刺突文が施されているもので、明神裏III式および広義の田戸上層式に比定しておきたい。

第2群土器a類は外面に太い沈線文、内面に貝殻条痕文が施されているもので、南陽市月ノ木B遺跡第7群土器に類例がある（文献7）。関東地方の鶴ヶ島台式に比定される。

第2群土器b類は縄文条痕文、第2群土器c類は外面に細い撚糸文、内面に条痕文が施されているものである。相原淳一は、これらを縄文時代早期後葉の後半に属する「縄文条痕文土器が卓越する型式群」としたうえで、三つに細分している（文献8）。本群の土器は小片しかないものの、このうちb類が素山貝塚上層・楓木貝塚上層、c類が吉田浜貝塚上層の土器に併行するものと考えられる。

第3群土器は横走する非結束の太い羽状縄文を特徴とするもので、宮城県三神峰遺跡南斜面第II層土器に例があり（文献8）、時期は縄文時代前期前葉大木1式に比定できる。

第4群土器は非結束の細い羽状縄文を特徴とするもので、東根市小林A遺跡（文献9）に類例がある。縄文時代前期前葉大木2b式頃の時期に比定できる。

#### (2)古屋敷遺跡出土の石器について

本遺跡出土の石器は、前項の縄文土器の時期的位置付けから、縄文時代早期中葉から同前期前葉までに属することがわかった。

石器の大半が剥片ないし碎片で、所謂toolとして確認できたものは55点にすぎない。これ

らについては、先に8器種18類に分類したが、全体として石匙がほとんどなく、石箋が多いことが特徴である。また石箋の中でも、刃部が両刃に比べ片刃のものがトランシェ様石器も含め圧倒的に多い。これらの石器については、秦昭繁が山形県早坂台遺跡の資料をもとに「片刃箋状石器」として考察を述べている（文献10）。それによれば縄文時代早期から同前期初頭の当該資料は、背面の二側辺の縁辺に調整剝離を加え、その面を打面として正面に剝離を施すという特殊な技法によって形作られ、背面がフラットな資料は少ない傾向にあるという。古屋敷遺跡出土の片刃の石箋についても同様なことがいえる。

また石器剝片が大きく、その量が多いことも注目される。これは周辺の横川や明沢川流域に珪質頁岩の原産地があることが要因と思われる（文献11）。磨製石器については、磨石・凹石・石皿のセットはそろっているが、量的に多いとはいえない。

## 2 遺構について

今回の調査によって古屋敷遺跡からは、竪穴住居跡が部分的な検出も含め6棟、落ち込み遺構が13基、土壙が50基、溝状遺構が3条、柱穴と思われるピットが30個検出された。時期的には、縄文時代早期中葉から同前期前葉までの比較的短期間に限定できる。つぎに出土した土器の分析をもとに、各遺構の時期について述べる。

竪穴住居跡のうち、S T 3・7・9住居跡の3棟から縄文土器が数片が出土している。S T 3住居跡出土の土器は第2群土器c類に属するもので、時期は縄文時代早期末葉吉田浜貝塚上層土器併行期、関東地方では下吉井式期にあたる。

S T 7住居跡の床面からは第1群土器b類に属する土器が1点、第3群土器に属する土器が4点出土しているが、住居跡の時期は床面の主体となる土器をとり、縄文時代前期前葉大木1式に推定したい。S T 9住居跡のF 2および床面からは第3群土器に属する土器が10点出土しており、時期は同じく縄文時代前期前葉大木1式にあたる。S T 8住居跡からは縄文土器の出土はないが、S T 7・9住居跡との重複関係から時期は同じく縄文時代前期前葉に属するものと推定される。S T 1住居跡とS T 4住居跡からは縄文土器の出土がなく、時期は不明である。

落ち込み遺構のうちS X80のF 2から第2群土器b類に属する土器が4点出土しており時期は縄文時代早期後葉の後半素山貝塚上層・楳木貝塚上層土器併行期に属する。

S X102落ち込み遺構からは、第1群土器a類を主体としながらも第2群土器a類、第3群土器が各1点づつ出土している。

土壙からはすべて縄文土器の出土がなく時期は不明であるが、住居跡などの重複関係からみて、S K49土壙はS T 7住居跡と近似した時期、S K74土壙はS X80落ち込み遺構と近似した時期が推定される。

S X 6 落ち込み遺構はEL104石敷炉を伴うもので、付編で後述する同石敷炉内の2点の炭化材の放射性炭素年代測定結果からは、BP7,960±150とBP6,830±210という測定値が得られている。

6棟の竪穴住居跡の中には、いずれも火を焚いた炉跡は認められなかった。S X 6落ち込み遺構の様子などから、炉跡は住居跡内ではなく、屋外に簡単な施設を設けたことも考えられる。

古屋敷遺跡の集落全体については、発掘調査区が道路部分に限られており、また住居跡などの遺構数も少ないとことから、遺構や集落配置まで言及できる資料はない。ただし、当時の集落が今回の遺構配置や地形などからみて、台地の東から南縁辺に沿って弧状に並ぶ可能性がありそうである。

#### 参考文献

- 1 山形県教育委員会：『分布調査報告書（19）』山形県埋蔵文化財調査報告書第171集 1992年
- 2 山形県：『土地分類基本調査小国・手ノ子』5万分の1国土調査 1990年
- 3 柏倉亮吉編：『山形県西置賜郡小国町朝篠遺跡発掘調査報告書』建設省東北地方建設局1970年
- 4 手塚孝・菊地政信：『米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第II集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第8集 1983年
- 5 菊地政信：『山形県米沢市の桑山遺跡群における縄文時代早期の集落について』加藤稔先生還暦記念「東北文化論のための先史学論集」所収 1992年
- 6 馬目順一編：『竹之内遺跡』いわき市教育委員会いわき市埋蔵文化財調査報告第8冊 1982年
- 7 山形県教育委員会：『月ノ木B遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第135集 1989年
- 8 相原淳一：『東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年』考古学雑誌第76巻第1号 1990年
- 9 東根市教育委員会・小林遺跡調査団：『小林A遺跡』 1975年
- 10 秦昭繁：『山形県早坂台遺跡の片刃笠状石器について』山形考古第3巻第4号 1985年
- 11 秦昭繁：『山形県における珪質頁岩の分布について』考古学雑誌第80巻2号 1994年

## 報告書抄録

ふりがな	ふるやしきいせきちょうさほうこくしょ
書名	古屋敷遺跡調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	佐藤庄一・飯塚 稔・黒坂広美
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふるやしきいせき 古屋敷遺跡	やまがたけんにしおい 山形県西置 たまごん おぐにまち 賜郡小国町 おおあざつな ぎはこ 大字綱木箱 のくちあざふる や の口字古屋 しき 敷	6401	平成2年度 登録	38度 02分 26秒	139度 50分 01秒	19930913～ 19931015	760	横川ダム建 設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
古屋敷遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡 落ち込み遺構 土壙 溝状遺構 その他 ピットなど	6棟 13基 50基 3条	縄文土器・石鎌・石槍・ 搔器・削器・打製石斧・ 剝片・磨製石斧・石皿・ 磨石・凹石・石製品	居住跡は不整形のものと隅丸長方形のものがあり、大きさは3～4cm位のもの。出土土器から縄文早期中葉、縄文早期末葉、縄文前期前葉の3つの時期にわたるものと推定される。

図 版

図版 I



遺跡遠景(南対岸から)



遺跡発掘前状況

図版2



遺跡発掘風景



遺跡近景



南壁土層断面

図版 3



東半部遺構全景



ST I 全景

図版 4



ST 3 全景



ST 4 全景

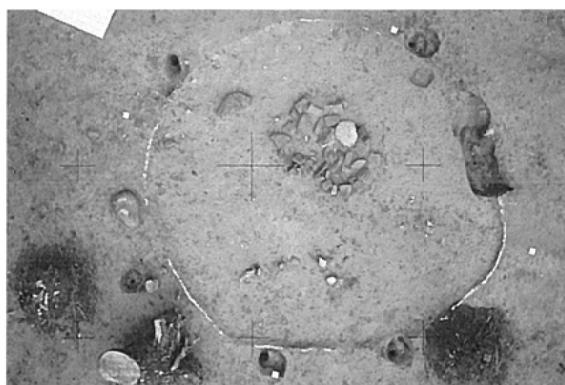
図版 5



中央部遺構全景



SX 6 全景



SX 6 全景



SX 6 発掘状況

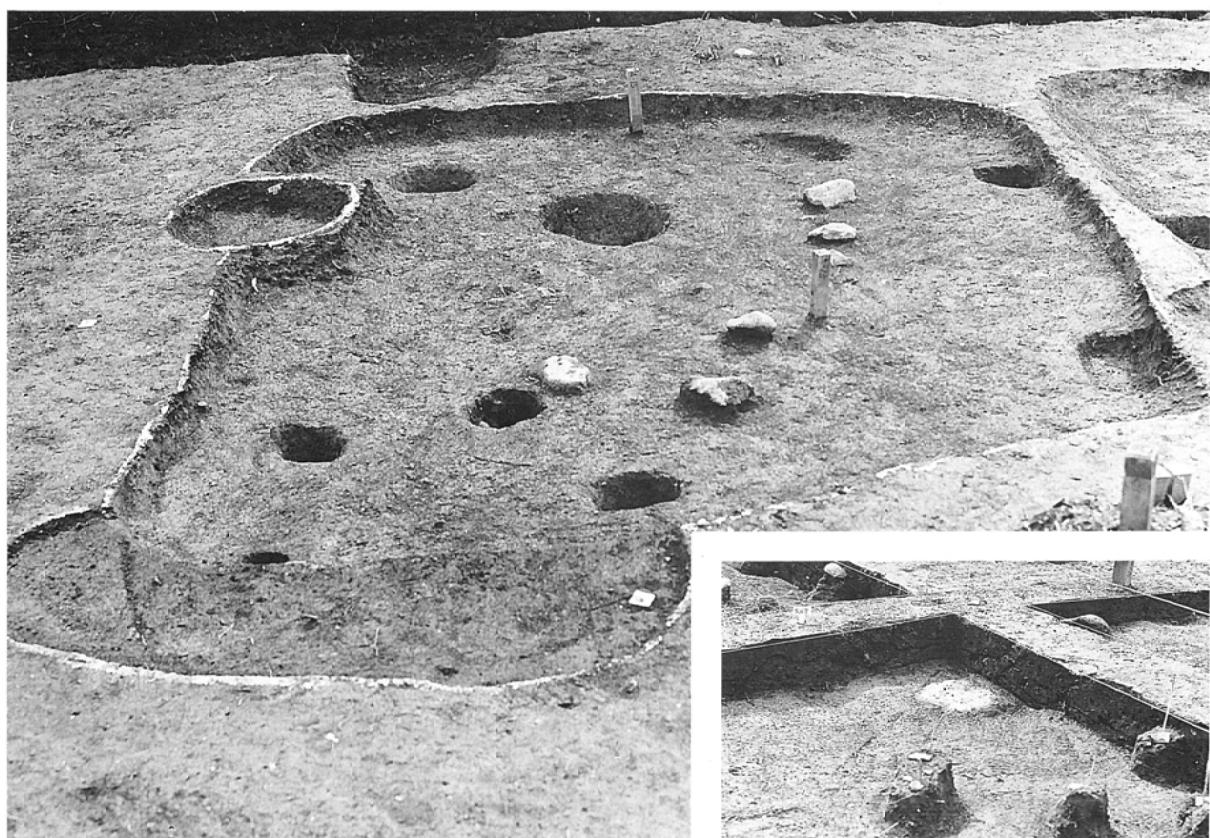


SX 6 — EL104

図版 6



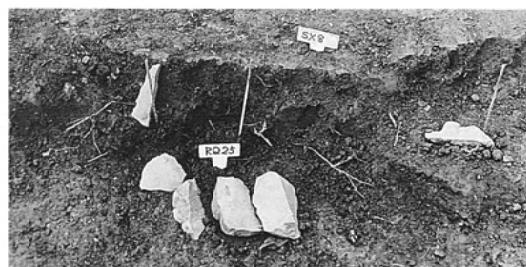
ST 7・8・9 全景



ST 7 全景

ST 7 土層断面

图版 7



ST 8 石器出土状况



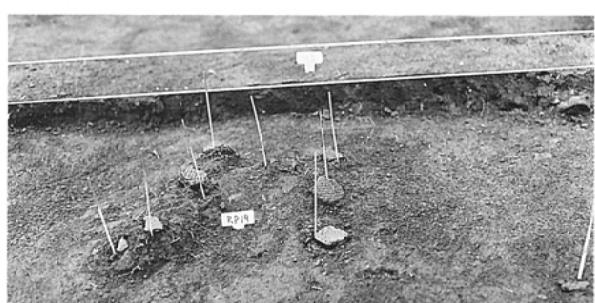
ST 8 全景



ST 9 全景

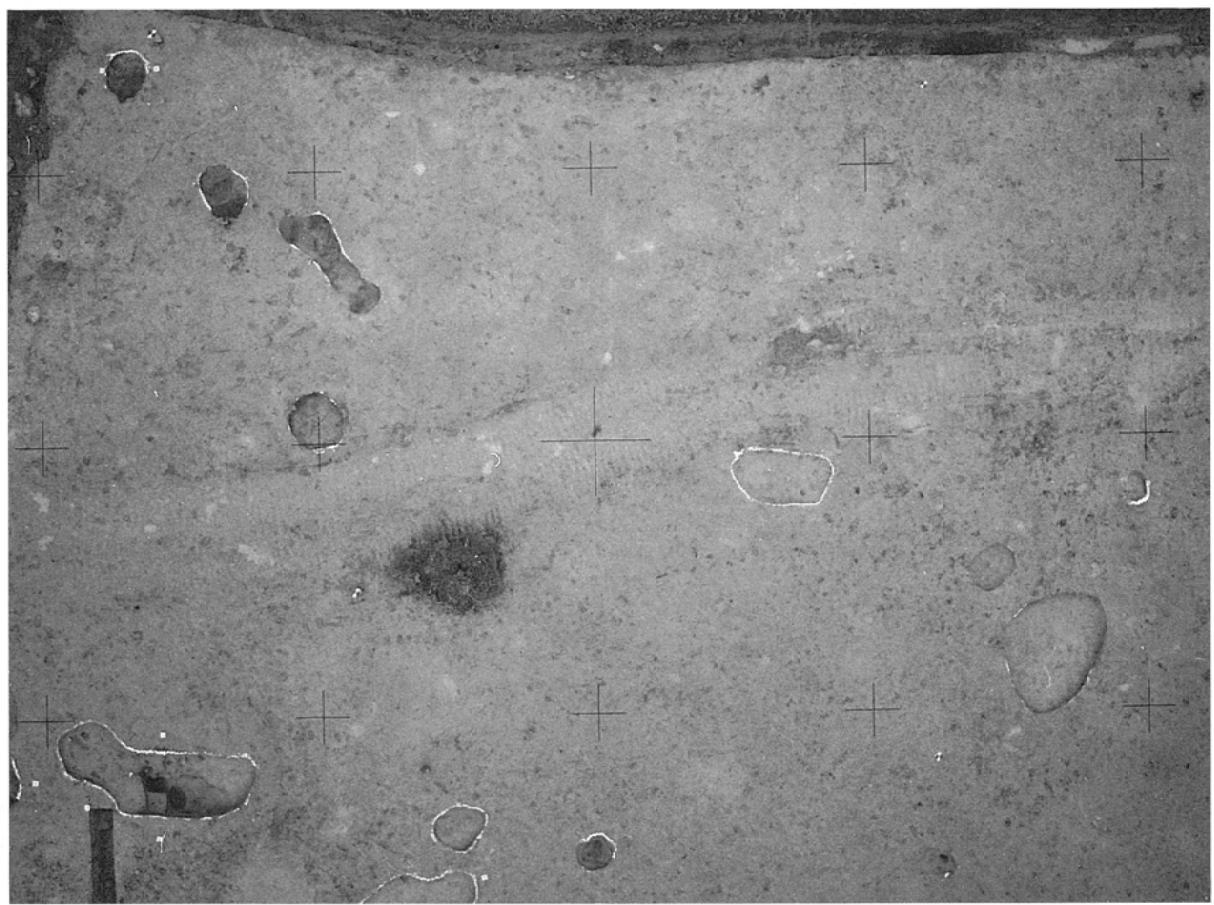


ST 9 遗物出土状况



ST 9 土器出土状况

図版 8



西半部遺構全景



SX10全景



SX10土層断面

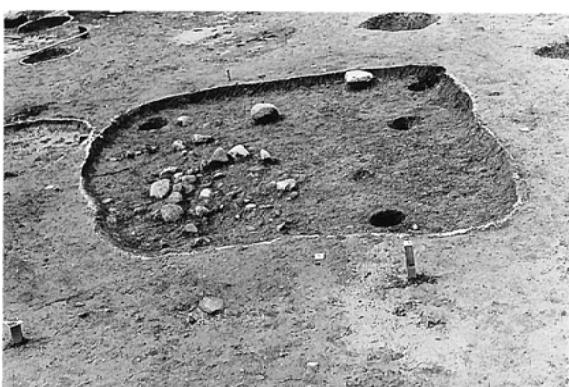


SX10周辺遺構

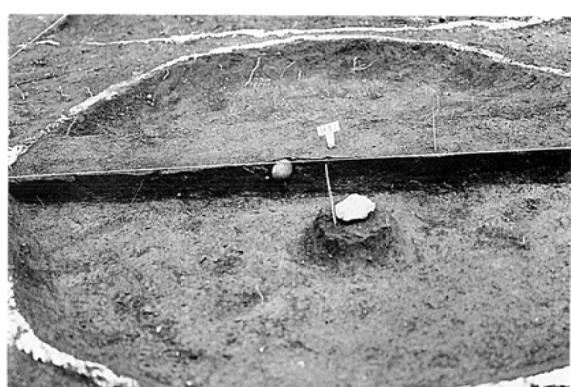
图版 9



SX62・63・64全景



SX41全景



SK51全景



SK55全景



RP 2 土器出土地

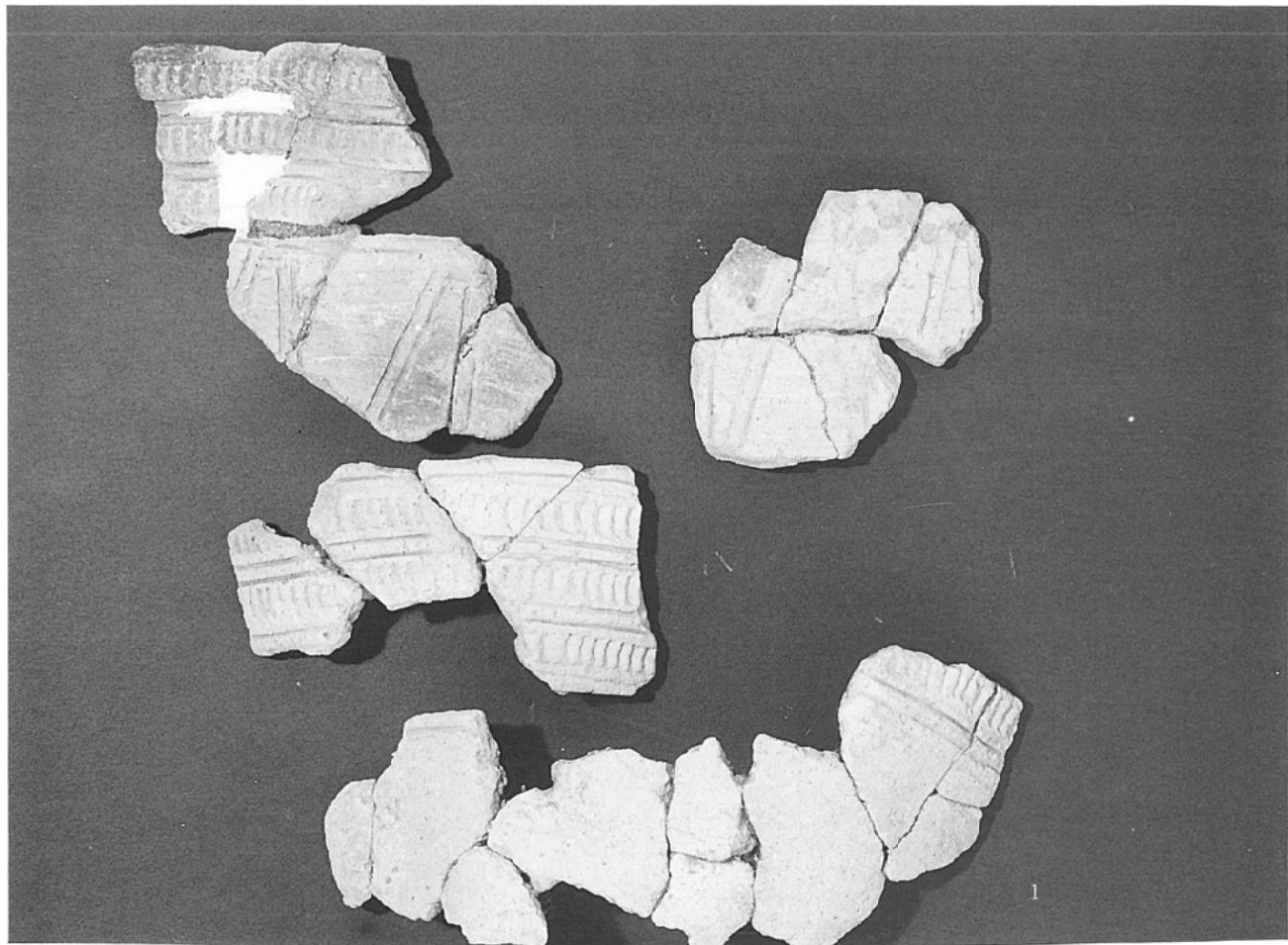
図版10



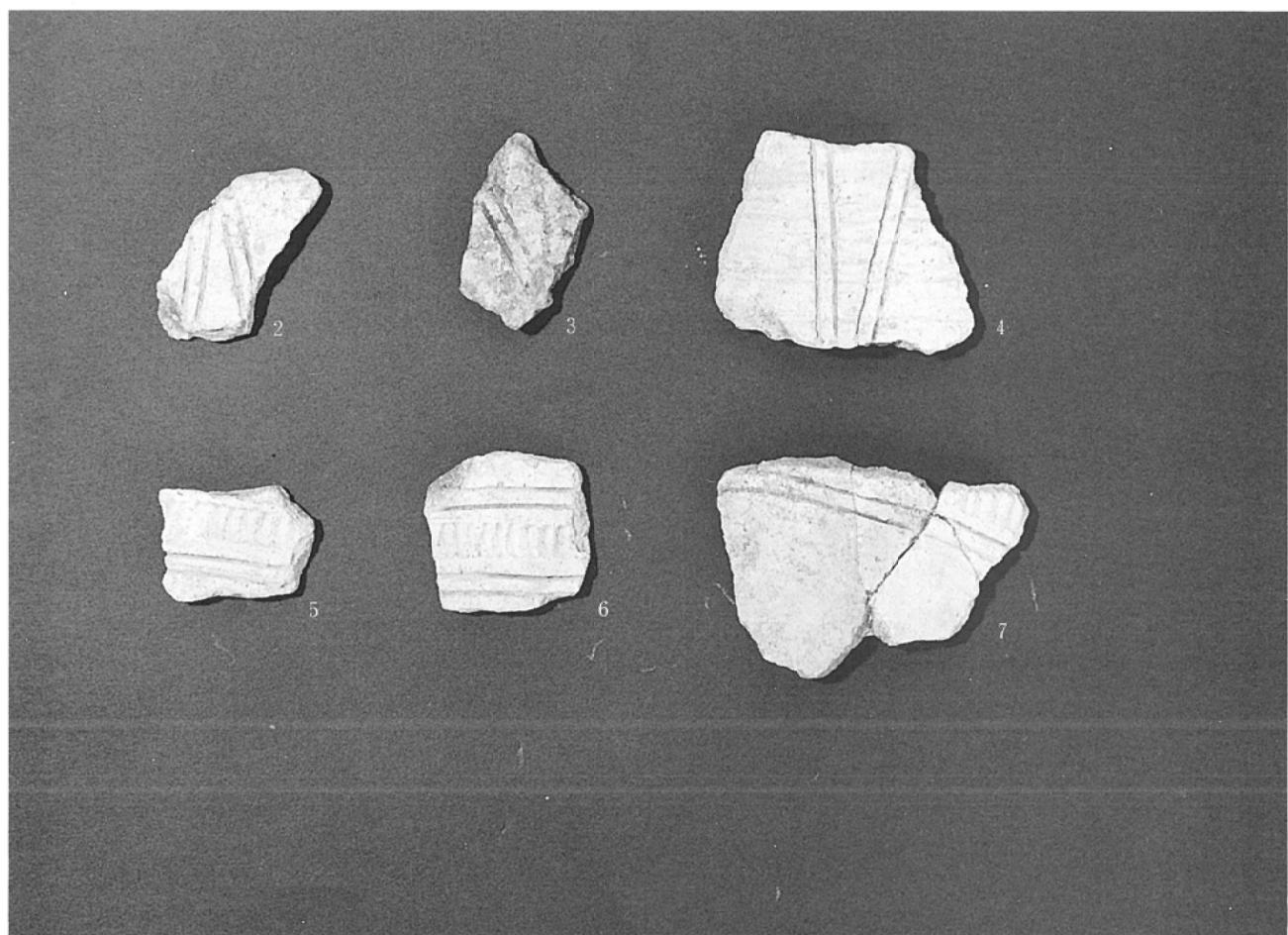
北西隅拡張区遺構全景



南東隅遺構と横川

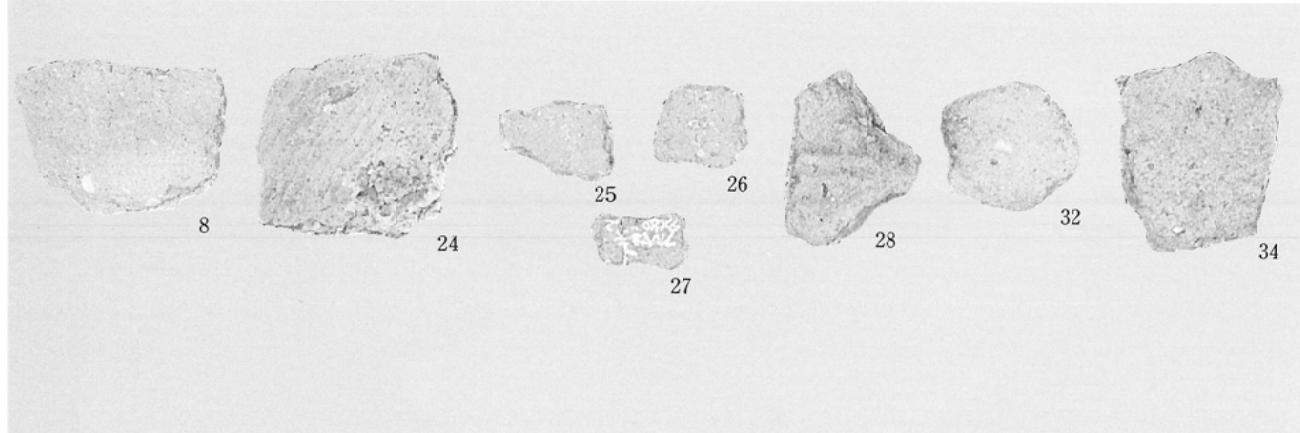


縄文土器(I)

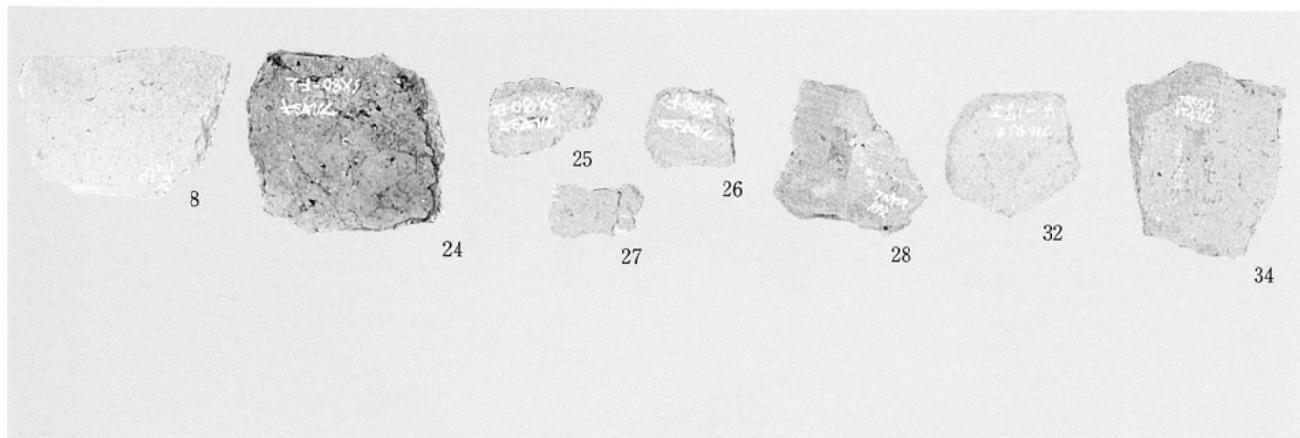


縄文土器(2)

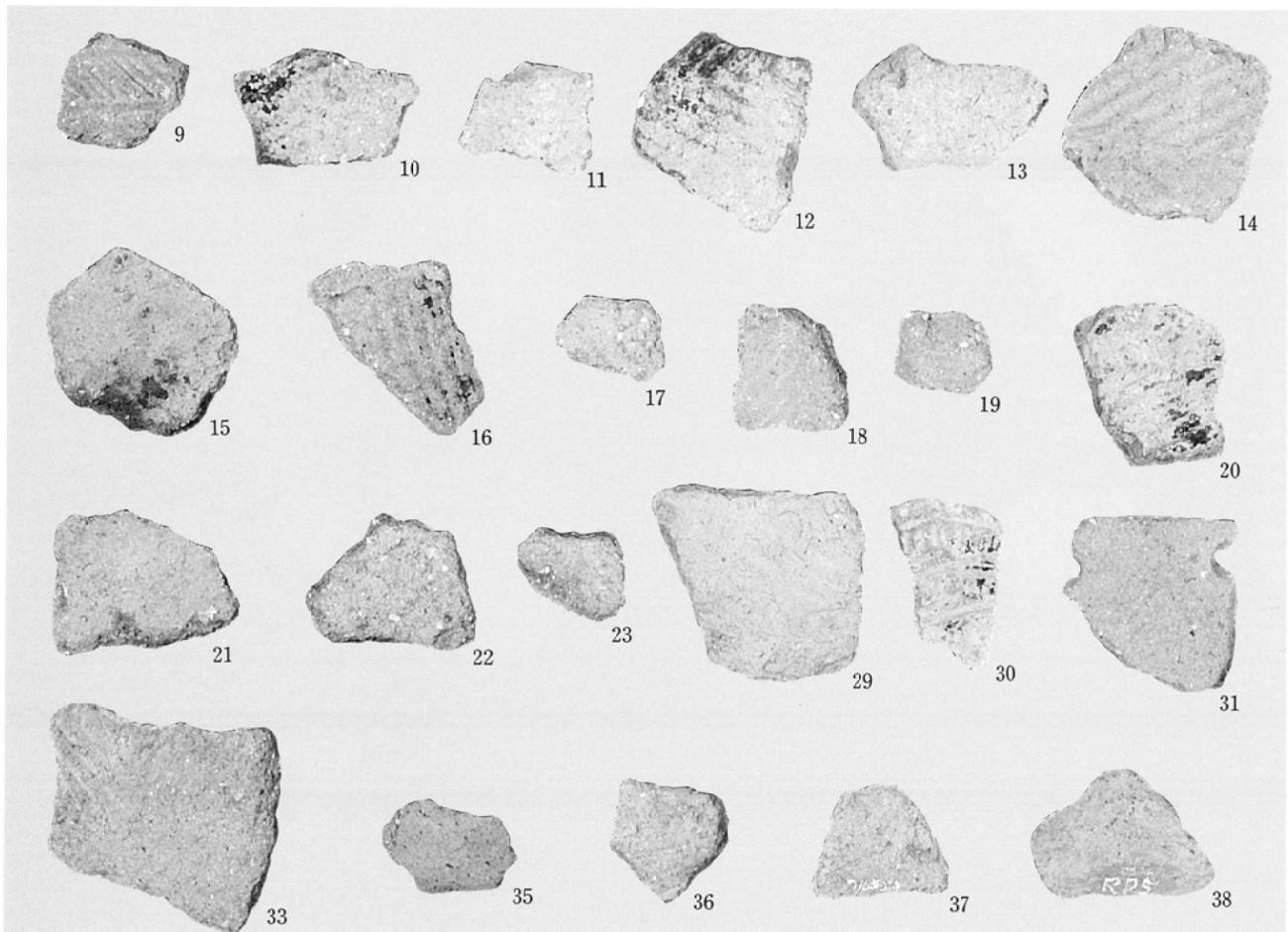
図版12



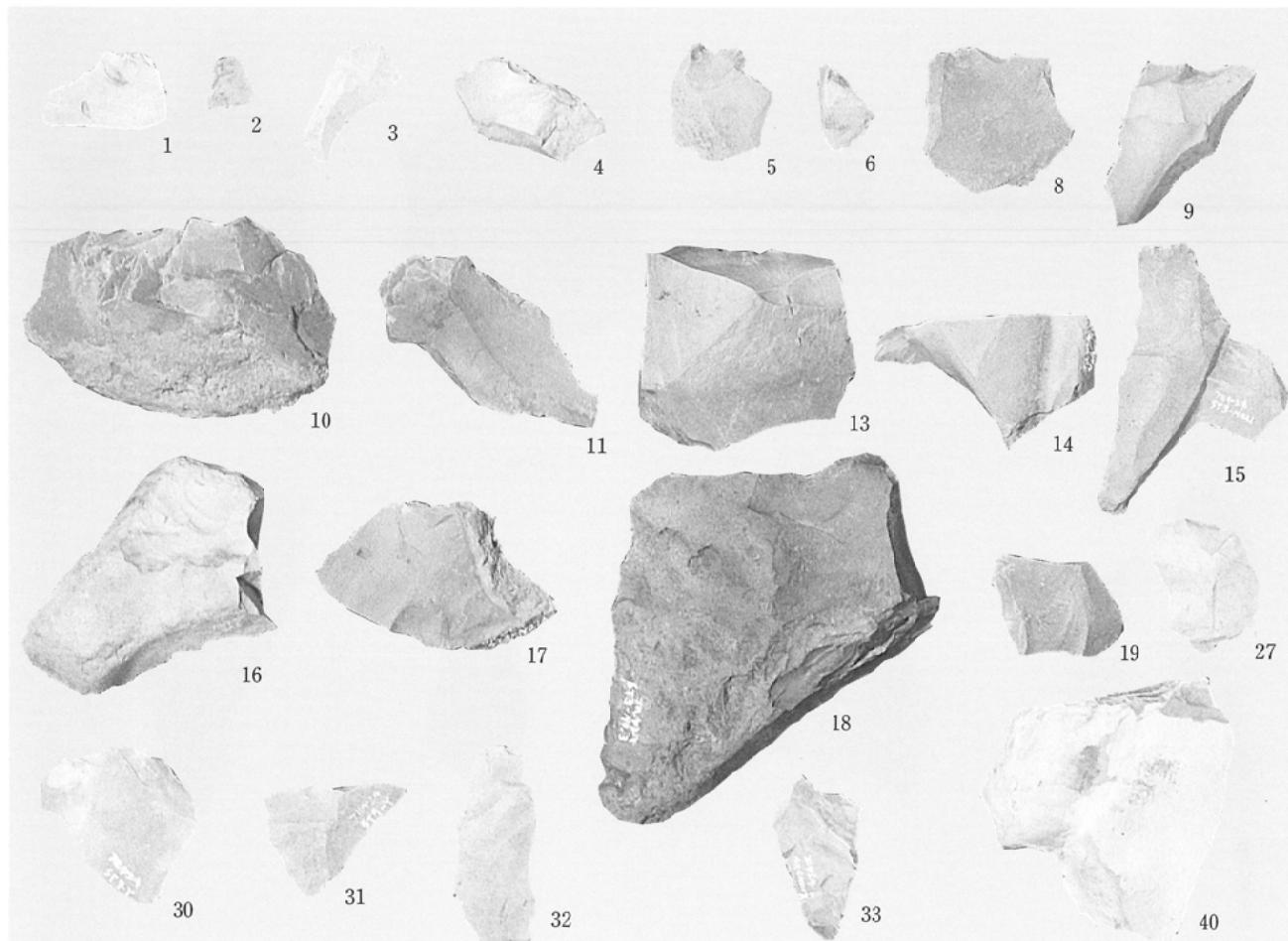
縄文土器(3)表面



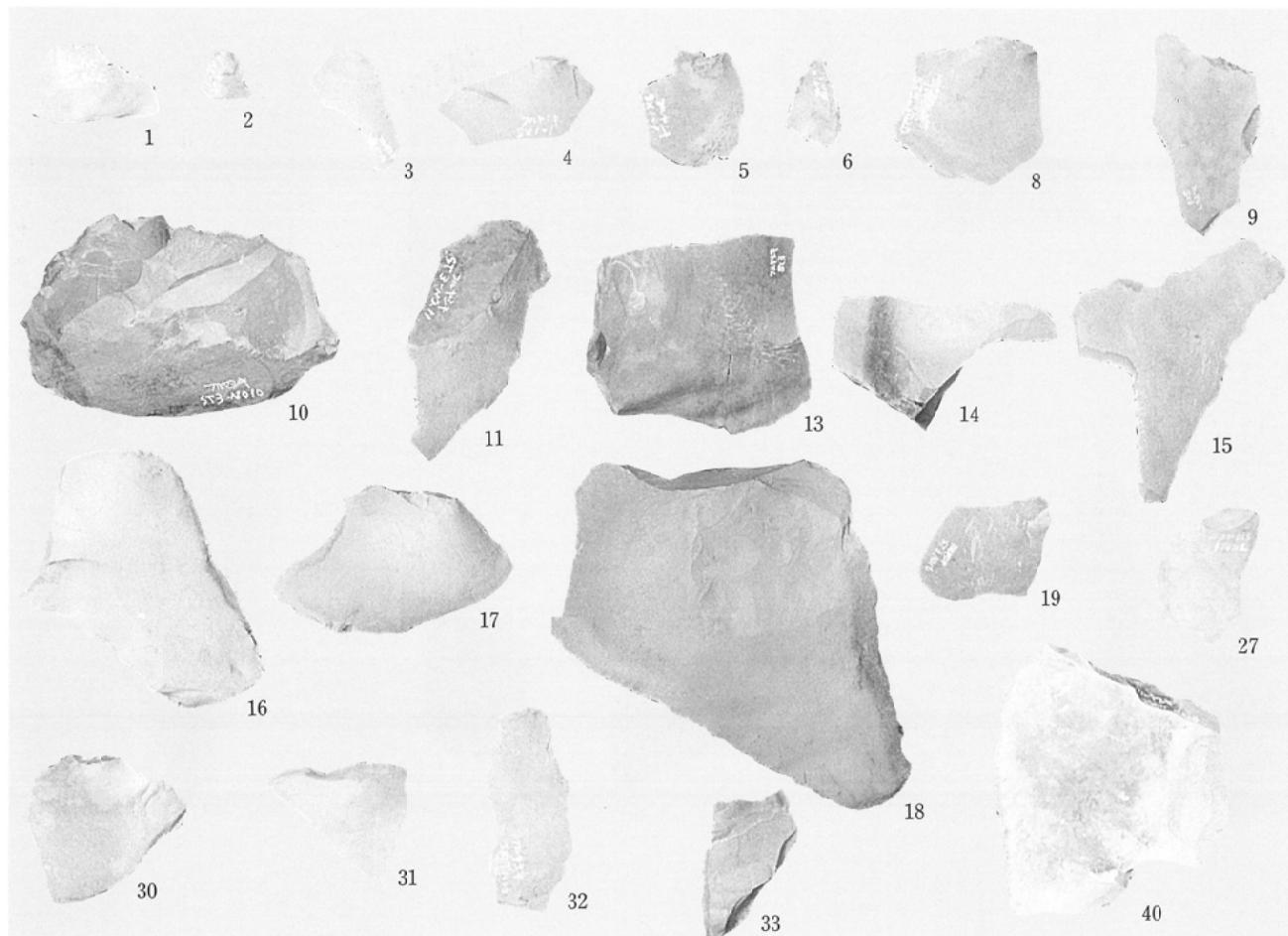
縄文土器(3)裏面



縄文土器(4)

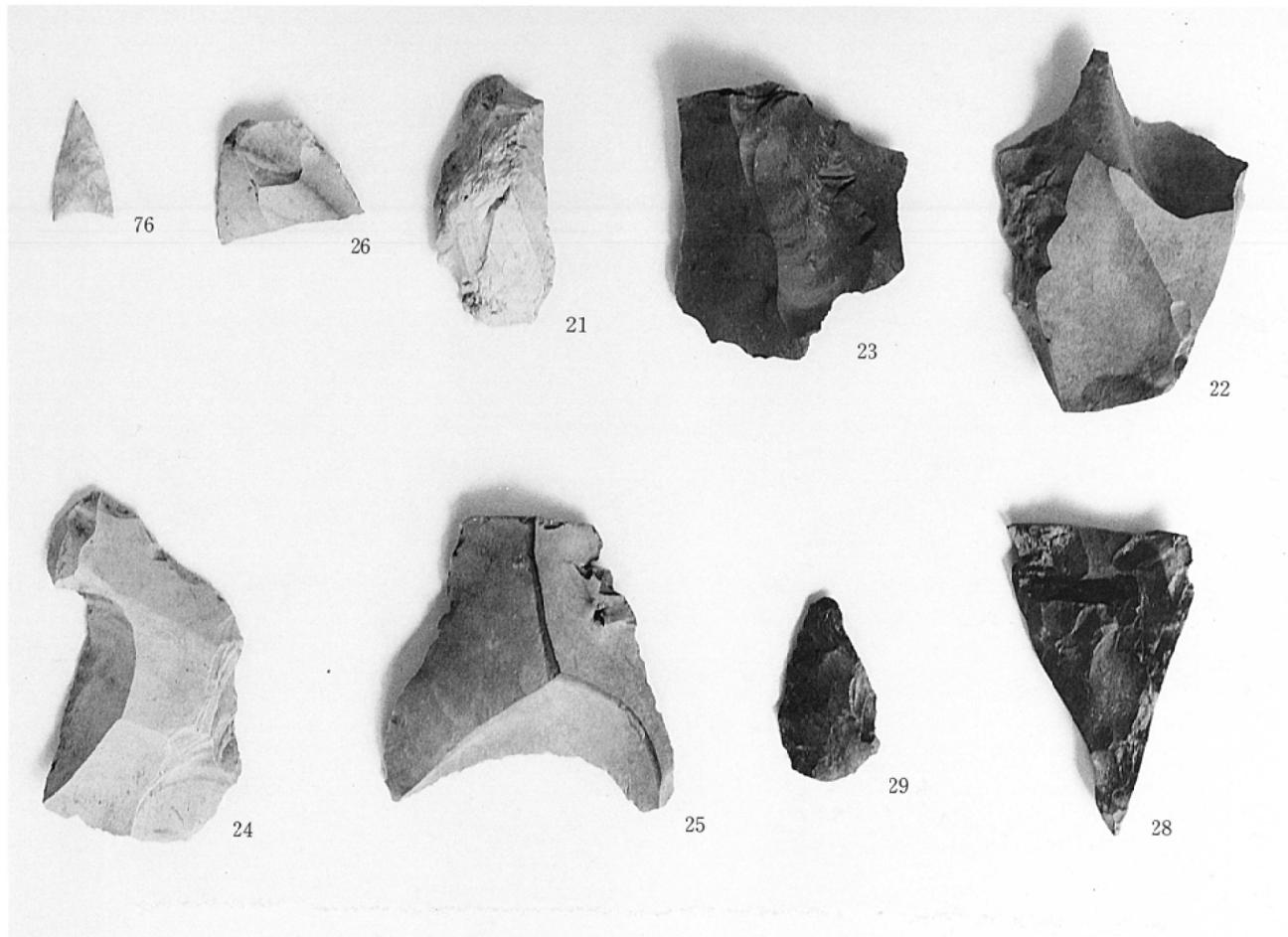


打製石器(1)正面

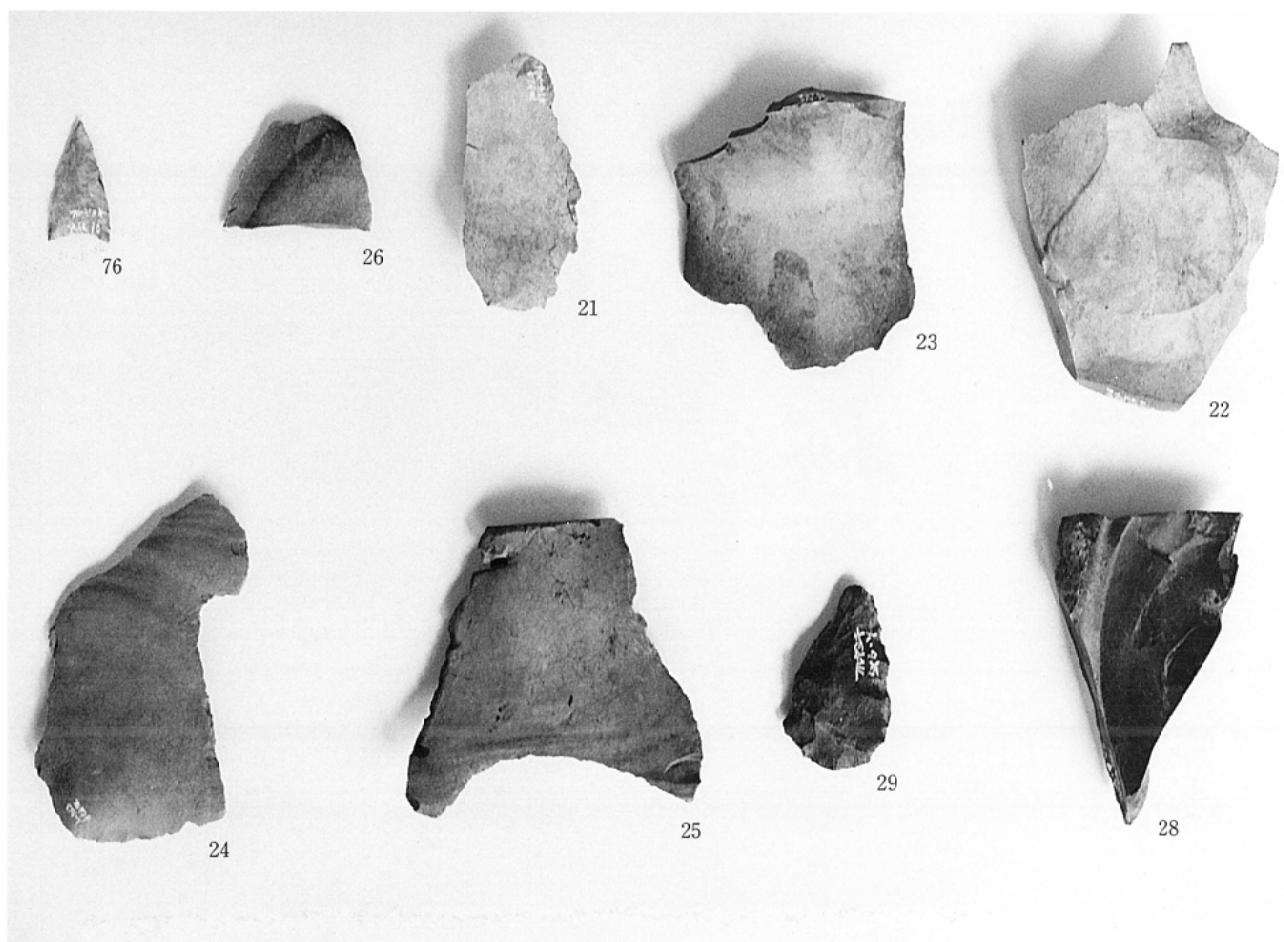


打製石器(1)背面

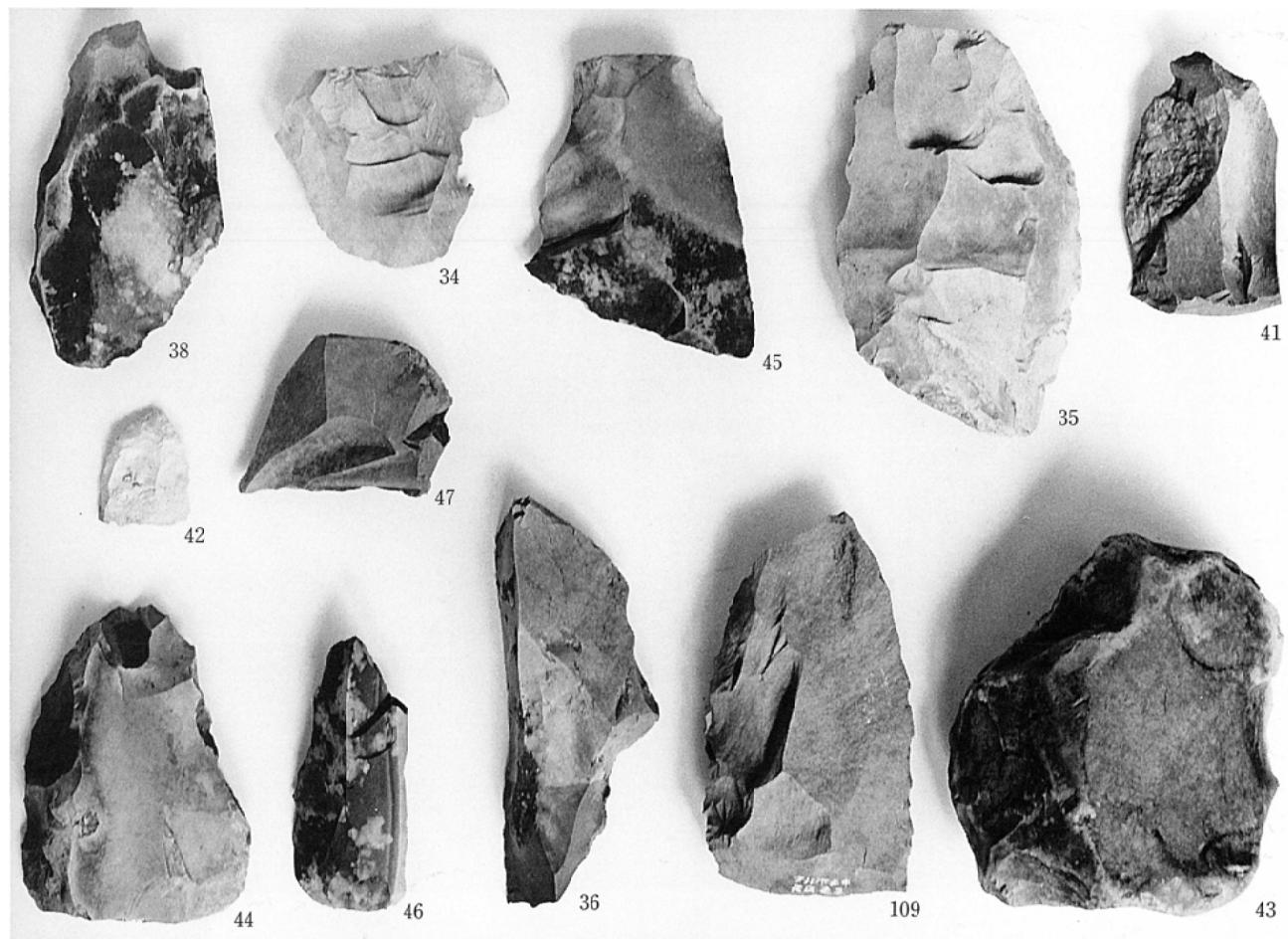
図版14



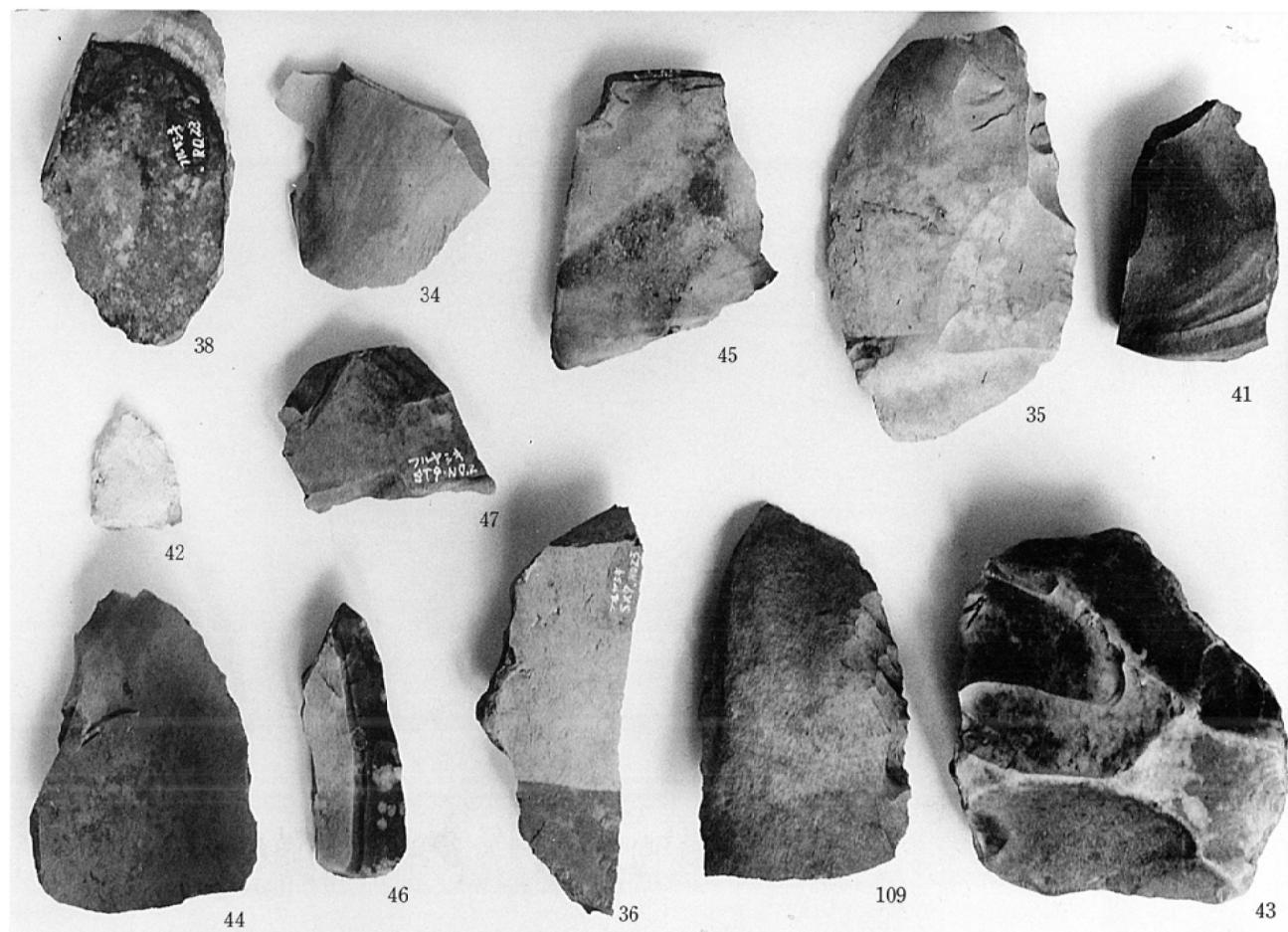
打製石器(2)正面



打製石器(2)背面



打製石器(3)正面

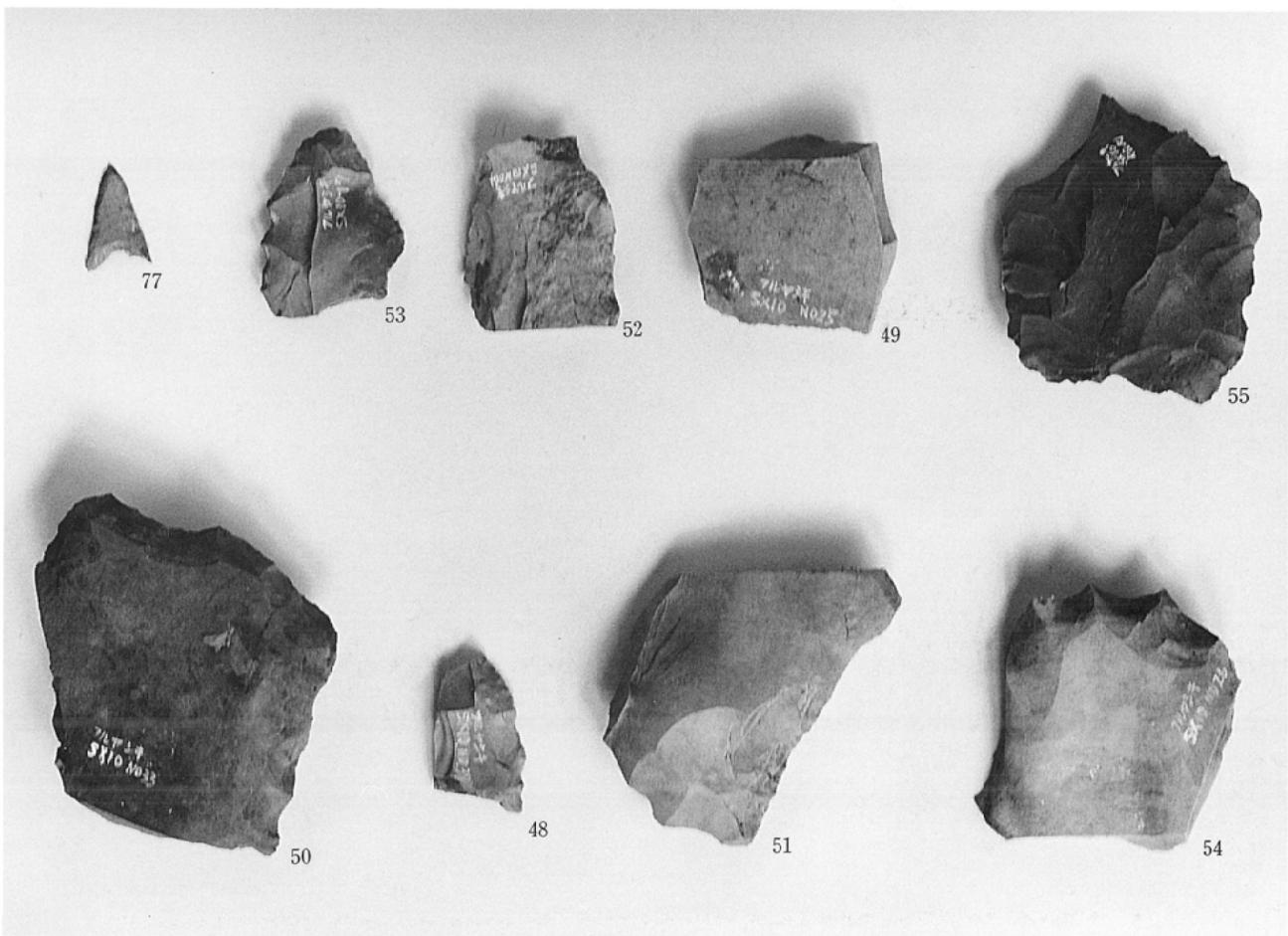


打製石器(3)背面

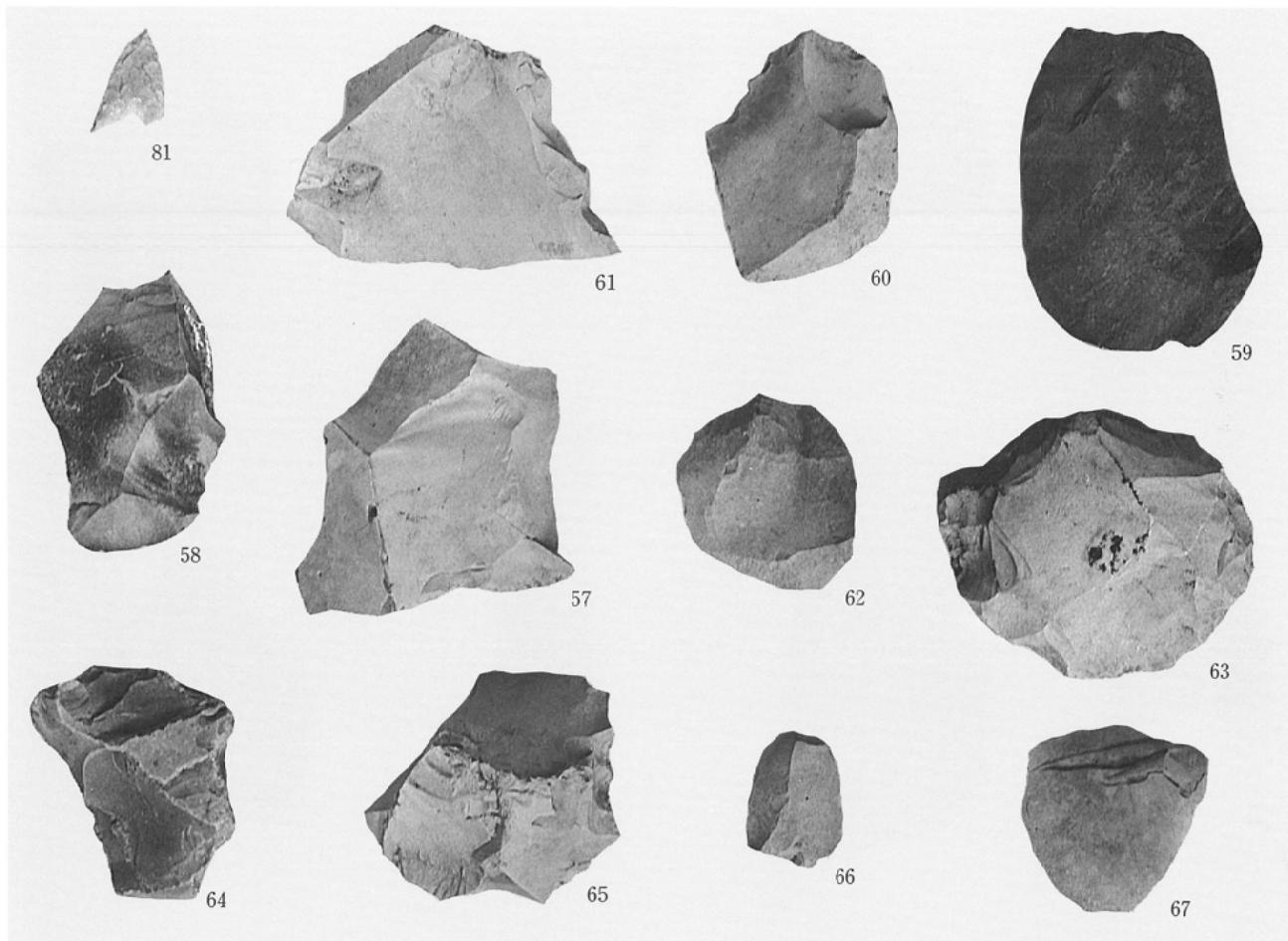
図版16



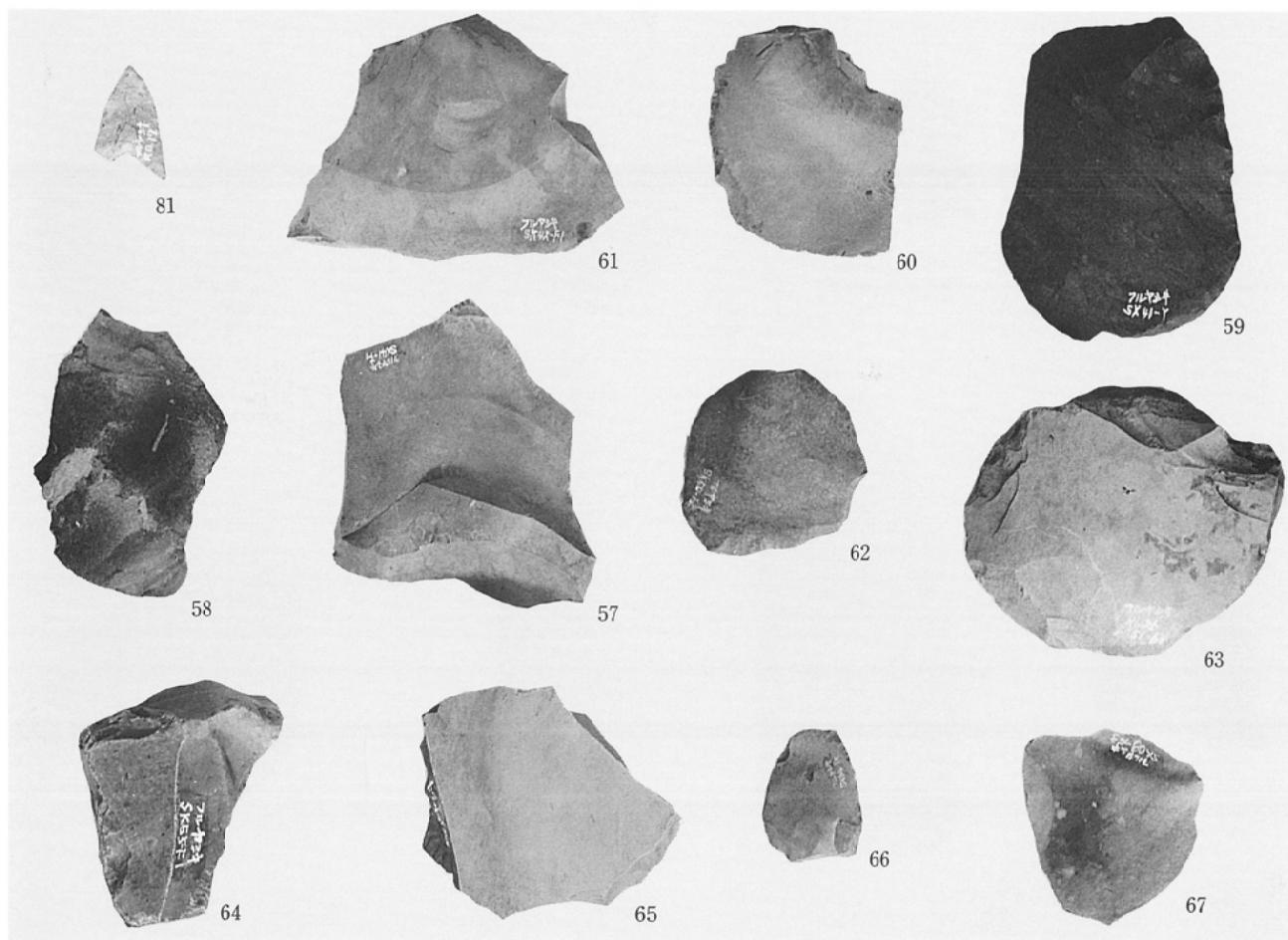
打製石器(4正面)



打製石器(4背面)

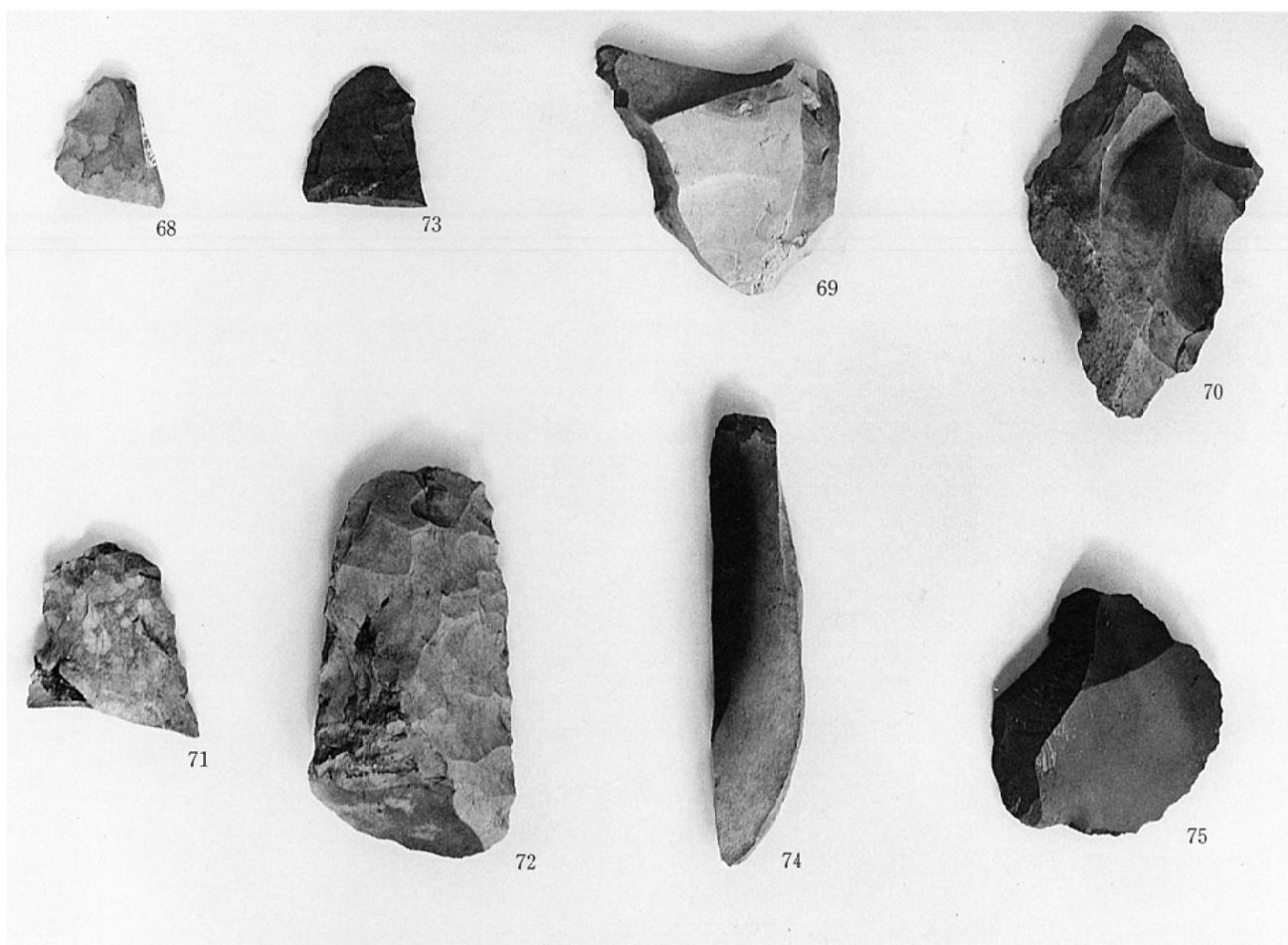


打製石器(5)正面

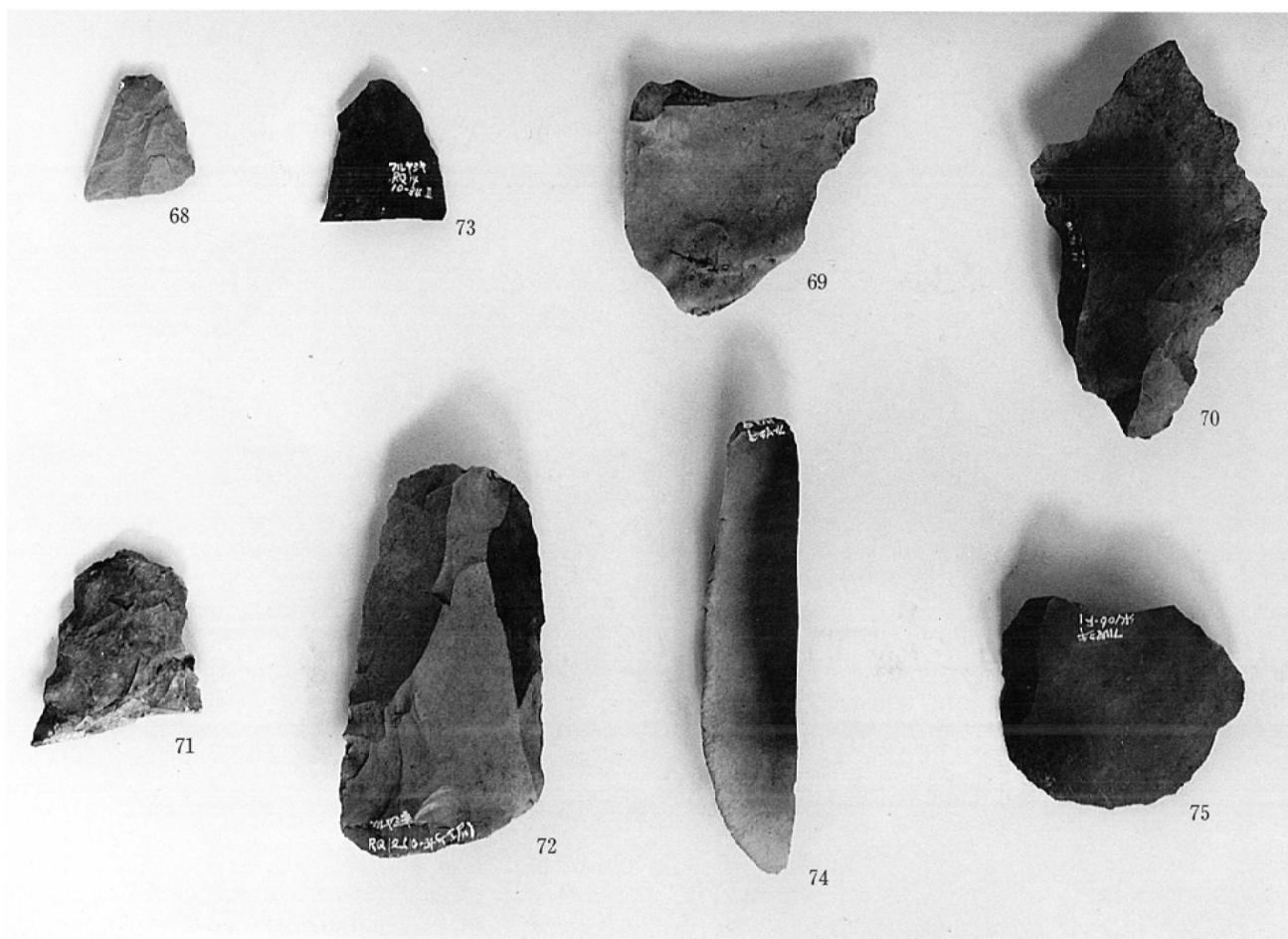


打製石器(5)背面

図版18



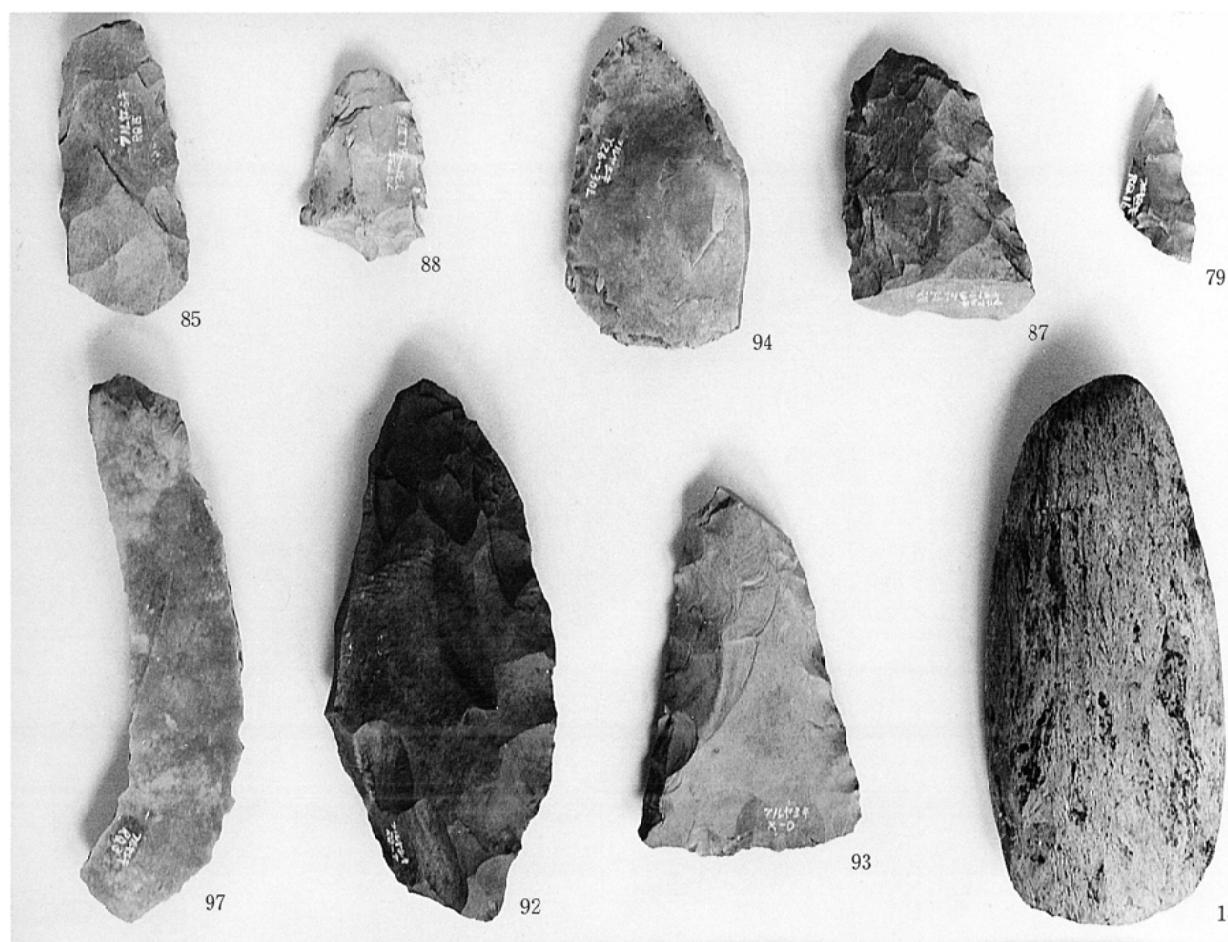
打製石器(6)正面



打製石器(6)背面

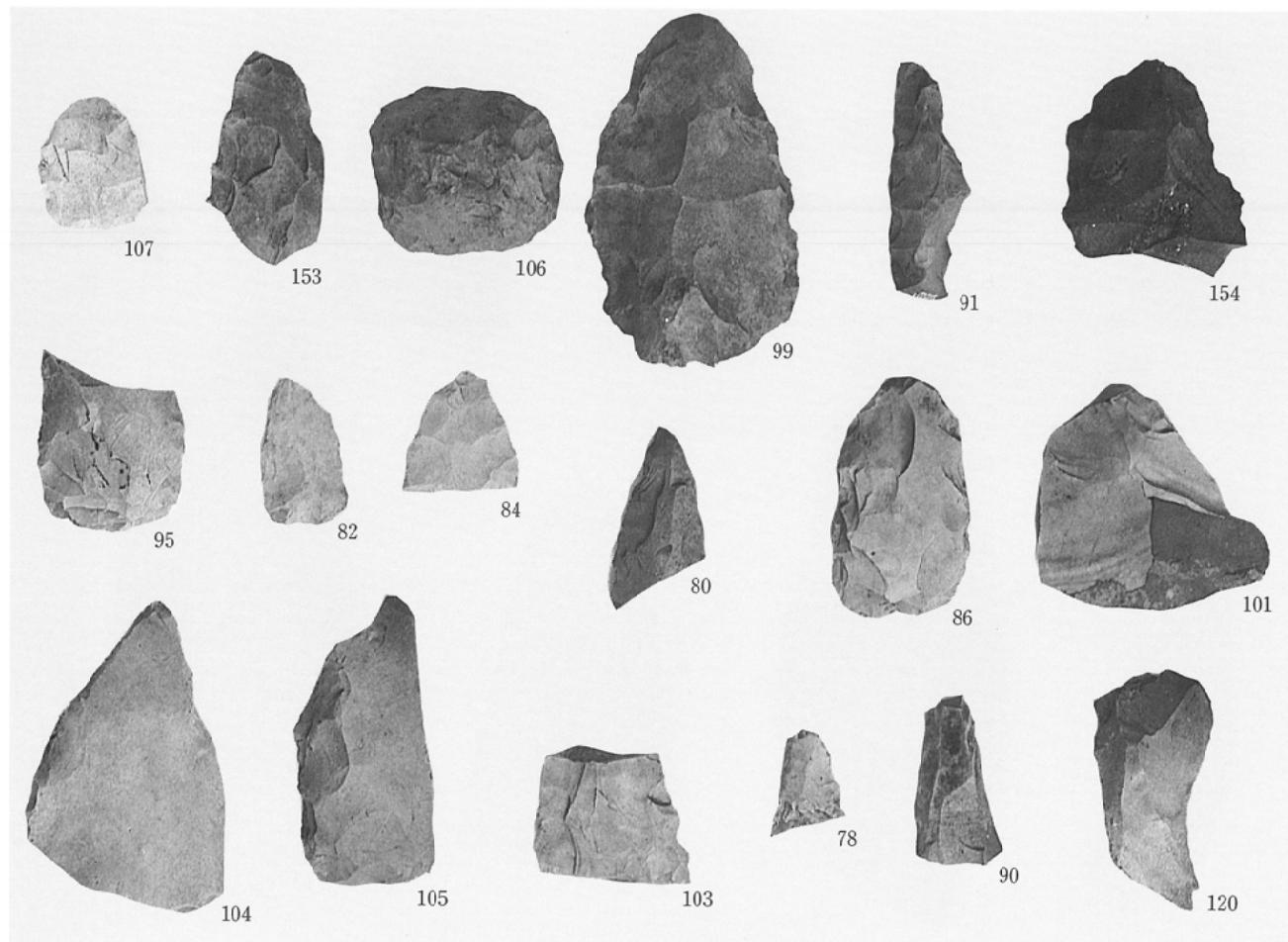


打製石器(7)正面

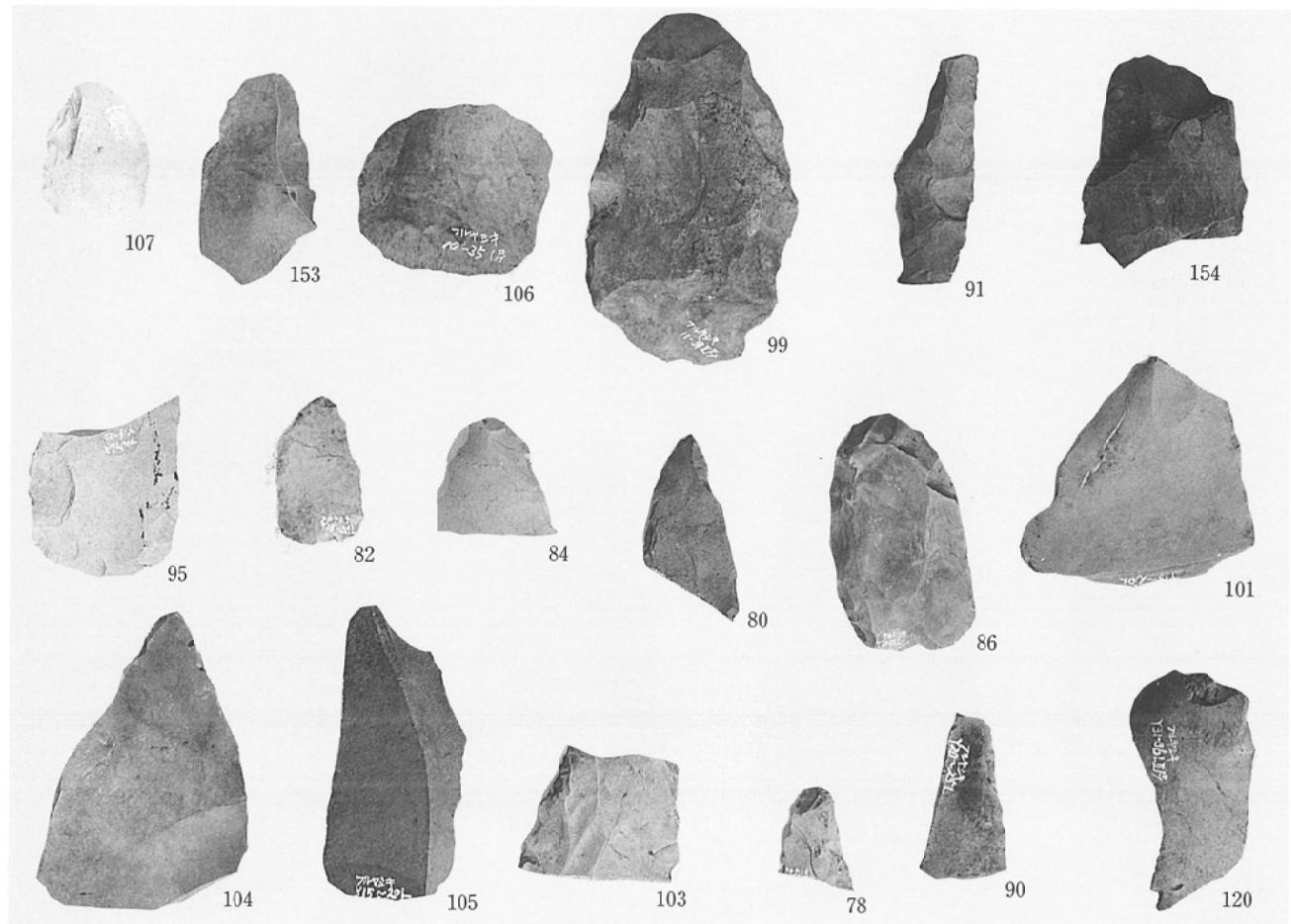


打製石器(7)背面

図版20

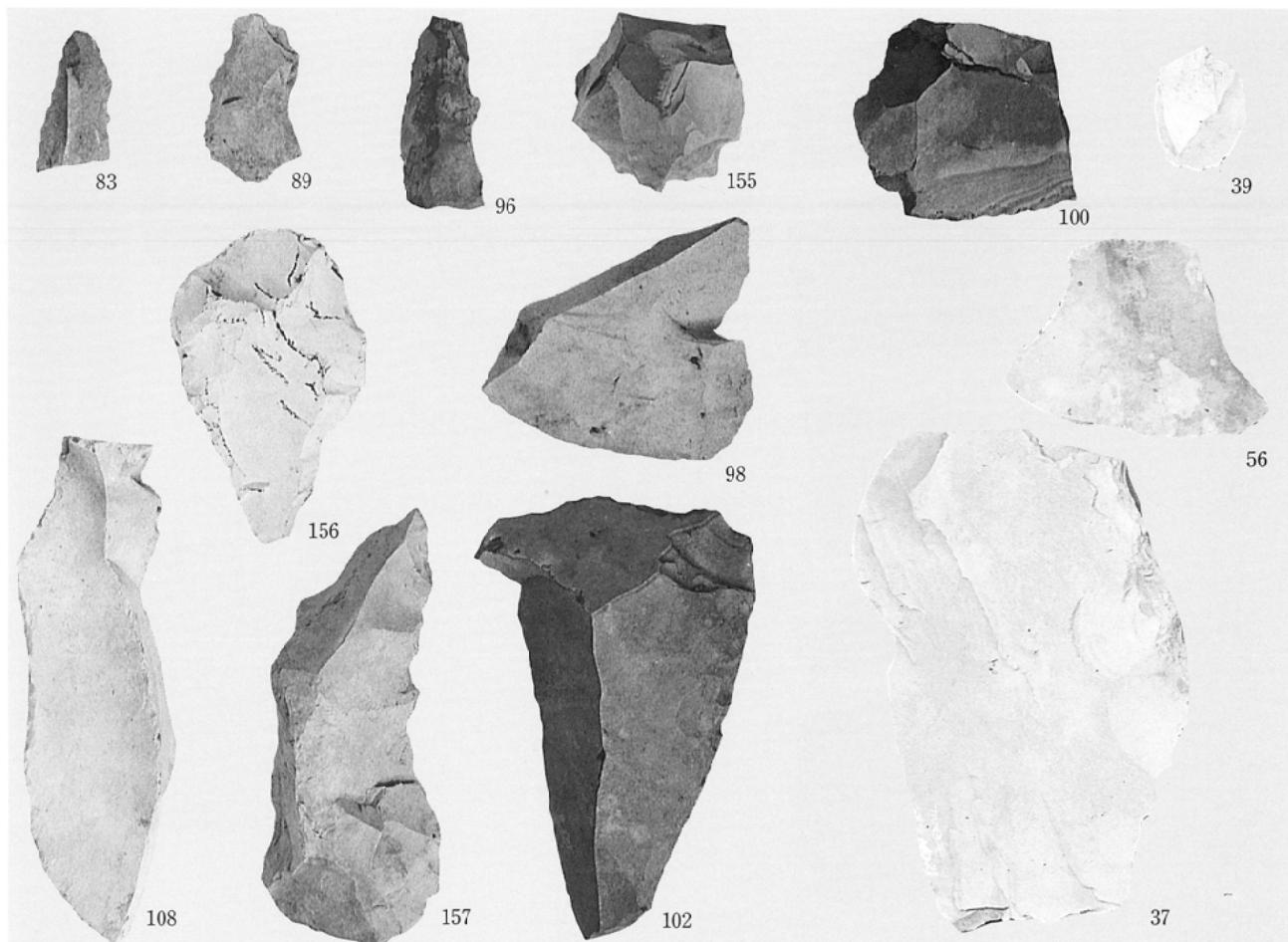


打製石器(8)正面

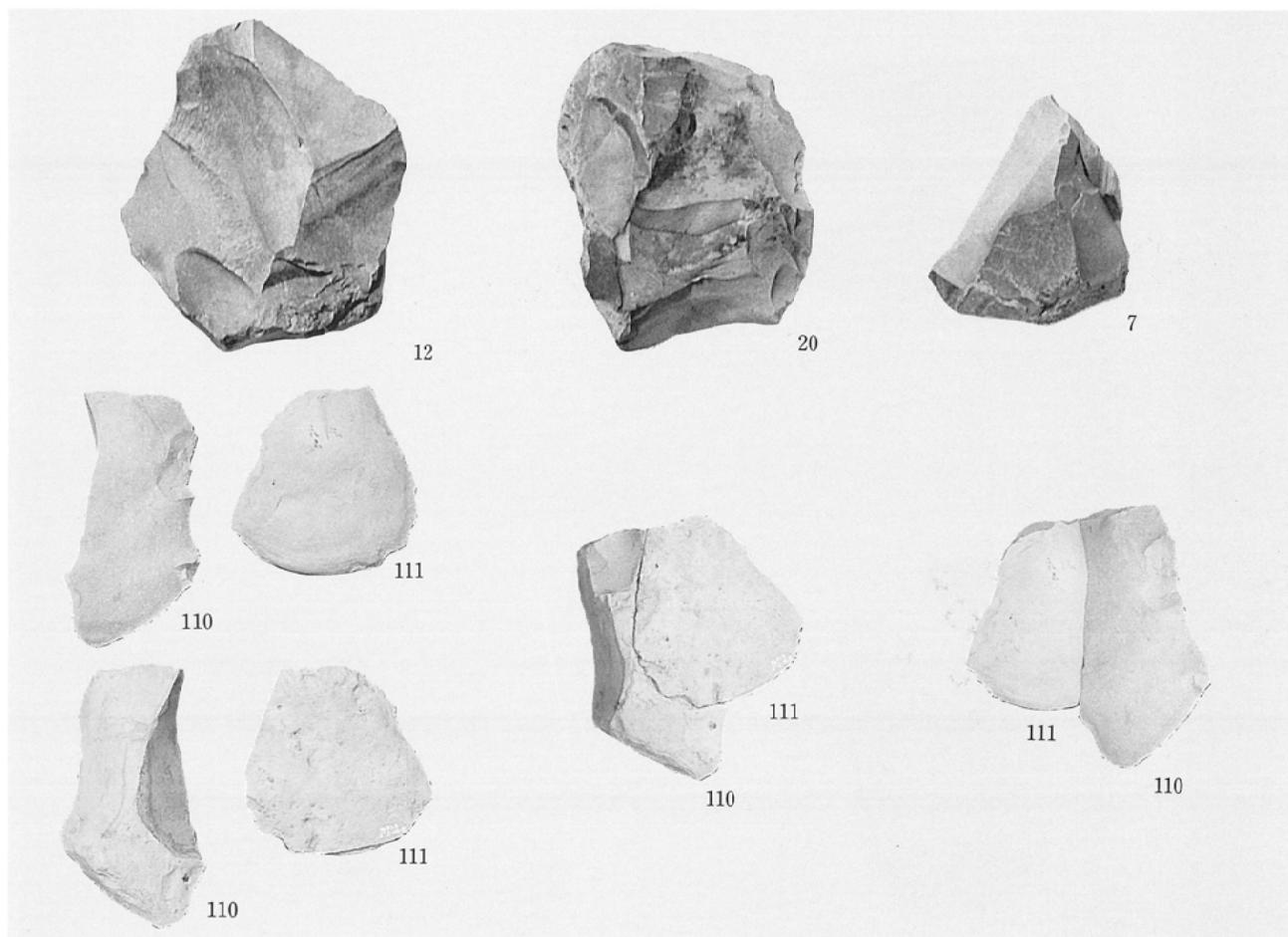


打製石器(8)背面

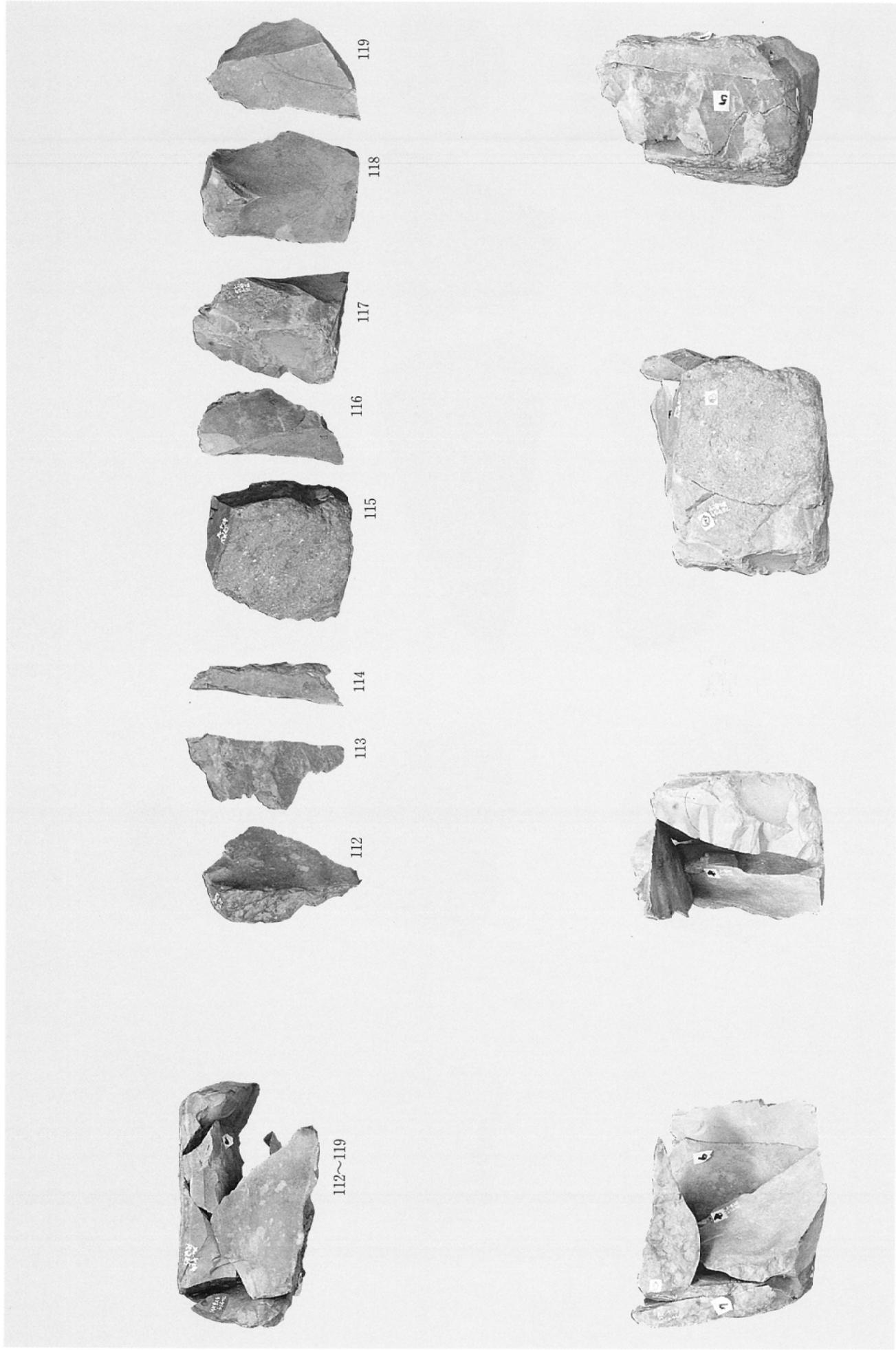
図版21

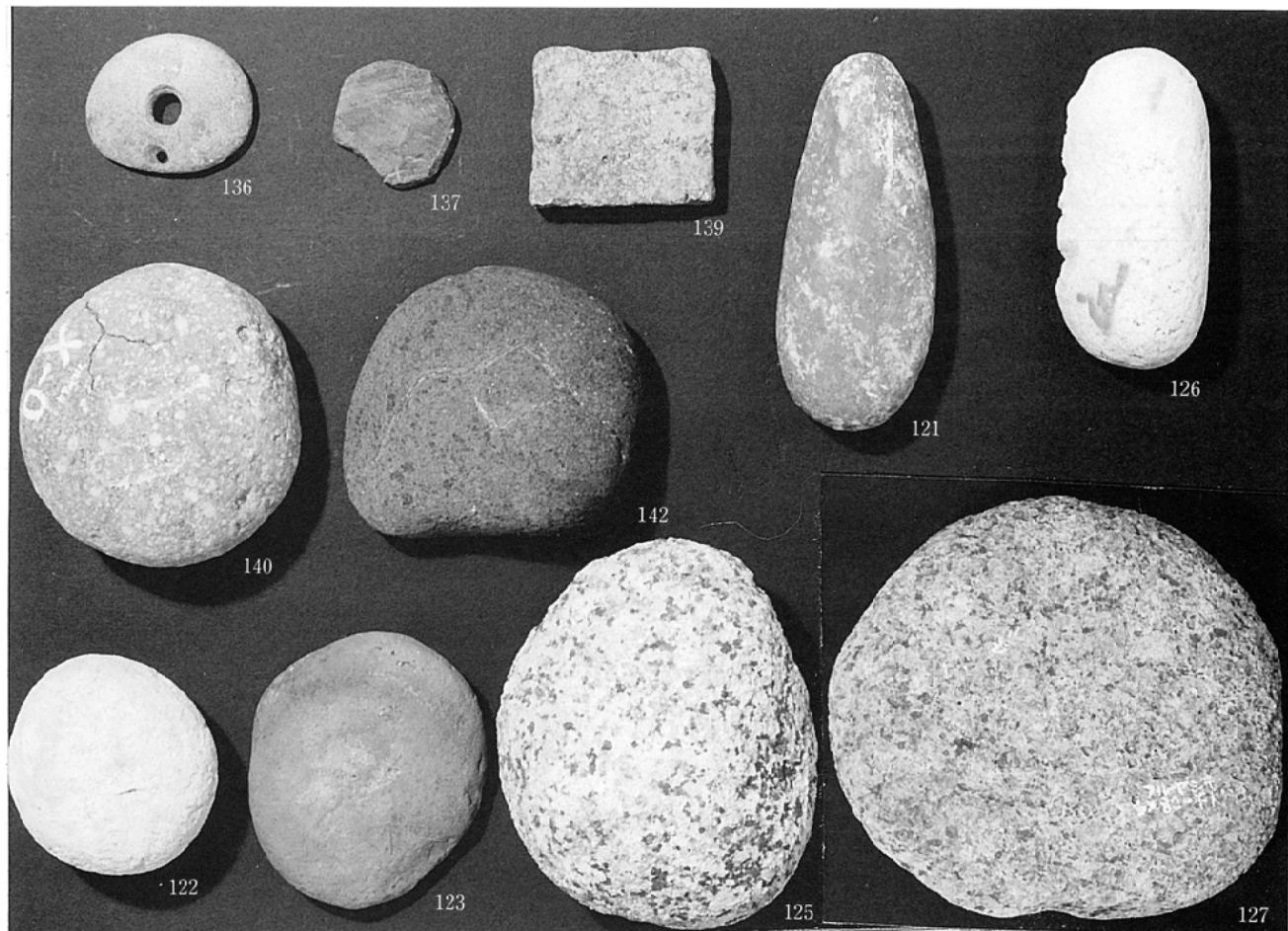


打製石器(9)

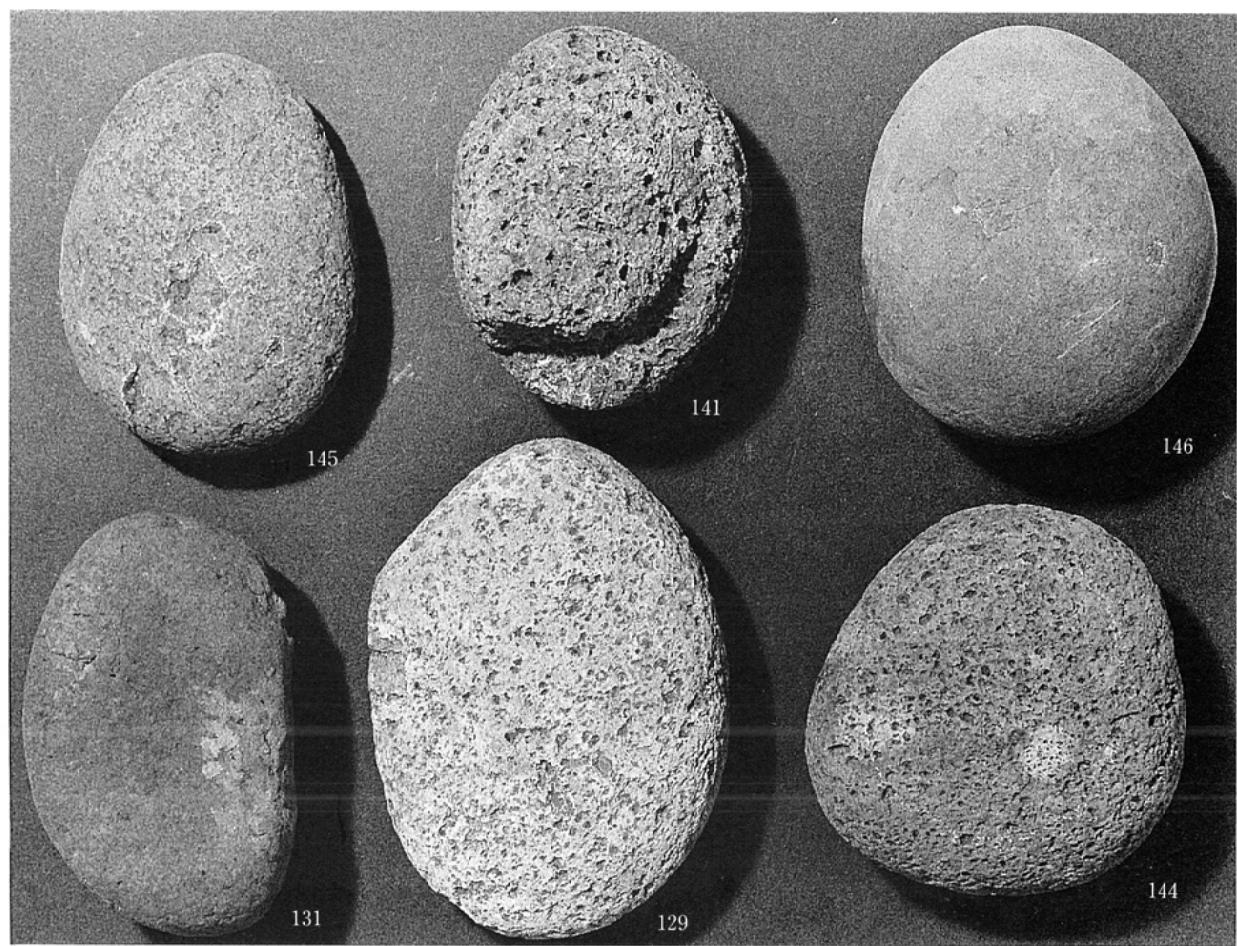


打製石器(10)・接合資料(1)

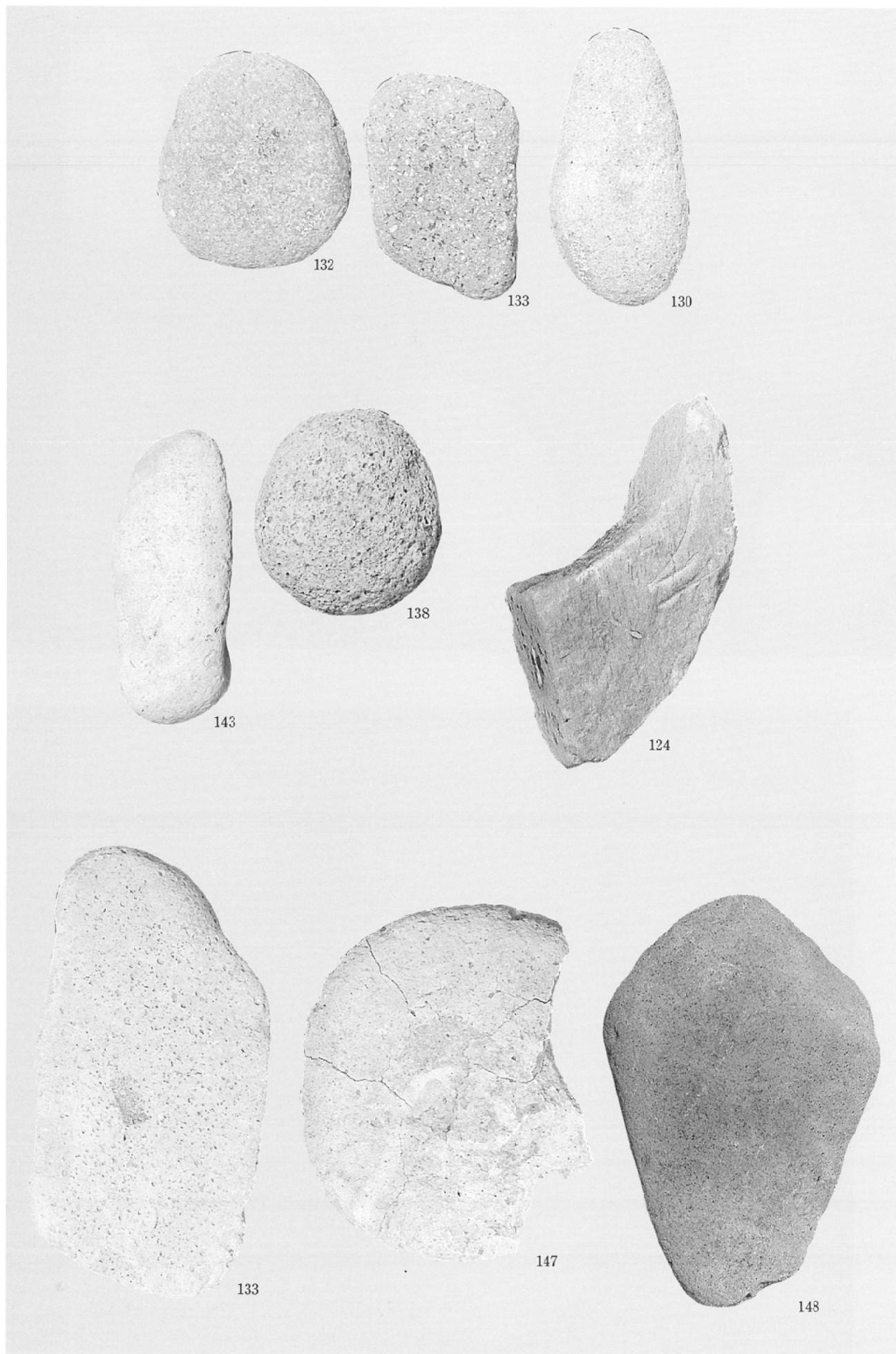




石製品・磨製石器(1)



磨製石器(2)



磨製石器(3)

付 編

# 古屋敷遺跡の放射性炭素年代測定結果

株式会社パレオ・ラボ

## 1. 測定結果

放射性炭素年代測定は、古屋敷遺跡から採取された2試料について行った。分析用試料は、いずれも炭化材を用いた。以下の表1に測定結果を示す。なお、測定は学習院大学放射性炭素年代測定室の木越邦彦氏にお願いした。

年代は、 $^{14}\text{C}$ の半減期5570年（LIBBYの半減期）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（yrs BP）として示している。付記された年代誤差は、 $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代である。また、 $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値として表示してある。

表1 古屋敷遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料番号	層 準	測定試料	コード番号	測定値(yrs BP)
No.1	EL104 (F 2)	炭化材	Gak-17784	7,960±150 (6,010 B.C.)
No.2	EL104 (F 2 下層)	炭化材	Gak-17785	6,830±210 (4,880 B.C.)

## 2. 測定結果に関する若干の考察

古屋敷遺跡では、縄文時代早期～前期の竪穴式住居跡や土坑などが発見されている。ここでは、縄文時代早期から前期初頭と推定されるS X 6 落ち込み遺構から出土した炭化材（EL104出土）について放射性炭素年代測定を行った。なお、分析試料の採取地点ないし層準等についてはここでは割愛する。したがって、考古の章を参照されたい。

放射性炭素年代測定結果は、7,960±150と6,830±210 yrs BPと試料間で約1,000年程度の開きがあるが、年代的には縄文時代早期に相当する。したがって、いずれの測定結果も考古編年とおおむね一致し矛盾しない結果である。（平成6年3月）

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第21集

ふるやしき  
古屋敷遺跡発掘調査報告書

1995年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号  
電話 0236-72-5301  
印刷 藤庄印刷株式会社

---